

始





國譯禪學大成

第二十四卷



國譯禪學大成第二十四卷凡例

一、本大成第二十四卷には、圓滿本光國師見桃錄四卷の中、卷之一より卷之三に至るまでの譯文及び原文を収載し、卷之四は頁數の都合によりて、次の第二十五卷に割愛することとせり。

一、圓滿本光國師見桃錄は、略して單に「見桃錄」とも稱し、別に「大休錄」、又は「靈雲集」とも謂ひ、足利末期に於ける禪界の明星、勅賜圓滿本光國師大休宗休和尚一代の語錄にして、關山派下、許多の語錄中、其の識見の高邁にして説示の溫雅なる、機鋒の峭峻にして文彩の典麗なる點は、本書の右に出づるものなしと稱せらる。本錄は初め國師の侍者等が輯録して世に傳へ、所在傳寫して秘藏せられしが、徳川時代享保十九年頃、師の遠孫等が相議して、諸家所藏の十數本を集めて一々校讐し、其の傳寫を質し、誤謬を改め、脱漏を補ひ、重複を刪除し、以て編定して乃ち四卷となし、延享五年に妙心寺内の靈雲院に開板せしものなり。而して其の內容は、京の妙心寺、駿河の臨濟寺、尾の瑞泉寺などの住山語錄を初め、偈頌、追悼、詩、像贊、自贊、道號頌、立地、拈香、秉炬、掩壙、預請の秉炬及び附録などより成り、何れも言々句々、臨濟・

關山の宗旨を擧揚して遺す所なく、且つ又、書中到る所に於て、國師の眼睛と風藻とを窺ふことを得べし。今次、國譯するに際しては、専ら延享の版本に依據せり。

一、書名の見桃及び靈雲は、俱に國師燕居の院名に因み、而もそは支那唐代、靈雲山の志勤禪師が嘗て桃花を見て大悟せりといふ故事に基づくものなりと謂ふ。

昭和五年十月

編者 黃楊道人識す

國譯禪學大成 第二十四卷

目次

國譯圓滿本光國師見桃錄解題……………一—二

國譯圓滿本光國師見桃錄紋……………一—二

國譯圓滿本光國師見桃錄（卷之一—卷之三）上……………一—二六六

圓滿本光國師見桃錄原文（卷之一—卷之三）上……………一—二五三

國譯圓滿本光國師見桃錄

解題

足利氏の末期は、應仁の戦亂以來、國內到る所、干戈の巷となり、兵亂絶ゆる時なく、ために政治は勿論、文學・宗教の頹廢其の極に達し、世は全く暗黒時代と化し了れり。斯の時に當りて、塵外に超然として文學・宗教の命脈を維持したる者は、僅かに五山の僧徒のみなりき。本語録の著者大休宗休は、實に斯る亂世に出で、主として關山派の宗旨を宣明努力したる大宗師なり。

斯の見桃錄は乃ち國師一代八十餘年間に亘る平生の擧揚、開堂、示衆、立地、偈贊、乘炬等に關する語要を蒐録したるものにして、其の機鋒の峭峻なると文章の典雅なるとは、關山派下の語録中、多く其の比を見ざる所なり。而して本書は凡例にも述ぶるが如く、初め國師の侍者某等が輯録して見桃錄と題し、所在に傳寫珍藏せられしが、而も其の多寡均しからず、踳駁尤も甚だしきを以て、國師の滅後、約二百餘年を経て、國師遠孫の諸老胥議りて、諸山の藏書十數本を羅致し、交互に磨研し、魯魚の誤りを質し、缺漏を補正し、疊沓を删除し、編して以て四卷となし、無著道忠を初め、龜年門派の諸老二十名、月航門派の諸師二十九名、太原門派の諸老二十四名の助縁を得て、延享五年に開刻せしものなり。

爾來、廣く天下叢林の間に流布して今日に到れり。今其の内容の一般を観察するに、第一卷には、永正十三年、正法山妙心寺入寺の法語を初め、再住妙心寺語録、駿州大龍山臨濟寺語録、尾州青龍山瑞泉寺語録及び偈頌、追悼、詩などを收め、第二卷には、像贊、自贊、道號頌(上下)等を録し、第三卷には、立地、拈香、秉炬、掩壙などを記し、第四卷には、預請の秉炬及び附録を收載せり。就中、道號頌、立地、掩壙及び預請の秉炬などは、他の語録には餘り見當らざる所にして、特に本録の特色となすべし。

國師の傳を案するに、諱は宗休、號を大休と謂ひ、姓氏を詳かにせず、幼にして京の東福寺の永明庵に在つて、山中の諸老に見え、後、洛西龍安寺の特芳禪傑に參じて、親しく印記を承く。永正三年、特芳の順世するに及んで、移つて西源院に居して龍安寺を兼管し、同じく十三年、詔を奉じて妙心寺に出世す。尋いで正法山の側に靈雲院を創めて、印を解いて退休す。享祿四年、駿河の太守今川義元、同國安倍郡安東村に大龍山臨濟寺を建て、師を請じて法を開かしめ、且つ開山の儀を行はしむ。ために一時の英俊、輪下に奔集す。幾もなくして京に回り、再び妙心寺に住す。尋いで尾張丹羽郡の青龍山瑞泉寺を董す。天文十一年、後奈良天皇、師の道譽を聞き召され、宮中に召して法要を問ふ。奏對旨に稱ふ。帝、袂襟を啓いて弟子の禮を執り、屢々召して參訊す。遂に所契ありて親しく宸翰を賜はる。同じく十八年八月二十四日寂す。壽八十二、靈雲院に塔す。著書見桃錄四卷あり、嗣法、月航玄津、東庵宗敬、龜年禪愉、太原崇孚等十二人あり。翌年、後奈良天皇、特に詔して圓滿本光國師の徽號を賜ふ。

國譯見桃錄叙

圓滿本光國師、徒を正法山に匡すの後、有馬郡主赤松氏の女、模堂夫人有り、國師の爲に、梵宮を山の、兌方に剏建して、拜請して之れに居らしむ。國師、靈雲を以て扁と爲す焉。晩に再び細川氏綱有り、一精舍を大雲山麓に營み、以て國師の禪燕に供す、復た名くるに見桃を以てするなり。皆志勤禪師の機縁を用ふ。必ず説有らん、今に追んで而して其の旨を測るべからず矣。因つて國師平生の擧揚、開堂、示衆、立地、偈贊、當時撮蒐する者、題して見桃錄と曰ふ。其の録傳寫して、所在秘珍す、祇だ是れ多寡均しからず、踏取尤も甚だし。遺賢の諸老、常に以て憂と爲す焉。甲寅の歲、胥議して編定し、乃ち家々の所藏十數本を羅致し、交互摩研し、魯亥を質し、閃脱を補ひ、疊沓を鏟除し、昨散を

國譯見桃錄叙

見桃錄。本書の總名、全四卷より成り、本光國師の語要を集めたるものにして、國師の侍者編輯せしものなり。この序は、無著道忠の文なり。而して元文二丁巳の年重刊せるものなり。見桃の名は、國師燕居の地を見桃院と言へるに依る。蓋し志勤禪師、嘗つて桃花を見て大悟せるの機縁を用ふるなり。

宗休は大休と號し、東福永明庵に入りて剃髮遊戒し、特芳和尙に龍安に參じ、密かに宗記を受く、後妙心寺に出世し、駿州大守今川義元、敦く請うて州の臨濟寺に居らしむ、再び洛の妙心に住す、參究するもの雲の如く集まる、後奈良帝深く歸依し給ふ、天文十八年示寂す。

兌方は西方なり。

靈雲志勤禪師なり、大瀧山にありて修業す、因に桃花を見て悟道す、頌あり曰く、三十年來劍を尋ねるの客、幾回か

① 倫貫して、釐して四卷と爲す。是に於て乎、
 守塔、衆命を衞み、來つて 遜窩を款いて忠に
 告げて曰く、「參訂既に竣る矣、請ふ事情を卷首
 に引せよ。」道忠伏して惟れば、國師、海宇横潰の
 世に處して、天源所傳の 宗猷を墜さず、道徳
 雁鴻、文章、藻績、一代に卓絶す。聖主法を稟
 け、武豪化を仰ぐ。禪教眞俗驪飛慕嚮す。委化
 より今に迄るまで、二百の年所に垂として、雲
 耳湧隨して、舊稿を點定し、之れを木に刻つて
 而して遺言を宣通し、以て毛滴の報答に擬す。源深く流長きに匪ざるよりは、則ち豈に能く之を致さ
 ん耶。此れ即ち是れ家庭の盛事なり。忠 衰窺十物、 隨喜三歎、覺えず筆硯を鳴して、塗糊紙に滿
 つ。敢て茂めて衆囑に帥ふ耳矣。凡そ是の錄を展讀せん者、見桃の一着を味却すべからず、苟も徒
 に葉を摘み枝を尋ねて、或は國師の面前に在らば、則ち必ず 熱倍三十を免れず矣。

元文二歲丁巳に次る壯月二十四日

遠孫種比丘道忠謹書

葉落ち又枝を抽んづ、桃花を
 見しより後、直に如今に至り
 て更に疑はず」と、即ち此の
 機縁に因るなり。
 ② 色雜りて同じからざることを、
 まだらないふ。
 ③ 齋習などに同じく、本光國師
 以後、同じ流れを汲む諸老を
 いふ。
 ④ 事文類聚に曰く、「亥と承、涇
 と涇と分つなし、魯と魚と、
 瀋と瀋と辨するなし」と、文
 字の誤りをいふ。

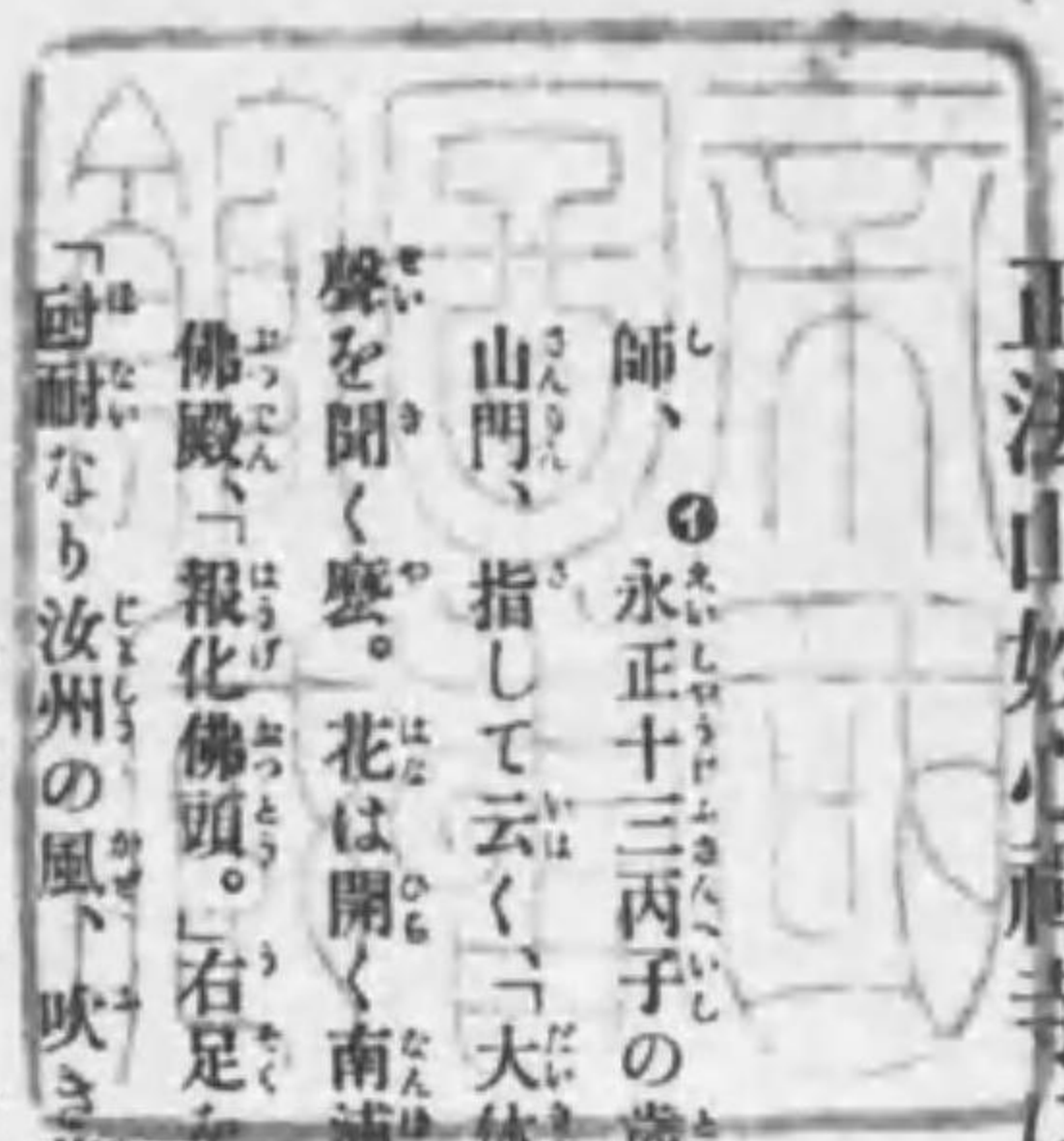
⑤ 躡は飽に同じ、木の面を削る
 器なり。
 ⑥ 順序正しくまとむるをいふ。
 ⑦ かくれ屋といふに同じ。
 ⑧ 宗道なり。
 ⑨ 五彩にて畫ける模様如く、
 鮮かなること。
 ⑩ 老衰などに同じ。
 ⑪ 他人の善根功徳を修する行爲
 に對して、誠心誠意を以て贊
 成の意を表すること。
 ⑫ 倍は杖なり。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之一

遠孫比丘衆等重編

正法山妙心禪寺に住する語錄

侍者 某 編



師、永正十三丙子の歲入寺す。
 山門、指して云く、「大休歇の地、乾坤一人。」大衆を召して、「門外の雨滴
 聲を聞く麼。花は開く南浦の春。」喝一喝。
 佛殿、「報化佛頭。」右足を擧げて、「誰か獨足にして立つ。」帽を卸して、
 「耐なり汝州の風。」吹き落す老僧が笠。「便ち禮拜す。
 土地、「東坡居士、護法明王、箇の什麼をか護す。山色清淨、溪聲
 廣長。」
 祖堂、「吾が這の獅子窟、野狐精を容れず、去れ去れ、天下太平。」

① 紀元二千七百七拾六年後柏原天
 皇、將軍足利義植の時なり。
 ② 耐は堪へるなり。
 ③ 土地堂なり、土地神及び護法
 神を奉祀する堂なり。
 ④ 蘇東坡は老泉の子、其の悟後
 の偈に曰く、「嵐山烟雨浙江
 潮、未到千般恨不消、到得
 還來無別事、虛山烟雨浙江
 潮」と、これによりて其の大意
 を知るべし。

① 據室、機關脫落、別に生涯を討ぬ。竹篋を放つて、拄杖不在、且坐喫茶。

② 救黃、此れは是れ 三十三天大威德天子、尼拘陀を折つて佛の爲に蔭涼を作す底の一枝なり。甚と爲してか山僧が手に落つる。拈じて春風に分付す、櫻桃笑つて口を開く。

③ 山門疏、枯樹老僧、山門の境致、露柱古佛、今日交々參る。疏を擧して、是れ什麼ぞ、花は錦に似、水は藍の如し。

④ 同門疏、太湖三萬の月に説向して、惠山第二の泉を品論す。誰か道ふ千里遠しと、元來一味の禪。

⑤ 拈衣、北秀の爲にする者は、右を袒げ、南能の爲にする者は、左を袒げ。搭起して、鰲蚌相持す、漁者の利なり。

⑥ 登座、高々たる峯頂、正法の船を盪す。因「鰲龍行く處浪滔天。」

祝香、大日本國山城州平安城、正法山妙心禪寺、新住持傳法沙門、宗休、開堂令辰、虔んで寶香を薫き、端に爲に、今上皇帝聖躬萬歳々々萬々歳を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、百王百代、芥城空しうして、而して壽山彌高し。乃子乃孫、桑田變じて而も仁澤何ぞ竭きん。

將軍、此の香、大樹奕葉仙李盤根、爐中に薫向して、大檀越、準三宮の爲に鈞算を資倍し奉る。伏して願はくは、九州四海、遠人服し分戎狄和す。二京三都、大厦成つて而して燕雀賀す。補袞の手を將つて、正法輪を轉せんことを。

⑦ 開山堂、祖師堂のことなり。野狐の精魅、化けものといふ意。

⑧ 新命住職の晉山式に據室の法あり、方丈室中の正面に椅子を設け、椅前の卓に銀燭一對、香爐一口を備ふ、大衆丈室内の東西に雁立し、兩班は對立す、侍者は知事の後に一班立列し、門首は頭首の上肩に立つ、新命進んで直ちに椅子に倚る、時に燒香、侍者、知事の頭邊を過ぎて卓前に進み、香を燒いて問訊す、之れを請法問訊といふ。侍者並びに歸るや、新命、法語を唱ふ、之れを以て據室の式畢る。

⑨ 山堂肆考に云く、唐の太宗の時、黃麻紙を用ひて詔勅文を寫す、將相を拜叙する制書には黃麻紙を須ふと見えたり、繪紙を賜ふことはいふ。

⑩ 初利天のことなり、須彌山説

の利をとらるゝに喩ふ。戰國策に、「趙の燕を伐たんとするや、燕代燕の爲に燕王に謂つて曰く、今日臣來りて易水を過ぐ、蚌方に出て曝す、鰲其の肉を啄む、蚌合せて其の味を藉む、鰲曰く、今日雨降らず明日雨ふらずば、即ち死せる蚌あらんと、蚌、鰲に謂つて曰く、今日出でず、明日出でざれば、死せる鰲あらんと。兩者相捨つることを覺せず、漁者得て而して之れを並に據にす、今趙、燕を伐たんとす、燕趙久しく相支へ以て大衆を散す、臣、強秦の漁夫たるを恐る」と。

⑪ 高座に登ること、説法の座席に就くこと、陞座に同じ。

⑫ 舟を漕ぐ時のかげ聲、又は發語の聲なり。

⑬ 本光國師の諱名なり。詩に曰く、「已に見る松柏摧け

によれば須彌山の頂上に四峰あり、而して各峰に八つの天あり、その中央に喜見城ありて、帝釋天これに住す、四方の三十二天を統ぶと。

⑭ 尼拘椶陀、又は弱拘椶陀などと書す、無節と譯す、樹幹高大にして、葉は柿の葉の如く、果は枇杷に似たりと。

⑮ 住持を勸請する宣疏なり。官府の疏なきときは、山門疏に聖壽を祝せよの語を加ふ。

⑯ 賀疏の一種、新命の住持と同門の人が、同門の故を以て其の入院を賀して呈する所の文疏なり。

⑰ 法衣を拈すること、衣は嗣法の信として師之れを弟子に授く、弟子衣を拈じて法語を擧して披す。

⑱ 黃梅の禪、南北に別る、神秀は北、慧能は南なり。

⑲ 兩者利を争ひて、他の者に其て新と爲る、更にきく桑田變じて海と成ると、時の永次の意にとる。

⑳ 三宮は三后に同じ、三后は太皇太后宮、皇太后宮、皇后を云ふ、之れに準するをいふ。

敕使、「此の香天上の 棘林より貴く、海外の婆律より重し。爐中に燕向して、敕使尊官左中辨の爲に祿算を資倍し奉る。伏して願はくは、宗門の功、第一、名、甘露の麒麟に上る、洛社の會十三、齡、元祐の司馬に逮ばん、以て規し以て祝す。惟れ德惟れ馨し。」

京兆、「此の香爐中に燕向して、外護の檀越源府君右京兆の爲に、祿算を資倍す。伏して以れば、韓京兆、八代の衰を起す、才名を斗北に仰ぐ。神堯帝第一門の事の爲にす。義兵を晉陽に觀し、吾れ其れ庶幾せん乎、民の歸する所なり。」

嗣香、「這の一瓣香、昔、大燈國師、劈いで兩片と作し、二神足に付するや、正法眼を以て、第一の神足吾が 關山祖に付し、諸莊園を以て第二の神足他の 徹翁師に付す。是れ十目の視る所なり。蓋し碧落の碑に贖本無き者は、只だ、花園の一枝のみ、餘薫八傳して山野に至る。山野之れを秘して、三重五重複子に裏む、即今拈出して、前住當山特芳骨查に供養す。寫て法乳に報せず。爾に出づる者は、爾に返る。」

垂語、「世尊密語有り、迦葉覆藏せず。禪牀を擊つて、會す麼、鷓鴣啼く處、百花香し。參、問答録せず。」

提綱、「乾坤の内宇宙の間、一物有り黒うして漆の如し。護身の靈符、願神の妙術、之れを得る者は、二三に禍胎し、四七に濫觴す。著々出身有り、門々大吉を書す。林際の風顛、之れを得て金剛王と作す。正令當行、巴蜀雪消して春水來る。松源の職祖、之れを得て黑豆の法を用ふ。孤機峭峻、湘潭雲盡きて暮山出づ。慙慙不慙麼、依倚として越人の鼻と爲るに相似たり。不慙麼慙麼、彷彿として楚人の乙と爲るに同じからず。吾が皇之れを得て、西の方、混明を極め、東の方扶桑を略す。晝は、閻浮に降り、夜は、兜率に昇る。」拄杖を拈じて、「山僧今日之れを得て、國の爲に開堂し、此の事了畢、此の故に聖に在つては聖に同じ、巾上に堯天を戴く。凡に在つては凡に同じ、杖頭に佛日を掲ぐ。蕉芽敗種齊しく恩に霑ふ。森羅萬象全くと歸す。直に得たり、石女立つて三臺を舞ひ、木人坐して密策を吹くことを。這の新翻の一曲、諸人還つて委悉す麼。倘し復た未だ然らずんば、高く一律を提げ去らん。」卓一下して、「摩訶般若波羅蜜甚深般若波羅蜜。」

となる、温公薨する年六十八、文正と諡す、著す所資治通鑑の外、文集八十卷、迂書、津水紀聞等二十種あり、誠忠信實を以て顯る、德望一世に高し、之れに比するなり。

京兆尹は支那の官名、三輔のうちなり、以て帝室を輔翼す、尹は地方長官、即ち京師の守護職なり、韓京兆は文公の事をいふ。

大德寺開山の宗峰妙超禪師の號。花園上皇特に勅して興禪大燈國師と賜ふ。

弟子の傑出せるものなり。妙心寺開山關山慧玄禪師なり、大燈國師に參じ、關の公案を透徹し印可を蒙り、關山の號を興へらる、花園天皇の降依特に深し。

大燈國師の上足なり、寛永中徹翁の遠孫澤庵彭公、道庵世

に鳴る、後水尾上皇、宮に召して法をきく、上皇大いに喜び將に國師の號を賜はんとす、彭辭して曰く、「古來、微號を蒙るもの皆名徳の宗師なり、某甲何ぞ敢て當らん。徹翁禪師は大燈國師の上足、吾が門の宗祖なり、未だ此の號あらず、伏して願はくは重れて道誼を賜はらんことを。」上皇其の言を嘉し、天應大現國師とたまふ。

自序、「宗休、出頭の 跋鼈、顛倒の狂猿、呵、何の幸ぞ哉。天書遠く召す滄浪の客、是れも亦時なり。春衣夜宿す杜陵の花、慚赧々々、^① 忸怩々々。」

白槌の謝、「開堂の次で、^② 共しく惟れば、養源堂頭大和尚、規矩歩、馬勝の威儀を學ぶ、放去收來、洋嶼の宗旨を滅す。千古叢林觀を改む、^③ 三代の禮樂重ねて新なり。茲に辱うす、尊を降つて卑に就き、槌を鳴して法を證す。下座して、必ず^④ 十笏室に趨つて、一炊巾を展べん。伏して乞ふ道照。」

諸山の謝、「次に惟れば、諸位 東堂大和尚、諸位西堂和尚、道香掩ひ難し。譬へば梅檀の葉葉風を起すが如し、禪林光有り、宛も珊瑚枝枝月を輝ふるに似たり。(擗を一に擗に作る。)

若し褒詞を證さば、恐らくは大徳を瀆さん、衆慈賢察せよ。」

總謝、「又惟れば、山門東西の兩序、諸寮 辨事、一會の海衆諸位禪師、逐一の謝を致すべしと雖も、此の日開堂、専ら祝聖の爲にす。敢て繁詞せず、併せて小參の次でを期す。各昭亮せよ。」

拈提、「記得す、報恩の逸禪師、因に僧問ふ、「佛、一大事因縁の爲に出世し、未審し和尚の出世如何。」逸云く、「恰も好し」と。一問一答、諦當なることは甚だ諦當、那の僧の作略、奴を認めて郎と作す。報恩好佛、只だ是れ光無し。人有り若し問はん、「新妙心出世如何」と、他に祇對して道はん。「拂一拂して云く、「九萬里の鵬鷗かに翼を展ぶれば、一千年の鶴便ち翔翔す。」

當晚小參、垂語、杖を拈じて、「虚堂の拄杖 殺活我れに在り、試みに觸著して看よ、毒花、毒果、在り麼。」問答録せず。提綱、拂子を豎起す、「吾れに一柄の拂子あり、千聖曾て携へず、列祖も提不起、豎に起る時は、則ち豎に^⑤ 三際を窮め、横に拈する時は、則ち横に十方に亘る。是れに因つて明月清風を拂ふ、未だ^⑥ 趙州をして一生受用に

城勝、金州、好金土等と譯す、古代印度の世界説にて中央なる須彌山の南海中に存する三角形の島洲なりとす、もと印度大半島に名けたる名なれども、和漢の佛教徒は支那日本等も開浮提の一部と考へ、南開浮提大日本國などといへり。

③兜率は都史多、兜率陀、觀史多ともいふ、妙足、知足、止足等の譯あり、欲界六天の第四須彌山の頂上十二萬由旬の處にありと。

④笛の一種なり。

⑤足なへのかめなり。

⑥心に恥づる貌。

⑦白椎に同じ、白は事を告ぐる意、槌は椎にして撃つて響を爲す具、白椎は尙ほ羅白大衆と云はんが如し。碧巖集に、「世尊一日陞座、文殊白椎して曰く、諸製法王法、法王法

如是」とあり、禪林多事な報するに白椎の法に依つてする風習、文殊の白椎に始まる。

⑧共は悉に通じ、うやくしくなり。

⑨夏、殷、周をいふ、禮樂の最も整へたる時代なり。

⑩十笏云々は維摩方丈の故事をいふなり。

⑪西堂の對、當時前住の人の居處をいふ、蓋し東は主位なり、當時前住の人は是れ舊主なり、故に東堂に居る、又東庵ともいふ。

⑫他山退院の人、來りて化を助くる人をいふ。

⑬山門列職雜務の人を辨理する人を云ふ、即ち事務を辨備する雜役、又首座寮の行者なり、第三座とも云ふ、法戰式上にて開口闡要といふものこれなり。

せしめず。霹靂天地を驚かす、直に得たり百丈三日耳聾することを。來由有り、來由無し。此れに即して用ひ、此れに離して用ふ。甚だ希有、甚だ希有。日本國裏に禪を説く。也太奇、也太奇。大唐國裡に鼓を打つ。正愆慶の時、杖を拈して云く、「同行の木上座、忍俊不禁にして跳り出でて云く、「和尚愆慶に道ふ、早く是れ龜毛長きこと數尺、德崎答話せず、汾陽夜參を罷む、之れを眞の家訓と謂ふのみ」と。山僧咄して云く、休みね休みね、備が一拶、恰も兎邊に角を求むるに似て相似たり。只だ頭上に乾坤を定め、毛端に巨海を呑む底の一句子の如きんば、如何が箇の消息を通じ去らん。」卓一下して、「芍藥花開く菩薩の面、櫻欄葉は散す。夜叉の頭。」

自序、宗休、暗證の禪師、央庠の座主、忝く宸藻を拜して、叨りに名監を汚す。類に汎すること鮮からず。
謝語、小參の次で、「共しく惟れば、南昌堂頭大和尚、西源の的流、急雪鶴鶴相並ぶ。南昌の故郡、落霞孤鶩齊しく飛ぶ、吾が法兄に愧づること莫れ、豈に尊貴墮と曰はん。春寒花遅く、保愛珍重。」

①古則を提示して之れを拈評すること、提唱、拈古に同じ。
②宗休禪師をいふ。
③古來禪林に於ては開堂の當日は必ず昏鐘後に小參を行するを例とす、これを當晩小參といふ。
④過去、現在、未來の三世を云ふ。
⑤南泉普願の法嗣なり。
⑥「也たはなはた奇なり」の意。
⑦「まさに斯くの如き時」といふが如し。
⑧徳山宣鑑禪師小參に曰く、「老僧今夜答話せず、問話の者あらば三十棒と、時に僧あり、禮拜す、山便ち打つ、僧曰く、某甲未だ問話せざるに、什麼として打つ、山曰く、備は是れ何處の人ぞ、僧曰く、新羅の人、曰く、未だ船舷を跨らず、好し三十棒を與ふるに、當此に於て省あり。」

次に惟れば、養源堂頭大和尚、聲價大いに振ふ、天下徳備齒の達尊を仰ぐ。典刑猶ほ存す、僧中才學識の三長を得たり。誰れか嚴肅せざらん乎。又惟れば、大心堂頭大和尚、大心の弟子、龍泉を舌端に掉ふ。本色の白拈、虎鬚を這裡に拈づ。造次顛沛、宗旨を失はず、誰か敢て近傍せん乎。

更に惟れば、山門、兩序、東班都寺禪師、兩翼相遙ぶ。鷲序鶴立班を分つ、百廢具に興る。鯨暗羅叔響を革む、亦偉ならず乎。
監寺禪師、則監院、青林の禪を扣く。丙丁火を求む。會和尚、白雲祖を接す。玉人播を治す、其れ然らず乎。
悅可禪師、其の才や寔に後佛に紀綱たり、其の機や泥んや仙陀を陶鑄す。是れ華姪の提唱にあらず乎。
副寺禪師、副寺禪師、法財を護し、世財を護す。父の蠱を幹くし、母の蠱を幹くす。亦宜しからず乎。
典座禪師、直歲禪師、雲母を蒸して飯と作す、典座の妙手乎。虚空を束ねて棒と爲す、直歳の活機なり。

①梵語、勇健、暴惡と譯す、八部鬼衆の一、又捷疾鬼ともいふ、天夜叉、地夜叉、虚空夜叉の三種ありと。
②上堂、又は法戰の後、法要の終末に臨んで、當事者たる堂頭又は座首よりする隨喜の感謝の語。謝辭に同じ。
③此の二句は唐の王勃が滕王閣序に見ゆ。
④古の鋭劍なり。
⑤白晝、人の物を巧にぬすみとるをいふ。
⑥瞬時の間を云ふ。千字文に、「仁慈隱惻造次離れず、節義廉退顛沛斷けず」と。
⑦西序、東序をいふ。
⑧鯨のほゆる、ぬもりの黙すること。
⑨丙丁は火のえ、火のとにして、童子は火の擬人稱なり、火は火の神のこと。
⑩揚岐法會禪師なり。

又惟れば、西班牙堂中座元禪師、佛祖の權衡、人天の眼目、徒を匡し衆を領す、寧ろ講經の首座と曰はん乎。尊を降つて卑に就く、諸れを退位の菩薩に譬ふるのみ。蓋し瓜葛の法系を忘れざるの謂乎。

後班座元禪師、(後班を一に後版に作る)吾が徒を輔贊して、小釋迦の懸記に合す。斯道を黼黻して大禪佛の高蹤を躡む。正に好し力を著くるに。

記室禪師、翰墨の膏肓未だ療せず、螢雪の苦夫旃れを勉めよ。

知藏禪師、知藏禪師、白傳が詩、大藏經に入る、老韓傳を同じうす。

碧岩集公子行を廣く。涇渭流を異にす、入と不入と、公其れ甄別せよ。

知寶禪師、知浴禪師、大應客を徑塢に接す。朝一人、暮一人、太原、浴を雪峯に主る。火三昧、水三昧、古に今に、至れり矣、盡せり矣。

侍香禪師、戒香定香解脫香、天生の司南を鼻孔に了す。塵説、刹説、熾然説、吾が道已に東するの證明を謝す。

侍狀禪師、侍客禪師、侍藥禪師、書を馳せて家に到らざるは侍狀なり、客を報じて帝郷に在ることを知らざるは侍客なり、病を療するに驢駝の藥を假らざるは侍藥なり。桃紅李白嵩薇紫、一以て之れを貫せり。珠簾玉案翡翠

翠の屏、三重も也た有り。目子、某座元某座元、前資辦事二員の間前、一會の海衆諸位禪師、各般若叢に坐す。百千の文殊左右に彌布す。再び楞嚴會を開く、四教の阿難、内外玲瓏、集めて大成す矣。亦盛ならず乎、各乞ふ恕有せよ。

拈提、「記得す、達磨大師曰く、「吾が法三千年の後に於て、未だ曾て一絲毫計りをも移易せず。」後來覃葛慮頌して曰く、「東西目を縦にすれば乾坤闔し、玉露激秋氣宇高し、山は是れ山兮水は是れ水、何ぞ曾て一絲毫を移易せん。」少室の單傳、自ら安期が菓有り。葛廬が一偶、王母が桃を食らす、子細に點檢すれば、虚を吹え實を唯む。一犬千、猿、休上座野狐の見解を打破し、葛廬の風騒を讓案し去らん。」拂一

明かに別くるをいふ。
知客に同じ、叢林における來賓の迎待應接を典る役なり。
建長寺開山南浦紹明、支那に入り、虚堂愚に就いて法をうく、徑山にありて賓客を典らしむと。
太原浮上座、雪峰義存禪師の法嗣なり、雪峰の室中に參じて師資の道を成す、浴室を掌り、玄沙の打水に遇ふて、大いに相看する所あり。
法式の際、住持に隨侍し、香臺を捧持する役。五侍者の一たる燒香侍者と相並んで住持の後邊に隨ふ。
叢林に聚會する一團の衆僧をいふ。一會の衆僧は大海の如し、諸河流れて一處に歸す、本名既に滅して大海の名のみ存す、故に海衆と名くと。
文殊師利菩薩、普賢と相對して智慧を掌る。

白雲守端禪師なり、楊岐法會の法嗣。
彭祖嘗て雲母山に隠れて雲母を服す、壽八百歳と。
六知事の一、衆僧の辨食を掌る役。
ほふつは禮服なり、左傳桓公二年に、「火龍黼黻は其の文を明かにするなり」とあり、故に斯道を昭明にするをいふ、或は文飾する意にいふ。
記室は叢林に於ける書記なり。

不治の病をいふ、左傳に、「病育の上、膏の下にあり、以て攻むべからず」とあり、習癖のゆけ難きをいふ。
藏主に同じ、經藏を掌る役なり。

一切經のこと、釋尊所説の大乗の三藏及び印度、支那且本の諸高僧の著書を説めたるものなり。

叢林にて衆僧の安居を新保する爲に修する法會なり、毎年五月十三日に建啓し、其の翌日より八月十貳日迄毎日朝課前又は午時にこれを修し、八月十三日を以て滿散となす。
佛の十大弟子の一、多聞第一なり、佛の從弟にして甘露飯王の子、世尊に隨從すること二十余年、侍者の稱、阿難にはじまる、如來嫡傳第三祖となる。

少室は達磨面壁の所なり。
抱朴子に、「安期生藥を海濱に得る、瑯琊の人、傳へて世々之れを見る、計るに已に千年」とあり。
王母は西王母なり、列仙傳に、「漢の元封元年に武帝殿に降り、蟠桃七枚を帝に進め、自ら其の二を食ふ、帝核を留めんと欲す、母曰く、此の桃世間有る所に非ず、三千年に

拂して云く、「少室別傳の旨、誰か知らん來處の高きを。將に謂へり碧瞳窄しと、千里一秋毫。」

翌日 玉鳳院拈香、「大日本國山城州平安城、

正法山妙心禪寺、凡そ新任持と爲る者、開堂の

翌旦合山の清衆を率ゐて、玉鳳塔下に就いて諷

經一上す。臣僧宗休、其の例を攀ちて、謹んで

此の妙兜樓を焚いて、以て 花園太上法皇尊前

に供し奉るの次で、拙偈を唱へ、聊か菲薄の奠

に充つと云ふ。玉鳳花を銜む東海の東、太平の門戸春風を競ふ、三皇五帝果して何物ぞ。香を擧げて

云く、「一朶の香雲梵宮を擧ぐ。」

退院、「祖翁一片の舊田園、自ら鋤犁を荷ふて後昆と稱す。啼鳥落花留むれども住まらず、倒に佛殿

に騎つて山門を出づ。」

一實のみと。」

② 孫は「むくざる」なり。

③ 文藻をいふ。

④ 妙心寺境内にあり、花園帝の御廟なり。

⑤ 第九十五代花園天皇、伏見帝第三子、正安二年皇太子となり、是に至りて踐祚、御年十二、文保三年春二月位を皇太子に譲り、建武二年十一月薨

聖し、法名遍行、正平三年十一月崩す、壽五十二、山城十樂院山上に葬る、天皇學を好み和歌をよくす、深く禪法を好み、妙趣慧玄を以て師となし、花園離宮を捨てて妙心寺となし、慧玄をして此に居らしむ、一室を其の側に創め、玉鳳院と號し、之れに徙御す、遺像今尚ほ存す。

再び正法山妙心禪寺に住する語録

侍者 某 編

冬節上 堂祝 香、「薩訶世界南瞻部州、大日本國山城州平安城西京正法

山妙心禪寺住持傳法沙門宗休、書雲令節、飲んで寶香を焚いて、端に爲に

今上 皇 帝聖躬萬歲萬歲萬歲を祝延したてまつる。陛下 恭しく願は

くは、斬新の日月、王事 監きこと無きの詩を歌ふ。太平の山河、聖壽賢

を得るの頌を奉らん。」

垂語、兩手を開いて、「線路を放開して、一氣酒かに回る。拂を拈じて云

く、「雲物を看んと要す麼、誠に魯臺に登れ、有り麼、參。」僧有り衆を出でて

云く、「冬至日永し、一絲毫の閑工夫を欠少す。妙高雪漫たり、五十三の

善知識に相見す。時有り節有り、古に亘り今に亘る。師云く、「暖律灰を飛

し、繡紋線を添ふ。」僧云く、「記得す、天澤老師、至上堂、僧問ふ、「群陰

消盡して 一陽來復す。衲僧家此に到つて如何が轉身せん。」答へて云く、

① 聖は音、堅固ならざる義、王事は堅固ならざるべからず、故に王事に執掌して暇なきをいふ。討經唐風に「王事監きことなし、垂覆載うる能はず。」

② 天童山妙高臺をいふ、眼藏諸法實相の卷に「寂光室の西壁の前を過ぎて大光明藏の四階のぼる、大光明藏は方丈なり、西の屏風の南より香台のほとりに至りて、燒香禮拜す、入室この所に雁列すべしとおもふに、一僧も見えず、妙高臺は下塵せり、ほのかに衆願大和尚の法音聞ゆ、とき

「恰も老鼠の牛角に入るが如し、端的なりや否や」と。師云ふ、「蝦跳れども斗を出でず。」進んで云く、「學人轉身の處、和尚如何が祇對せん。」師云く、「門前の刹竿を倒卻し着せよ。」進んで云く、「天寒人寒、兩人一椀。」師云く、「別別、珊瑚枝枝月を撻著す。」僧云く、「鳥鉢は見易し」と。便ち禮拜す。師云く、「之れを見て取らざれば、千歳にも逢ひ難し。」

提綱、「佛性の義理を識らんと要せば、當に時節因縁を觀すべし、作麼生か是れ時節因縁。冬時月頭に在れば、則ち被を買つて牛を買ふ、木人倒に霞管を吹く。冬至月尾に在れば、則ち牛を賣つて被を買ふ、牧童遙かに金鞭を指す。僧堂今朝慈明の榜を掛着す、首座昨夜、洞山の禪を擧退す。塞北天寒し、十三葉の牡丹雪内に開く、江南地暖かなり、一兩枝の梅花臘前に綻ぶ、正興廢の時。」杖を拈じて、「牀角の漆道士出で來つて咄一咄して云く、「適來許多の緒餘土瓦。」徒に言詮を費す。巍巍乎堂堂乎、同得同證本來の因果、塵塵爾り、刹刹爾り。無縛無解應用無邊、時節に拘らず、全く變遷を絶す。別に佛性の義を識らんと欲す麼。」卓一下して云く、「大樹は大皮裹み、小樹は小皮纏ふ。」

に西川の祖坤維那來りて同じく禮拜しなはりて、妙高臺をひそかにのぞめば滿堂おちかまなれり」とあり。

④鳥の地雷復より來る語にして、陰秘りて一陽來復するを云ふ、節にすれば冬至を云ふ。

⑤どうじや、どうして、どう、如何、どうしてか等の詰問詞なり。

⑥あしの笛なり。

⑦今大抵十二月二十二日なり、曆にては十一月中にあり、これを節日として賀す、殊に其の朔日にあるは朔旦冬至といひて、二十年に一度ありて、瑞祥として禁中に公事あり、即ち被を買つて牛を買ふ所以なり。月尾にあればこれに反す。

⑧青原下四世靈巖曇晟の法嗣、洞山真价禪師なり。

自序、「宗休、鷹頭鼠目、驢頭馬腮、江湖流離、將に謂へり木瓜果風子と。天地の棄物、元來蓬髮の 休上人、懸汗す。」

謝語、上堂の次で、「恭しく惟れば、養源東堂大和尚、①勃率理窟、天然の 作家、手に信せて麤竹篋を拈じて、臨濟の骨髓を敲出す。病を治するに長松草を以てす、普明の宿因を感じ得たり。尊候如何、保養珍重。」

次に共しく惟れば、大心東堂大和尚、才智山長く、才智を一に才地に作る。行藏雪潔し。一株の蔭涼樹既に倒るゝの日に丁つて、正宗を扶起す。五濁の優曇華再び現するの時に遇ふて、來つて補處と稱す。百里雲を興す者は龍なり、千仞輝を覽る者は鳳なり、之れを 瞻、之れを仰ぐ。

更に惟れば、山門の兩序、滿堂の活潑、問話の禪客諸位禪師、機は東頭に居り、雲は西頭に居る。謂つ可し叢社の兄弟と。②蠻は左角に屬し、觸は右角に屬す。亂世の英雄と稱するに足れり、各乞ふ昭亮せよ。

拈提、「記得す、古德冬至上堂に云く、「慙麼も也た是、不慙麼も也た是、慙麼も也た不是、不慙麼も也た不是、慙麼不慙麼、總に是、總に不是。」何ぞ謂ふこと此の如くなる。陽氣發生して硬地無し、古德の提要、慙麼不慙麼、強ひて 鴻蒙を判つ。總に是、總に不是、兩處に

①先刻、先時に同じ。

②宗休自ら謂ふなり。

③勃率は行履の貌をいふ。

④新道に老練なる作者、又は師家をいふ。支那唐宋時代の禪者が、詩文を以て評を宣揚したるより、詩人墨客の家の語を其のまゝ引用したるなり。

⑤仰ぎのぞむなり。

⑥莊子に、「蝸牛の左角に蠻氏、右角に觸氏、各相戰つて死者數萬」と、これに出づ。

⑦天地自然の元氣を云ふ、莊子に、「鴻蒙方に脾を拈ち、雀躍して遊ばん」と。蒙はまた濛に作る、元氣の未だ分れざるをいふ。淮南子に、「鴻蒙の先を開く」と。

功を失す。陽氣發生して硬地無し、窮すれば則ち變じ、變すれば則ち通す。山僧が見處、他と同じか
らす。拂一拂して、清風明月を拂ひ、明月清風を拂ふ。便ち下座す。

歳旦上堂祝香、聖明を仰ぐ、日の如く月の如し。睿算を祝す、地に同じく天に同じ。」

垂語、「造化の爐を開いて、鐵崑崙を鑄る、見る麼、斬新の日月、特地の乾坤。僧有り、衆を出でて云く、「萬歳古佛出世し、何ぞ舊歳新歳の送迎を管せん。高く祖印を仰ぐ、南極老人天より下る、寧ろ無極太極の先後を分たん。仰いで皇圖を祝す、獅子の音を發して、鷄旦の賀を暢べよ。」師云く、「山門瑞氣を増し、草木光輝を發す。」僧云く、「記得す、趙王、趙州を訪ふ、州立たず、手を以て自ら膝を拍つて云く、「會す麼。」王曰く、「不會。」不審し佛法と王法と、是れ一般、是れ兩般。」師云く、「一鏡兩當。」進んで云く、「茲に承る、今上皇、綸命を下し、吾が正法の門を建立すと、謂つ可し山中雨露新なりと。」師云く、「這裡より入れ。」進んで云く、「與麼ならば則ち上皇の上方に於ける、趙王の趙老に於ける、之れを古にし、之れを今にす。豈に優劣有らんや。」師云く、「二十年來塵面を撲つ、如今始めて碧紗籠を得たり。」進んで云く、「山花咲み野鳥語る。」師云く、「吾れ爾に隠す無し。」

①支那にて、上代より四方にある高山の名とし、黄河の源は此の地にありと信ぜり、近世新疆和闐の南方、西藏の北方に雙ゆる山脈を以て崑崙山とせり。月江録に「黄河九曲、分水崑崙に出づ」と。

②無中に有を生ずるをいふ、唐の杜順和尚の華嚴法界觀、また宋の周惲頤の大極圖說に見ゆ。

③智門光祚の法嗣、諱は重顯、號實は其の號なり。景德傳燈錄によりて古則一百則を抜き之れが頌古を作る、後に圓悟師評唱して碧岩集と稱するもの即ち是れなり、其の遺錄を集めたるものに、洞庭語

録、雪竇閑堂錄、潘泉集、圓峯集、頌古集、拈香集、雪竇後錄等の七集あり。

④西乾は方角にて、印度をさす、乾はいのめの方にて、西北を云ふ、然れども必ずしも爾が云ふにあらず、西方といふ意なり。

⑤東震は東方なり、震は卯に當り、正東なり、支那をさす。

⑥先天とは、人の生れ来る以前をいふ。易に、「天に先だちて天に違はず」とあり、蓋し易をいふか。

⑦伏犠は三皇の首位にあり。

⑧繫靴は襪にかゝれるふくべのこと。轉じて襪にかゝれるふくべの如く爲すことなく只だ徒らに日を過すことにも用ひる。

⑨論語公治長篇に、「宰予晝睡す、子曰く、朽木は雕るべからず、糞土の墻は朽るべから

進んで云く、「百千の雪竇、圓悟、合して一人と爲る。」師云く、「低聲低聲。」提綱、「年年是れ好年、春色高下無し。日々是れ好日、花枝自ら短長。水の器に隨ふが如し、圓ならず方ならず、西乾に在つては新藏經と名く、釋氏に本く。東震に在つては先天易と曰ふ。犧皇に始まる。法需を九野に酒ぎ、壽域を八荒に開く。也太奇、也太奇。新羅國裡拄杖、舞を作す、甚希有、甚希有。古郢城邊落梅上堂、諸人還つて聞く麼、是れ何の瑞祥ぞ。」杖を卓すると一下して、「臥龍纔に奮迅すれば、丹鳳も亦翔翔す。」自序、「宗休、繫れる靴、魯更食はず、朽ちたる木、宰予彫り難し。只だ材を取る所無きことを愧づ、何ぞ敢て職を補ふに堪ふ可けん。汗顔。」謝語、上座の次で、「共しく惟れば、山門兩序、雲堂の四衆、適來の禪客、諸位禪師、東に隣蟲有り、龍之れが長爲り、西に毛蟲有り、虎之れが長たり。南に羽蟲有り、鳳之れが長たり、北に甲蟲あり、龜之れが長たり。此れに由つて之れを觀れば、吾が佛日祖翁、龜竹篋下、四員の禪將を打發す。鳳なり龜なり、龍なり虎なり、斯れより一源を四派に分つ、允に以有る哉。抑々正法眼破沙盆を具する者、松源・破庵・曹源・萬庵、豈に中峯の道

を起さざらん乎。猶歎、盛なる歎、各々道體萬福。」

拈提、「記得す、大川の濟禪師、歲旦上堂に曰く、「正月初一、若し佛法を説かば、三百六十日佛法に縛殺せられん、若し世法を説かば、三百六十日殺世法に使せられん」と。大川、恁麼の告報、誤つて元字脚を認めて、雙眼睛を打失す。何が故ぞ、會するときは則ち途中受用、會せざるときは則ち世諦流布、休上座、鞞、拂子頭上に光明を點出し去らん。滿堂の露柱、元正を賀す、千年河水の清を待たず、佛法に非ず分世法に非ず、綿蠻たる黄鳥花を出づる聲。」

歲旦上堂、「祝聖、大日本國山城州平安城、正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、君を周宣漢武の上に致し、賢を辛夫渭叟の間に擧げん。」

垂語、拂を豎て、云く、「這の正法樹、微咲の花を開く、有り麼、風流當家に屬す。」僧有り、衆を出で、云く、「大王萬福の趙古佛、金雞曉を報じ、玉鳳花を銜む。侍者三喚の忠國師、木馬風に嘶き泥牛月に吼ゆ。頼に法席に臨む、仰いで、不圖を祝したまへ。」師云く、「日月秦樹に垂れ、乾

す、予に於て何んぞ誅めん」と。

①凡字のこと、元字脚は凡即ち凡字なり、又乙字のこと、元字脚は元字の脚の意にて元字の脚は乙、乙は一に通ず、故に元字脚は一字の意、又文字の總命をいふ。

②むきだしの柱、目に見え居る柱、無情又は非情を表するに用ふる語なり、古佛露柱に交る等の語あり。

③綿蠻は、黄鳥のなく聲なり、詩經小雅に、「綿蠻たる黄鳥幽谷をいでて喬木に集る」と、又歐陽修の詩に、「綿蠻巧に鳴す花間の舌。」

④周の宣王、漢の武帝のことなり。

⑤くさむらや、瀆べの人の間からも、賢者をえり上ぐるをいふ。

⑥南陽懸忠國師は、越の諸賢の

坤漢宮を繞る。僧云く、「記得す、西巖惠禪師、歲旦上堂に云く、「磨盤舊面を呈し、水碓新年を拜す。無作にして而して作し、然らずして、而して然り」と。是れ何の條章ぞ。師曰く、「只だ雪の消し去るを待つて、自然に春到來す。」進んで云く、「法山今朝上堂、新舊に涉らず、賀正の一句得て聞く可しや。」師云く、「普、進んで云く、「雲は北嶺に冷じ、梅は南枝に香し。」師云く、「侍者、禪に參得し了れり。」進んで云く、「人々襟袖に香を帯びて歸る。」便ち禮拜す。

提綱、「朝來花萬福、鶯は奏す起居の聲、是れ甚の聲ぞ。」杖を拈じて云く、「木居士側に在り、吾れと同年同行。晚節を松朋竹友に論じ、歲寒を攀弟梅兄に約す。其の鬚、履を拂ひ、其の髮、纓を脱す。特地に出で來つて、胡盧軒渠して曰く、「鐘魚鼓板是れ甚の聲ぞ、蝦蟇蚯蚓是れ甚の聲ぞ、長老老長老、何ぞ聰明ならざる、盲者の日月に依倚として、雙者の雷霆に彷彿たり。重ねて此の義を宣べんと欲す、諦聽諦聽。」昨は舊歲を送り、今は新正を迎ふ。是の故に一氣資けて始め、品物形を流く。四時忒はず、春は鳥を以て鳴く、秦嶺霞秀で、洛山雪晴る。節を撃つて歌を唱ふ東村の王太白、詩を作つて酒に換ふ南隣の張先生。門門大吉、戶戶太平。御園の牡丹紅を着く、四海の香風此れより起る。

人、姓は丹氏、自ら心印を受けて、南陽白崖山の黨子谷に居す、四十年山門を下らず、道行帝里に聞ゆ、彼の大耳三藏を看破せしも此の時なりと、太曆十年十二月九日寂す、勅して大國師といふ。

①大國に同じ。

②秦樹、漢宮は只だ相對するのみ。

③胡盧は鈴の音、又は聲の不明にとる、軒渠は自得の貌なり、聲を正しうして悠然として語るをいふ、又狼狽勉めて云ふ意にとる、又一説なれども前説よきに似たり。

官池の鷗波碧を燕す、五湖の煙景誰有つてか争はん。人境不奪、公案現成。向上の宗乘を擧揚して、釋迦を罵り彌勒を打す。年頭の佛法を商量して、明教を欺き鏡清を瞞す。崑崙の鼻孔を拈卻し、金剛の眼睛を突出す。然も恁麼なりと雖も、祝聖の一句、如何が施呈せん。卓一下して、「龍、水の時を得て意氣を添へ、虎、山色に靠つて威勢を長す。」

自序、宗休、鷹頭鼠目、鳥背魚顛、宗門一世に衰ふ。鳥摩、師の半徳を減す、千障の月を住持す、胡爲れぞ他の五縁を失す。慙汗。

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西序、單寮堂前資辨事、一會の海衆、適來の禪客、諸位禪師、宗門惡毒の爪牙、賢劫第四の釋獅子を獲得す。鉗鎚妙密の手段、洋嶼五百の活馬驢を捉敗す。末流を支分す、

四派を江河淮濟に譬ふ。常住を護惜す、一年を春夏秋冬に配す。毎に日食輪法輪を轉す、何の時か臺帖鈞帖を拜せん。叮嚀、徳を損す、各乞ふ諒察せよ。」

拈提、「記得す、僧、雪峯に問ふ、「元正一日、四相盡く朝す、未審し王何の祇對か有る。」峯曰く、「四相、年に隨つて老ゆ、眞王春に預らす。」一人は曲を拗して直と作す、一人は假を弄して眞に像る。擧燭の燕説を用ふる

①太湖の名、其の周行五百里あるを以ての故に五湖と名づく、また一説に、太湖、射貴湖、上湖、洮湖、蕩湖を以て五湖となす、又鄞陽、曹草、丹陽、洞庭及び太湖となすと、此の五湖は前説是なるに似たり。

②臨濟四料簡の第四、人は主觀にして、客觀の境の存立を放開して、一切を自由ならしむる積極的手段なり。

③現成の當體即ち公案の意、宇宙所現の萬法其のまゝが悟の現れといふこと、現成公案に同じ。

が如く、野鼻の野斤を運すに似たり。山僧亦偈を作りて、響に效ひ去らん。三皇五帝百花の春、厨庫山門雨露新なり、陰陽造工の手を借らす、天然の拄杖黒鱗皴。」

歲旦上堂 祝香して、「時昇平に屬して、扶桑樹頭鳳舞ふ。春新曲に入りて、碧梧桐裡鶯啼く。一に願はくは、君を堯舜の上に致し、而して堯舜の雨露を四溟に施し、二に願はくは、我れを季孟の間に待つて、而して季孟の風俗を萬世に移さんことを。」

垂語、拂を以て左を指して、「左邊は去年の梅。」右を指して、「右邊は今歳の柳。」中を指して、「若し中間底如何と問はゞ、顔色馨香舊に依る。」參。

僧衆を出で、「云く、「太平象有り、綠髮の將百蠻を領す。王事監きこと無し、緇衣の禮三代を復す。法社の盛なる、我が道光あり。」師云く、「鳥藤舊に依つて、黒鱗皴。」進んで云く、「春風門に入つて、千花鬘を生ず。」師云く、「又秋露の芙蕖に滴るに勝れり。」僧云く、「記得す、天澤祖歲旦上堂に云く、「年々是れ好年、日日是れ好日。甚としてか新舊有る。」意旨作麼生。」師云く、「花に遇ふては花を成し、柳に遇ふては柳を成す。」進んで云く、「和尚

④單寮は、獨寮、又は獨房といふ、單身にして一寮を専有し、同舍のものなきをいふ、蒙堂は叢林にて勤奮退職者の安息する堂舎をいふ、蒙は靜養の義、易の蒙卦の象に、「蒙は以て正か養ふ、聖の功也」とあり、故に此の蒙堂に住する退職の人を稱す、前資は叢林にて開寺以下の職を務め、三次を歴て退休したる老宿をいふ。

⑤攝化の嚴なるを、錯又は鎚の刀を鍊るに必要なるに譬ふ。

⑥妙心の四溟をいふ、即ち龍泉、東海、靈雲、聖澤それなり。

⑦財施及び法施に對して云ふ。莊子に、「野人、鼻端に塵あり、蠅の翼の如し、匠をして之れを斲らしむ、匠、斤を運らし、風をなして、その至を斲り盡す、而して鼻傷かず。」

今日上堂、新舊に渉らざる底の一句、得て聞く可し麼。師云く、「聞く麼。」
進んで云く、「上來は且く置く、住山の。鋪芥花を開く時如何。師云く、「見
る麼。」進んで云く、「鳥鉢常々在り。」師云く、「後生畏る可し。僧便ち禮拜
す。」

提綱、「祖師の妙訣、誰が家か春ならざらん。年の元、月の元、日の元、
元來繞轉無し。天一を得、地一を得、人一を得、一氣洪鈞を轉ず、之れに
因つて、野外綿蕪舊に復す。雨餘の鐘聲響新なり、玉毫光耀く紫樹
檀、善住天子を拜屈す、青山涌出す黄金の宅。釋提桓因を驚起す、塵
塵說法、利利說法、處處全真、物物全身。烏張三、酒を喫すれば、黒李
四、唇を濕す。放開するときは則ち夜都、地に落ち、把住すれば則ち并汾
信を絶す。杖を拈じて、「且く道へ、放開するが是か、把住するが是か、暗
漆桶痴兀兀、醉袈裟。笑問問。若し復た未だ會せずんば、看よ看よ、盡大
地一箇の木上人。」卓一下して、「只だ補袞調羹の手を將つて、如來の正法輪
を撥轉す。」

自序、「宗休、千年の常住、百日の主人、半徳、師に減す。蘇長公、庭

- ① 四廂は越の美女なり、吳王夫差、大いに之れを幸す、市に入る毎に、人見んことを願ふものは、先づ金銀一文を送ると筆に巧みなり、醜女之れを疑して、却つて醜なるを知らず、拙にして却つて巧に効ふを恥づるなり。
- ② 魚鱗の形したる眞黒なる拄杖をいふ。
- ③ 垂示法語の終りに、喝、露、唯などの文字と同じく用ふ、此の場合更に言外の主旨に參すべきを勸戒する意なり。
- ④ 宗門の禮威儀をいふ。
- ⑤ 拄杖に同じ、黒き故にいふなり。永平元禪師云く、「多歲住山の烏拄杖、一旦能と化して風雲を起す。」
- ⑥ 錘は小刀なり、辨はをの、まさかり、之れを般若の智劍にたとふ。

堅が體に效ふと爾云ふ。至尊位を列ぬ、韓非子、伯陽の傳を編する者乎。汗顔。
謝語、「養源和尚、雪髻の獅子、金翅鳥王、瀉崎善く其の源を養ふ。山下の檀越、蕭然たる行李、葉波別に何の法をか傳ふ。水光林影、勃窣たる伽梨、翅に三千威儀經を誦するのみならず、況んや復た六十華嚴の易を劃するをや。道體萬福、孟春猶は寒し。」
大心和尙、大愚は愚ならず、正法は法無し。風八極に生ず、虎丘虎頭虎尾一時に收まる。雲九天に連る、龍泉龍子龍孫兩處に化す。愕なる哉、後學の甘露、僉曰ふ本色の住山と。人其れ仰がざらん乎、師の存する所なり。
山門東西序、都寺悅衆、寶公、生薑の名を改めず、華姪誰か桃花娘しと道ふ。爾の音を玲瓏

- ① 後生は少年なり、年富み力強し、以て學を積みて待つことあるに足る、故に其の勢畏るべし。論語子罕篇に、「後生畏るべし、焉んぞ來者の今に如かざるを知らんや」と。
- ② 年と年、月と月、日と日とのさかひめに、少しの隙間もないといふ義なり。
- ③ 具には釋迦提婆因陀羅、又は釋迦提桓因陀羅、梵音、シヤクラ、デーブリーナーン、インドラ (Cakra-derrajin-indra) 能天主と譯す、帝釋と同じ。
- ④ 烏張三、黒李四は權兵衛、太郎兵衛といふに同じ。
- ⑤ 和悅して靜かなる貌なり。
- ⑥ 韓の諸公子なり、刑名、法術の學を喜ぶ、韓の削弱せるを見む、王用ふること能はず、是に於て、孤憤、五蠹、内外諸説、説林、説難等十餘萬言を作る、二十卷五十五篇あり。
- ⑦ 瀉崎靈祐、百丈懷海の法嗣、仰山と共に瀉仰宗の祖となす。
- ⑧ 僧伽黎衣のこと、梵語、大衣は三衣中の最も王なるものにして、僧の王宮に入る時、又は衆落に入る時の袈裟なり。
- ⑨ 東晋の佛陀跋陀羅の譯出せる六十卷より成る華嚴經をいふ。
- ⑩ 老子の「大辯唯の如し、大工は拙の如し」などに同じ。
- ⑪ 八荒又は八方をいふ。
- ⑫ 梅怛麗耶と稱す、菩薩の名、姓は阿逸多、無能勝と譯す、南天竺の婆羅門にして兜率天に生れ、現に兜率の内院に居て、當來には此の世に出興して、釋迦佛の處を補ひ、賢劫千佛中の第五佛となる。
- ⑬ 義玄禪師、黃檗の法嗣、臨濟宗の祖。
- ⑭ 雲門文偃、雪峰義存の法嗣、

にして、吾が道を齎載す。

前版後版、釋迦前ならず、彌勒後ならず、地を易へば皆然らん。臨濟は夏の如く、雲門は春の如し。維れ時至れり矣。

記室知藏、一人は積翠の三關を透過し、一人は少室の大藏を打開す。爛葛藤を胸襟に掃ひ、文章の花を盆盎に輝かす。

侍香侍狀侍衣侍藥、這箇は香嚴の本寂を即す、鼻孔遼天。那箇は華林の太空に跨る、威風野に逼し。彼の紅粉侍者を想ふ、此の烏鉢の道人を得たり、中に一箇の叢社の風流有り。藥籠の人物、更に一杯の酒を盡せ。

三喚の聲を認むること莫れ、夫れ是れ之れを侍藥の職と謂ふ。

堂中の萬縞郎、適來の十禪客、諸位禪師、渥注の奇種志を馳す。驪駒駟駱驢驢、雲臺の諸將功を論す。井鬼柳星張翼軫、箇箇轉處に立在す。人人盡く光明有り。三年關山の月、誰か是れ知音、一日長安の花、各自に眼を着けよ。至祝至祝。

拈提、記得す、西巖の惠禪師上堂、拄杖を拈じて云く、「只だ鷲峯老漢の如きんば、百萬の衆前に於て、一枝の花を拈す、直に得たり金色の頭

雲門宗の祖。

① 盎はほとぎ、かはらけ。

② 香嚴智閑禪師、青原下四世馮山靈祐の法嗣、擊竹の音を聞いて大悟徹底す。

③ 侍者の別名なり。

④ 堂中の衆徒をいふ。

⑤ 厚く深きをいふ。

⑥ 驪はあしげ、騊はそへ馬、騶はかはらげ馬、駱はどろあしげ、驢は黒馬、驢は栗毛、驛は白腹の栗毛馬、上文を受けて點出す、而して下文の井鬼云々に應ず。

⑦ 後漢の明帝三年、中興の功臣二十八將を南宮の雲臺に圖畫し、天の二十八宿に配すと。

⑧ 井、鬼、柳、星、張、翼、軫、皆二十八宿の一星なり、何れも南方の星なり。

⑨ 靈山に於ける拈華微笑の機縁なり、老漢は世尊をいふ。金色の頭陀は迦葉尊者をいふ。

陀、破顔微笑することを。爾且く道へ、是れ梨花耶、李花耶、梅花耶、杏花耶。卓一下して云く、「一時に春風に分付與す」と。子細に點檢すれば首鼠兩端、世尊手に信せて拈じ來る。春人間に至つて藥物無し、西巖模に依つて脱出す、月花影を移して欄干に上す。山僧、彈。梨梅杏李一般寒し、金色の頭陀熱瞞せらる。拄杖花開く太平の日、春風力を着けて試みに吹け看ん。」

結夏上堂、祝聖、大日本國山城州平安城。正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、天地と其の徳を合せ、日月と其の明を合せ、四時と其の序を合せ、鬼神と其の吉凶を合せたまはんことを。垂語、「圓覺の伽藍を開いて、安居の偈子を説く。諸人還つて聞く麼、葵花眼無く、芭蕉耳無し。參。」

提綱、十五日以前は、金鳥東に轉す、十五日以後は、玉兔西に移る。正當十五日、傍に漆道士有り、眼蒲萄朶の如く、手に珊瑚枝を攀ぶ。圓陀陀地、得得として出で來つて、祖師の鼻頭に築着す。松は直く棘は曲れること、古佛の心臆を吐露す。緑暗く紅稀なり、一溪の雲を拾ひて衣鉢と作し、千障の月を接して住持と稱す。或時は與奪縱横、聖を轉じて凡と作す、遮那珍御の服を脱却す。或時は開遮自在、凡を轉じて聖と作す。向上の惡鉗鎚を拈起す。濡首徧吉、二鐵圍に疋向す。空裡の磨盤

① 圓覺の伽藍を開いて、安居の偈子を説く。諸人還つて聞く麼、葵花眼無く、芭蕉耳無し。參。

② 提綱、十五日以前は、金鳥東に轉す、十五日以後は、玉兔西に移る。正當十五日、傍に漆道士有り、眼蒲萄朶の如く、手に珊瑚枝を攀ぶ。圓陀陀地、得得として出で來つて、祖師の鼻頭に築着す。松は直く棘は曲れること、古佛の心臆を吐露す。緑暗く紅稀なり、一溪の雲を拾ひて衣鉢と作し、千障の月を接して住持と稱す。或時は與奪縱横、聖を轉じて凡と作す、遮那珍御の服を脱却す。或時は開遮自在、凡を轉じて聖と作す。向上の惡鉗鎚を拈起す。濡首徧吉、二鐵圍に疋向す。空裡の磨盤

③ 濡首徧吉、二鐵圍に疋向す。空裡の磨盤

④ 空裡の磨盤

⑤ 空裡の磨盤

八角を生ず、^①陝府の鐵牛兒を驚走す。與麼の時節、^②臘氷鷺雪、修治を假らず、甚の護生禁足とか説かん、什麼の取證剋期をか論せん。然も此の如くなりとも雖も、只だ殺中に透脱し、活處に機を投せんことを要す。卓一下して云く、「限り無き春を傷む意を知らんと欲せば、盡く鍼を停めて語らざる時に在り。」(鍼を一に針に作る。)

自序、「宗休、七十古來稀なり、^③菱花雪を照す。兩三竿も也た足れり、脩竹門を掩ふ。懸汗懸汗。」

總謝、上堂の次で、「恭しく惟れば、鶴立東西の序、蟬連左右の侍、滿堂一會の龍象、泰山は寸壤を辭せず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を成す。顧みるに、吾が法山、高うして峯の頂無きが如く、深うして海の底無きに似たり。誰か瞻仰せざらん乎、各乞ふ諒察せよ。」

^④解夏上堂、祝香して、「大日本國云々。陛下恭しく願はくは、南明公、北明公、左輔右弼の職を掌る。^⑤東王母、西王母、天長地久の壽を奉らん。」

垂語、「關山の月を翻して、^⑥夷則の律と作す。禪牀を撃つて云く、「聞く

① 圓陀々に同じ、圓くして美麗なるをいふ。

② 支那陝州城外に鐵牛の廟あり、牛頭は河南にあり、牛尾は河北に在り、禹が鑄て以て河患を鎮すとあるに出づ、不動着、又は情識を離るる意に用ふ。

③ 氷雪修飾を用ひずして、自ら白きを云ふ。

④ 菱花は古鏡の名、故に鏡の異名とす、楊蓮の明妃態に、匣中縱有菱花の鏡あるも、産づ單子に向つて舊顏を照すことな」と、白髮雪の如き髮を鏡にてらすをいふ。

⑤ 脩竹は長き竹を云ふ。

⑥ 解制、夏解に同じ。

⑦ 只だ南明、北明に對して語をなすのみ、實在するにあらす。

⑧ 十二律の内の一。月令に、「孟秋の月、律八夷則に中る」と、また史記律書に、「夷則は陰氣の萬物を賦ふをいふなり」と、その十二支に於ける申となす。

⑨ 梵音鉢判婆刺擊、隨意と譯す、自志は義職なり、寄歸傳に、「凡そ夏羅歲終の時、此の日を隨意と名くべし、即ち是れ見、聞、疑の中に於て意に任せて舉發して、即を説き聲を除くに隨するの義なり。」

⑩ 天地四方を云ふ。

⑪ 師家が學人に對して云ふ語なり。

⑫ 口を大にして云ふこと、又は

麼、一二三四五六七。參。僧、衆を出で、云く、「大雲九丘を庇ふ、臨濟の龍、頭角を呈露す。清風八極に生ず、慈明の虎、爪牙を活弄す。茲に^①自恣の令辰に臨む、仰いで皇圖の萬歲を祝したまへ。」師云く、「三雨全く清む六合の塵。」進んで云く、「蘋葉風涼しく、桂花露香し。」師云く、「吾れ爾に隠す無し。」僧云く、「記得す、鹿門の燈禪師、僧問ふ、「西天解夏、臘人を以て驗と爲す、未審し鹿門、何を以てか驗と爲す。」門云く、「雨來つて山色暗く、雲出で、洞中明かなり」と、恣麼の酬對、端的なりや也た無や。」師云く、「公驗分明。」進んで云く、「西天鹿門、吾が法山、優劣如何。」師云く、「露柱に問取せよ。」進んで云く、「燈籠合掌、露柱證明。」師云く、「門外の金剛、甚に因つてか汗出づ。」進んで云く、「^②潺暑猶ほ甚だし、伏して惟れば珍重。」師云く、「名下に虛士無し。」

提綱、「正人、邪法を説けば、邪法正法と成る、邪人正法を説けば、正法邪法と成る。何が故ぞ、法に定法無し、緣に逢ふて即ち宗、薰風一聯の詩、呆木瓜、禪和子を賺殺す。碧岩百則の話、勤齋直老凍臍を惹著す。力因希、咄咄。風は虎に従ひ、雲は龍に従ふ。恣麼の時節、同行の漆道人、

葛路に相逢ふ。能殺能活、能擒能縱、口吧吧地にして道ふ、秋初夏末、各自に西東す。萬里無寸草、何の處にか朕蹤を留めん。卓一下して、「巨靈手を擦ぐるに多子無し、分破す。華山の千萬重。」

自序、「宗休、無着の文殊に對するに同じと雖も、末法の比丘と稱す。」

巖頭の、欽山を喚ぶに異ならず、後生の長老と作る。汗顔。」

謝語、「聖澤和尚、禪源竭くること無し、聖澤餘り有り、老松壑に臥す、萬牛動せず五丁愁ふ。少林秋に向とす、衆角多しと雖も一麟足れり。至祝至祝。」

大心和尙、眞正の正傳、大心の心印、禪の炮炙、禪の本草、換骨願神。或底は微笑、或底は拈花、直指見性、散美散美。

山門兩序、一會の海衆、諸位禪師、百億の彌樓山を合して、一山と爲す。高きことは則ち高し矣、吾が山門に較ぶれば、則ち只だ是れ蟻垤のみ。百億の香水海を合して、一海と爲す。深きことは則ち深し矣、吾が海衆に較ぶれば、則ち只だ是れ蹄涔のみ。貴ぶべき哉。

拈提、「記得す、虛堂老師、解夏上堂に云く、「十五日以前は休止し、十五日以後は住す、正當十五日、休も也た休し得す、住も也た住し得す。」虚堂叟、人に逢ふて、且く三分の話を説く。休上座、佗のために全く一片心を抛たん。臺前花の咲を含む有らすんば、是れ東山一夏休す可し。」便ち下座す。

冬至上堂、祝香して、「大日本國云云。陛下、恭しく願はくは、春秋の筆を起して、曾て一角の麟を西周に出す。封禪書を上つて、必ず比目の魚を東海に致さん。」

垂語、又手して、「一冬二冬叉手當胸、會す麼。閑黎飯後の鐘。參。」

自序、「宗休、少叢林の漢、大蘿蔔の禪、獅子座に登つて、野狐涎を流す。懸汗。」

謝語、「養源和尚、甘棠の故笏、苦海の慈航、願はくは法要を聴かん。度生に倦むこと莫れ。」

大心和尙、岐陽の雪に嘖す、是れ十三生の蘇軾にあらず乎。震旦の風を化す、謂つ可し第二位の顔回なりと。之れを瞻、之れを仰ぐ。

山門東西班、滿堂三千指、適來の禪客、諸位禪師、人人百千の日月の釋

① 華山記に、「山頂、池あり、千葉蓮花を生ず、之れを服すれば羽化する」と、又播首集に、「李白華山の紫崖峰に登り、曰く、此の山最も高し、呼吸の氣、想ふに帝座に通ぜん」とあり。

② 巖頭全藏禪師、徳山宣鑑に嗣法す。

③ 欽山文遠禪師、洞山良价禪師の法嗣、巖頭、雪峰と友たり、常に其の所解を論ずと。

④ 禪風の廢れるを云ふ、師自ら倒潰を未前に挽回するの抱負を見はずなり。

⑤ 欣美などに同じ。

⑥ 梵音、スメールといふ、須彌山のことなり。

⑦ 須彌山の外に七金山あり、此の外圍に大鐵圍あり、此の中間に大海をなす、これを香水海といふと、古説須彌山説に

よること。

⑧ 馬蹄の土に印したる跡に、水の溜りたるもの。

⑨ 四明衆山の人なり、運庵巖に參じて、大いに契語する所あり。

⑩ 孔子春秋を著して、哀公十四年春西の狩に麟を得たりと。麟は聖人、世に出づる時に出づる祥獸なり。

⑪ 司馬相如が封禪のことを論じて、時の帝に上りし書なり、封は壇を築きて祭るを封といひ、地を掘りて祭るを禪といふ。管子に、「封、泰山、禪、梁父、者、七十二家」とあり、即ち天神地祇に祈り、幸福を増進するなり。

⑫ 西周に麟を出したるやうに、日本の國にも麟が出るであらうとなり。

⑬ 阿闍梨の略、阿舍利、阿祇利とも書く、軌範師、正行と譯

天を繞るが如し、箇箇萬丈の波瀾の大海に歸するに似たり。吁嗟、偉なる哉、於戲、盛んなる哉。

結座、杖を拈じて一劃して云く、「劃前に易有り、熱するときは則ち熱し、寒するときは則ち寒す。① 劃後に詩無し、山は是れ山、水は是れ水、四序循環、一氣資つて始む。茲れに蘇つて、梅花先づ漏泄して、達磨の眼晴を換卻す。桃李終に言はず、臨濟の骨髓を敲き出す。格外の玄談、② 當陽の直指、何ぞ用ひん、周曆を開いて元正を賀し、魯臺に登つて雲氣を書することを。若し稍僧家に約せば、甚の弊皮履にか當らん。正與廢の時、喚んで拄杖子と作さんが便ち是か、喚んで拄杖子と作さんか、便ち是か、不是不是。③ 卓一下して、「吾が道は一以て之れを貫く。曾子曰く、唯と。」歲旦上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺云云。④ 陛下、恭しく願はくは、虎拜稽首して、屠蘇白散、齡萬年を祝す。鶴立侍臣、禮樂樂花、徳三代に邁えましまさんことを。」垂語、「一枝の笛を把つて、萬年の歡を奏す、這裡還つて知音の者あり廢。陽春白雪和すること皆難し。僧有り、出で、問うて云く、「太平象有り、三臺の鶴花間に舞ふ、算算窮

① 弟子の行爲を矯正する徳僧の敬稱なり。
② 蘇東坡居士なり、東林常總師に就いて必要を得、宋中世の文學者なり。
③ 孔子十哲の中、世實に亞聖と稱す、性行併せて孔子家語にあり。
④ 易は伏羲初めて卦畫を作るに初まる、然れども易なるの理は其の畫前に矢張り照として存在するなりと。
⑤ 孔子古詩三千餘篇を刪りて三百篇となす、今の詩經之れなり、劃後は孔子の刪りたる後のことなり。
⑥ 分門の義、左傳に、「文公四年天子陽に當つて諸侯命を用ふ」とあり、之れによる。
⑦ 妙心寺をいふ。

無し、千歳の龜葉上に遊ぶ。時其れ至れり矣、徳惟れ大なる哉。頼に夏正に値ふ、願はくは周煥に沐せん。師云く、「紅日扶桑を照す。僧云く、「記得す、世尊花を擧す、迦葉一咲す、意花に在るか花に在らざるか。師云く、「兩箇落草の漢。進んで云く、「百萬一咲を買ふ、風流當家に屬す。師云く、「誰が家か春ならざらん、祖師妙訣有り。進んで云く、「昔正法眼を將つて、迦葉一人に付す、謂つべし靈山及第と。師云く、「衆角多しと雖も、一麟足れり矣。進んで云く、「今日花園、一枝の鳥鉢を開く、誰か是れ微笑の人。師云く、「脚下を看よ。進んで云く、「與麼ならば則ち靈山の會、儼然として未だ散せず。師云く、「證明を謝す。進んで云く、「如來禪は且く措く、如何が是れ祖師禪。師云く、「親しきものは問はず、問ふものは親しからず。進んで云く、「也た秋露の芙蓉に滴るに勝れり。師云く、「雪も亦梅に一段の香を輸す。進んで云く、「宗門の遷固、謹んで答話を謝す。師云く、「鶴九皋に鳴いて、其の聲天に聞ゆ。」

提綱、「妙と説き玄と談す、太平の奸賊、拈鏡豎拂、亂世の英雄、臨濟の金剛王、天に倚り雪を照す。徳山の木上座、雨を罵り風を打す。禪河教海を掀翻し、虎穴魔宮を踢倒す。爾りしより來、劍を説くものは、迂莊の罔續に墮し、射を學ぶものは、后羿が殼中に遊ぶ。限り無き衲僧跳不出、猶ほ梅花有りて路未だ通せず。是の故に、熊峯面壁九年、胡僧眼

① 祖師禪に對して云ふ。圭峰宗密禪師の所判なる五種禪中の最上なるもの、最上乘禪、又は如來清淨禪ともいふ。傳燈錄仰山の章に、「汝只だ如來禪を得て未だ祖師禪を得ず」と。即ち後世宗密禪師の如來禪は達磨所傳の禪を把持するものに非ずとなす、之れ祖師禪の語を生ずるに至れり。
② 詩經小雅鶴鳴に見ゆ、九皋は

踏す。馬師威を振つて一喝し、海兄耳聾す。桶底脱する時、事々無礙、機輪轉する處、法々圓融。水を水に投するが如く、空の空に合するに似たり。正與廢の時、南山北嶺、雲起り雨下る、千門萬戶、柳綠花紅なり。祖意明々歷々、佳氣鬱鬱、怒々たり。泥人宗旨を擧揚し、石女聖躬を仰贊す。畢竟何を以てか驗と爲さん。布衣の稷契詩書の澤、治世の巢由、吠畝の忠。(忠を一に身に作る。)

自序、宗休、尺寸の祿に奔つて、蟻の臚に附くが如し、一少伎に誇つて、虎の乙を狭むに似たり。慙汗慙汗。

總謝、上堂の次で、「恭しく惟れば、山門東西班、丈室左右の侍、單寮蒙堂、前資辨事、滿堂一會の海衆、適來問話の禪客、諸位禪師、東に馬鳴あり、西に龍猛あり、南に提婆あり、北に童壽あり、號して四日となす。能く衆生の感情を照す、邪見の山を摧き、正法の炬を然す。顧みるに、此の山吾が佛日の下、亦四日あり。曰く、龍泉、曰く、東海、曰く、靈雲、曰く、聖澤、熾々然として天地を照し、昭昭乎として古今に輝く。嗚呼、盛なる哉。」

九澤などに同じ、深山幽谷などの意にて、賢者の隱るゝと雖も、人成これを知るにたふ。

① 青原下四世、龍潭崇信の法嗣。

② もたげひつくりかへすこと。

③ 臥たふすなり。

④ 莊子に餌を學ぶのことあり。

⑤ 埤内にとが、埤内などといふに同じ。

⑥ 孟子に、「蓬蒙射を羿に學ぶ、後羿の己より勝るを以て之れを殺す」とあり。

⑦ 熊峰は達磨を葬りし處、故に又達磨の別稱とす。

⑧ 馬祖道一禪師、南岳懷讓禪師の法嗣なり。

⑨ 百丈懷海禪師、馬祖道一禪師の法嗣なり。

⑩ 慙々と同じ、のびやかなり。

⑪ 稷は右稷。書經舜典に、「棄、黎民飢に阻む、汝后稷時の百穀を時け」とあり、農事を主る官なり、契は書經に「契汝、司徒と作れ」とあり。

⑫ 許由、巢父なり、許由は箕山の隱士なり、巢之れに天下を譲らんとせしに、許由聞きて、耳の汚なりとて潁川の水に耳を洗ひたりと、巢父は同じ頃の隱士なり、許由の耳を洗ひし水を汚れたりとて流ることをもせざりしと云ふ。

⑬ 吠畝は農夫などの穢賤なる位置にいふ。

⑭ 「なまぐさ」のなり。

⑮ 阿那菩提、如來續傳第十二祖なり、梵音「アシュブダホーサ」の轉化なり。第十一祖富那夜奢尊者に依つて、心要を得、西印度の人、大乘起信論は實に尊者の造出なりと傳ふ、周の顯王四十二年甲午歲没す。

⑯ 梵字那伽樹那、又龍樹と

拈提、「記得す、古徳曰く、「佛法年年舊に依り、胡餅日日新鮮」と。古徳慈愛の示衆、無義味の話、口皮邊の禪を説く、風流愛すべし、公案未だ圓かならず。超佛越祖の談は且く置く、賀正の一句、如何が敷宣せん。昨夜春風吹いて門に入る、初機の桃李新年を賀す。禪僧の活計多子無し、間に松聲を聴いて被底に眠る。」

歲旦上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城、西京正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、太伯の孫倭國を領し、日、若英に昇る。小月、走、汴河に都す、家、葵菴を種う。」

垂語、拂を豎てて云く、「正月の木犀樹、亂世の優鉢花、若し仙陀の客有らば、我が馬に秣ひ、我が車に膏させ。參、僧有り、衆を出でて坐具を擧して云く、「驪龍五色の珠を托出して、靈光照徹す盡閑淨、請ふ師春風の力を借らす、向上の跏趺下し得んや無や。師曰く、「老いて筋力を將つて能と爲さず。進んで云く、「四塞狼烟斷え、九天鳳瑞新なり。師曰く、「時なる哉、時なる哉。」僧云く、「記得す、僧趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」是れ什麼の陳葛藤ぞ。師曰く、「一回拈

出すれば一回新なり。進んで云く、「此の山近ごろ柏樹を法堂前に移す、是れ乃祖の惡芽、孽にあらすや。」師曰く、「移して宮牆に入れば別に是れ春。」進んで云く、「趙州道底は且く置く、靈雲の桃花、紅を著くるや也た未だしや。」師曰く、「柏樹子の成佛せんことを待ちて、汝に向つて道はん。」進んで云く、「猶ほ梅花のみ有りて路未だ通せず。」師曰く、「只だ雪の消するを待て。」僧云く、「參參、覺範合して一人と爲る。」師曰く、「吾が侍者に慚づること莫れ。」

提綱、「天何をか言ふ乎、四時行はる、地何をか言ふ乎、百物生ず。鶯は南燕は北、柳は暗く花は明かなり。玄玄玄、林際の骨髓を分張し、咄咄咄、楊岐の眼睛を換御す。重きことは則ち、九鼎の重きより重く、輕きことは則ち一毫の輕きより輕し。也太奇、也太差。青山白雲開遮自在、不可量、不可說、清風明月與奪縱橫。然も恁麼なりと雖も、賀正の那一句、如何が施呈し去らん。東夷降り西戎伏す、野老農夫太平を樂しむ。」
自序、「宗休、暗桃李の俗又來る、前度の劉郎、黃楊木の禪、好し去れ、閻位の王莽。」

- ① といふ、佛滅七百年の頃、南天竺に生る。
- ② 南天竺の人、姓は毘舍羅、長者の子にして、龍樹菩薩の上足、三論宗義を確立せり。
- ③ 芙蓉、ひまわり草なり、花の日輪に傾き向ふより、借りて君主、又は長上の徳を仰ぎ慕ふ心ないふに用ひらる。
- ④ 香の高き花を開く。
- ⑤ 智慧群抜の者にたとふ、即ち此の語は王索仙陀婆の略、一に水、二に鹽、三に器、四に馬の四義を含む、譯語定かならず。
- ⑥ ひこばえなり。木の切り株より生ずる芽なり。
- ⑦ 覺範慧洪禪師、勸潭の寶峰克に侍して修行し、張無盡居士の歸依を受く。
- ⑧ 林際は臨濟に同じ。
- ⑨ 慈明楚圓の法嗣、楊岐方會禪師なり。

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西の班、丈室左右の侍、滿堂一會の龍象衆、適來問話の禪客、諸位禪師、叢林の禮樂一新、鳳、花を嘲み、雞、曉を報す。華藻の文章三昧、犀、月を翫び、象、雷に驚く。嗚呼盛なる哉、各道體、起居萬福。」
拈提、「記得す、松源師祖香山に住する日、歲旦上堂に曰く、「歳去る實に去らず、歳來る實に來らず。山僧都べて會せず、露柱笑哈哈たり」と。山僧も亦偈を作つて擊節し去らん、春風露柱笑怡怡、咄。箇の岳翁雙梅に似たり、木上座新長老と呼ぶ、山門八字に南に向つて開く。」

除夜小參垂語、「臘月の扇子、除夜納涼、若し寒毛卓豎する底の漢有らば、此の一杯の杏薑湯を盡せ。參。僧有り、衆を出でて云く、「春舊年に入る、徳山小參答話せず、月衆水に印す、斷際的全機後蹤を繼ぐ。幸に法筵に臨む、願はくは家教を聞かん。」師云く、「今日早く暮れぬ矣。」僧云く、「記得す、息耕老師、歳夜小參、僧問ふ、「門前の爆竹消息を通ず、何ぞ必ずしも重ねて新に話頭を擧せん。」師云く、「臘を刺して膠盆に入る」と、端的なりや無や。」師云く、「冷灰豆爆。」進んで云く、「燈籠合掌すれば露柱點頭す。」師云く、「諾諾。」進んで云く、「法山今夜小參、息耕の圈續に墮せず。天は梅邊に到りて別春有り麼。」師云く、「有り。」進んで云く、「來年更に新條の在る有り、伏して惟れば珍重。」師云く、

火を求む、古徳の答處、門、桃符を釘つて曾てせざるに似たり。若し人有りて、如上の問を休上座に致さば、他に祇對し一豆はん、燒葉爐中に宿火無し、讀書窓中殘燈有りと。」

元宵上堂、祝聖、「大日本國山城州平安城 正法山妙心禪寺云云。燈節令辰、虔んで寶香を蒸し云云。今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭しく願はくは、惟れ天聰明、惟れ聖時憲あり。惟れ臣欽若、惟れ民風從ふ。」

垂語、「少室の一燈、龜を證して龜と作す、試みに天外に出頭して看よ。珊瑚枝枝月を擲着す、有り慶。」

提綱、「十五日以前、金烏急に玉兔速かなり、十五日以後、泥牛吼え木馬嘶く。禪閨年に厄す、宣州の杲風子。黃楊木に參得す、機閃電を運す。首山の念法華、喚んで粗竹篋と作す。胡打亂打、全提半提、張三飽まで酒を喫すれば、李四酔つて泥の如し。口吧々地、東を問へば西を答ふ。」

杖を拈じて、「來也來也、杖たり分杖たり分、向上宗乘の事、未だ夢にも見ざること有り。遠法師甚に因つてか虎溪を過ぎざる。呵呵呵。天は

に牛糞の火を撥いて燂字を尋れて食す、寒潮頭に垂る、未だ曾て答へず、使者笑つて曰く、「且く尊者にすむ、涕を拭へ、禪曰く、「我れ豈に工夫して俗人の爲に涕を拭ふことあらんや」といひて、竟に起らず、使者歸つて奏す、徳宗甚だ之れを歎す。

●那は彼などに同じ。

●黃楊木はつげの木なり、其の性長じ難し、年毎に長さ一寸を増す。閨にあへば即ち退くと、悟所に坐着して撥轉の手脚なきにたとふ。

●首山省念禪師、風穴延沼の法嗣。竹篋を拈じて衆に示すの語に曰く、「汝等若し喚んで竹篋と作さば即ち觸る、喚んで竹篋となさざれば、即ち背く、諸人宜しく喚んで其塵とかなさん」と。

●全提は公案の全部を提示する。

白雲と共に曉く、五更の鶏を待つこと莫れ。」

自序、「宗休、脩短矮身、方朔を滑稽傳に載す。巧唇薄舌、子雲を太玄經に嘲る。慙愧慙愧。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西班、丈室左右の侍、普宿、單寮蒙堂、前資辦事、一會の海衆、諸位禪師、多寶塔中の二如來、迹を開き本を顯す。楞嚴會上の四菩薩、尊を屈して卑に就く。感戴に堪へず、各乞ふ允容せよ。」

拈提、「記得す、臨濟松を栽うる次で、黃檗問うて曰く、「深山裡に松を栽うること許多して甚麼かせん。」濟曰く、「一には山門の爲に境致と作し、二には後人の爲に標榜と作さん」と。黃檗の問端、花を移しては蝶の到るを兼ね、臨濟の

もの、半提は之れに對し其の一部を提示するものを云ふ。

●晉の惠遠法師、廬阜にありて世間に出づることなし、平生客を送りても虎溪を過ぐるこなし、若し虎溪を過ぐるこ

とあれば虎悲鳴せりといふ、時に陶淵明、陸靜修の二人、皆有道の士なり、或時惠遠を問ふ、その歸る時、法師之れを送りしに、三人の談論甚だ愉快なりしかば、覺えず虎溪を過ぎ、暫くして之れをさと

り、相見て大いに笑ひしといふ、故に後人、虎溪三笑の圖を作る。

●長頭小身の意なり。

●方朔は東方朔なり、事文類集に曰く、「伏日に詔して從官に肉を賜ふ、太官日晏くして來らず、東方朔獨り劍を抜きて肉を割く、同官に謂ひて曰く、伏日は當に蚤く歸るべし、請

ふ、賜を受けんと。即ち肉を懷にして去る、太官之れを奏す、朔入る、上之れを問ふ。朔、冠を免じ、謝して曰く、朔來りて賜を受くるに、詔を持たざるは何ぞ無禮なるや、劍を抜き肉を割くは、一に何ぞ壯なるや、之れを割く、多からざるは何ぞ廉なるや、歸りて細君に送る、何ぞ仁なるやと。上笑ひて曰く、先生をして自ら責めしむ、乃ち反りて自ら譽めしむと。又、酒と肉とを給ふ。」

●巧唇薄舌は能辯をいふ。

●子雲は楊雄の字、嘗て太玄經を作る、人の嘲るを聞き、之れが嘲解を作る。

●多寶如來の舍利塔なり。釋迦如來、靈鷲山に於て法華經を説き給ふ時、その半にして塔地下より出づ、空中に住る、塔中聲あり、釋尊の説法を證

答處、石を買ふては雲を得ること饒し。人有り若し如上の間を致さば、只だ他に對して道はん、能く萬象の主と爲つて、四時を逐ふて測ますと。結夏上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、飛龍天に在り、肅宗帝、位に靈武に即く。客星座を犯す、嚴先生詔に炎劉に應ず。一絲九鼎、萬春千秋。」

垂語、「禁網を劈破して、三期を守らず、教外の旨を聞かんと要す麼。杜鵑啼いて落花の枝に在り、有り麼。」僧有り、衆を出でて云く、「兩箇の黃鸝、垂柳に啼く、臨濟の賓主歴然たり。一雙の胡蝶葵花に上る、達磨の兄弟來る也。祖師禪は且く之れを置く、願はくは祝聖の一句を聽かん。」師云く、「王寶殿に上れば、野老謳歌す。」進んで云く、「寒巖四月始めて春を知る。」師云く、「律呂調陽。」僧云く、「趙州古佛、僧に示して曰く、「鉢盂を洗ひ去れ。」其の僧使も悟る、此の意如何。」師云く、「水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に滿つ。」進んで云く、「學人未だ悟らず、請ふ師慈悲。」師云く、「三十棒。」進んで云く、「荆山に到らすんば、争か璞を得て歸らん。」師云く、「侍者禪に參得し了れり。」

成し讚嘆せりと。
⑤五岳の雲、石に連りて起る時は、石は雲の根也と、賈島の詩に、「橋を過ぎて野色を分かち、石を移して雲根を動かす」と。

⑥處士嚴光、字は子陵、漢の光武の故人なり、齊國にあり、羊裘を着て澤中に釣る、微し至る、亦屈せず、帝、光と同じく臥す、光足を以て帝の腹に加ふ、明日太史奏す、客星御座を犯すこと甚だ急なりと。帝曰く、朕故人嚴子陵と同じく臥するのみと。

⑦臨濟爲人の施設、四料簡と共に接化の方便として用ひらる、賓中の賓、賓中の主、主中の賓、主中の主これなり。
⑧楚人下和、玉璞を荆山に得、奉じて之れを厲王に献す、厲王玉人に之れを相せしむ、玉人曰く、石なりと、故に王、

提綱、「十五日以前、翠巖の眉毛、一莖兩莖落つ。十五日以後、黃葉の拄杖、七尺八尺餘る。護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居。是の故に能仁、九句を剋期す、蜂房を獅子窟と作す。濡首、三處に度夏す、龍光、斗牛の墟を射る。龍蛇凡聖、泥玉車書、崑崙の核子、機に随つて吞吐し、虚空の布衫、手に信せて卷舒す。」杖を拈じて、「黒面翁側に在り、出で來つて軒渠して云く、「西天の勝人冰、株を守つて兔を待つ。東土の鐵彈子、木に縁つて魚を求む。」帝に佛性を瞞頂するのみならず、況んや復た眞如を、備伺するをや。然も恁麼なりと雖も、這裡何を以てか親疎を分たん。」卓一下して、「陶潛、東林の社に入るに懶し、在在の青山廬を結ぶ可し。」

自序、「宗休、這の雜道人、賈長老と稱す。北岳の移文に愧づること有り、恐らくは東坡が詩案に坐せられん。汗顔泚額。」
謝語、上堂の次で、「共しく惟れば、養源東堂大和尚、古道の顔色、宗門の爪牙、克家の的流、禪源を末派に分つ。無邊の眞照、佛日を中天に掲ぐ。秦瞻斗仰に任へず、誰か涇濁消清を辨せん。」

和の左足を則る、武王位に即く、又之れを献す、同じく又右足を則らる、和乃ち荆山の下に璞を抱いて哭する、こと三日、涙盡き、之れに繼ぐに血を以てす、王之れを聞き、其の故を問はしむ、實を以て告ぐ、王乃ち玉人に璞を理めしめしに、果して玉を得たり、彼の連城の玉之れなり。

⑨未だ器を成さざる形。

⑩東林の社は明神宗の頃、顯蓋成なるもの、清流の徒を集めて一大民黨を作り、黨勢大いに盛なりしが、宦者事を爲すに至り、遂に亂れて明滅ぶ。

⑪南北朝の時、齊の周顒、字は彦倫、鐘山に隱れ、後詔に應じて出でて海鹽縣の令と爲り、却りて此の山を過ぎんとす。會稽山陰の人、孔稚珪、鐘山の草堂を過ぎ、之れを鄙みて北山の移文を作る、願を

次に惟はば、大心東堂大和尚、氣、諸方を呑み、脚、實地を踏む。千萬世の林際、後人標有り。七八生の雲門、知識種無し。吾れ間然すること莫し。自愛珍重。

又惟れば、山門の兩序、滿堂の四衆、諸位禪師、兩序鶴立雁行、四衆象旋獅擲、甚だ希有、甚だ希有。摩利山に登れば、片片皆梅檀。也太奇、也太奇。金剛窟に入れば、寸寸是れ藥草、集めて而して大成す。豈に小補と曰はん、各乞ふ道照せよ。

拈提、「記得す、偃溪の聞禪師、結夏上堂に曰く、「十字街頭、大圓覺海、色を逐ひ聲に隨ふ。家風落頼、甚の西天の様子をか討ねん。東倒西播に一任す」と。偃溪の提唱、古今に絶唱す、言端語端、尋常未だ臭氣を免れず。頭正しく尾正し。只だ是れ知音に逢はず、我が窓前の月に和して、君が石上の琴を弾す。」拂一拂して、「啞齒臨啞部臨。」下座す。

冬節上堂、祝聖して、「大日本國山城州平安城 正法山妙心禪寺云云。有つて、四夷守り、征無くして萬邦安からんことを。」

垂語、「冬日線を添ふ、一釣竿と作す、有り慶。向上の事を知らんと要せば、子陵灘を話すること莫

して再び此の草堂を過ぎるを得ざらしむ、北山は即ち練山なり。

①泰山を看、北斗星を仰ぐ意にして、唯だ瞻仰などに同じ。

②涇水は濁り、渭水は清む、合流三百里、清濁混ぜず、借りて以て物事の區別明かに定まるに喩ふ。蘇軾の句に、「胸中涇渭分る」とあり。

③左傳昭公二十三年に、「古は天子守り四夷に在り、德遠くに及び、四夷代つて之れが守りを爲す所以なり。」

陛下恭しく願はくは、道

れ。僧有り、衆を出でて云く、「眞照無邊、漢女宮 中一線日長し。太平象有り、魯侯臺上五色雲興る。宗風を振起し、寂算を祝延したまへ。」師云く、「早朝不審、晩後珍重。」進んで云く、「枯木花を開き、虚空迸裂す。」師云く、「果然。」僧云く、「記得す、松源冬至上堂に曰く、「暑運推し移り、日南長至」と、是れ恁麼の祥瑞ぞ。」師云く、「日日是れ好日。」進んで云く、「陰陽に涉らざる底の一句、得て聽く可し。」師、拂を以て禪牀を撃つて、「聞く麼。」進んで云く、「和尚道ふ底と松源道ふ底と、還つて親疎有り麼。」師云く、「親しき者は問はず、問ふものは親しからず。」進んで云く、「南山に鼓を打てば北山に舞ふ。」師云く、「迦葉門前風凜凜たり。」進んで云く、「諸佛の智慧、解し難く入り難し。謹んで答話を謝す。」師云く、「少年の僧に 孤負す。」

①日影の推し移ること。
②易に「乾は元亨利貞」とある、傳に「元亨利貞は之れを四徳といふ、元は萬物の始め、亨は萬物の長、利は萬物の達、貞は萬物の成なり、惟だ乾坤にこの四徳あり、之れを春夏秋冬に配す。」
③南及び参に各二十八宿の一星なり、其の分位南北にあり。
④雲韶は虞舜の樂、夷鞞は四夷の樂なり。

慈明の臭老婆を罵つて、傍提横案。臨濟の白拈賊に逼つて、活捉生擒。耐耐なり蒙莊座主、劍を説いて周宋の鐔に誇る。然も此の如くならしと雖も、一陽未だ萌さざる底の時節、諸人何の處に向つてか參尋せん。卓一下して、「暗に玉線を穿ち、密に金針を度す。」

自序、「宗休、全俗全真、青油幕下に坐して、謝宣の面を作す。至愚至陋、明鏡臺前に臨んで、演若が頭に迷ふ。憐察せよ。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門兩序、雲堂の萬裕、問話の禪客、諸位禪師、百萬の衆を舍衛に領じて、歩歩獅擲象旋。七十子を孔門に列ねて、箇々龍蟠鳳逸。蓋し大厦を支ふる者は一木に非ず、況んや六瑞を感じて而して四花を散するをや。嗚乎、盛なる哉。」

拈提、「記得す、古徳冬節上堂に曰く、「物有り天地に先つ、之れを仰げば彌高し。形無うして本寂寥、之れを鑽れば彌堅し。能く萬象の主と成りて、之れを瞻るに、前に在るかとするれば、四時を逐ふて測まず、忽焉として後に在り」と。古徳の拈語、佛に入る可し、魔に入るべからず。山僧也た一一他に代り去らん。物有り天地に先つ、紫金光聚、河沙を照す。形

① 慈明楚圓禪師なり。
② 白晝に盜賊を働くものをいふ。聯珠錄に、「蟻蜂曰く、臨濟大いに白拈賊に似たり、雪寶曰く、夫れ善く竊むものは鬼神も不知」と。

③ 耐耐は心に煩悶すること、忍ぶべからざることをいふ。
④ 鐔は劍の「つば」、又は小劍をいふ。

⑤ 孔子の門下傑出せるもの七十、其の中又十哲を抜く。
⑥ 釋尊在世の時の居士なり、維摩詰、維摩經詰、淨名、又は無垢と稱す、毘舍利城の長者なり。

⑦ 支那山西省代州五臺縣、今の西安府の東北一千六百華里の地にある五臺山をいふ、一に清涼山ともいふ。華嚴經菩薩住所品の「東北方菩薩住所あり、清涼山と名づく、過去菩薩あり、常に中に住す、彼に

無うして本寂寥、天上人間意氣多し。能く萬象の主と成りて、曾て文殊に教して徒衆を領じて、四時を逐ふて測まず、毘耶城裡に維摩を問はしむ。」

歲旦衆に示して云く、「古に道く、「元正啓祚、萬物咸新なり」と、元正啓祚の時、諸人如何が一轉語を下さん。山僧一偈有り、大衆に供養し去らん。千偈書を銜んで玉鳳翔る、元正啓祚吾が皇を祝す。春風吹き起す關山の笛、鼓を打つて梅花上堂と叫ぶ。」

歲旦上堂、「珍重す同行の木上座、今朝例に隨つて商量を打す。新年の佛法多子無し、三尺の龜毛箇の長きを添ふ。」
噉典座夏齋を謝する上堂、「吾が肥典座、鍋兒と叫ぶ、五臺の雲を蒸して飯と作す時、大地都盧無底の鉢、黃梅七百の僧を盛り來る。」

現に菩薩あり、文殊師利と名づく、一萬菩薩ありて常に說法す」と。無著文喜、五臺山にありて典座となる、文殊彌鍋上に現す、無著遂に之れを打して、「直徳は釋迦老子來るも、我れ又打せん」といへる話柄、師林に驗矣す。
⑧ 達磨禪師第五祖大慧弘忍禪師、支那南州黃梅の人なり、會衆常に七百、六祖慧能之れに法を嗣ぐ。

駿州大龍山臨濟禪寺語錄

侍者 某 綱

山門、指して云く、「長沙の七歩を超え、臨濟の三關を透る。更に那一關の在る有り、富士の雪、鐵壁銀山。」喝一喝す。

佛殿、「殿裡底何物ぞ、飛花晚風に舞ふ。看よ看よ、天は開く二十五の圓通。」禮拜す。

土地、「張大帝鬼神の爺、四百年漢家を護す。詩を以て汝に贈る、邪無し、思邪無し。」

祖師、「三蘆東に渡る、餘波未だ收まらず、今日捉敗了也、袁達李磨賊頭。」

據室、「維摩の室、月を以て明と爲す、山僧が室、雪を以て明と爲す。別別」と。打つて云く、「三尺の竹篋子、毘耶城を打破す。」

府帖、帖を拈じて云く、「塞外は將軍の令、舊邦其の命新なり。補袞調

① 靜岡縣安倍郡安東村にあり、享祿四年駿河の太守今川氏輝の開基にして義元の建立に係る、開山は圓滿本光國師、神創開山を寶珠護國といふ、後奈良天皇の勅願所にして、伽藍の修繕等、皆勅命により國司の行ひし處、舊寺格は中平寺、壇致開運、伽藍宏莊、大書院の一室は徳川家康、嘗て今川氏に人質たりし時、居住せし處なりと。

② 長沙長岑禪師、南泉普願の法嗣、僧をして會和尚に問はしめて曰く、未だ南泉に見えざる時如何、會、良久す、僧曰く、見えて後如何、會曰く、別にあるべからず、僧過つて沙に擧似す、沙曰く、百丈竿頭に坐する底の人、然かも得入すと雖も、未だ眞となさず、百尺竿頭須らく歩を進むべし云々と。

③ 論語に曰く、「子曰く、詩三百、一言以て之れを蔽へば、曰く、思邪無し」と、詩は詩經三百十一篇の詩をいふ。

④ 住持人のよるべき室、方丈室中の義なり。

⑤ 公文、即ち知府より降す文なり、校定清規に新任持入院の註に云く、「先づ教誨を讀み、省別、或は府帖、山門の疏、諸山の疏、次第に宣讀すべし」とあり。

⑥ 住持を請する山門の疏は、勸請を叙し、諸山の疏は罵を促すを叙し、江湖の疏と、道舊の疏は賢を展ぶるを叙すと。

奠の手、正法輪を撥轉す。」

山門疏、「森々として文章波瀾濶し、陸海を呑み潘江を吸ふ。花簇々錦簇々、異代同名の夢窓。」

拈衣、「黃梅夜半盧公に傳ふ、一絲九鼎、金輪峯下華姪に付す。大法千鈞。」搭起して云く、「無縫の鐵崑崙、兩肩擔ひ起さず。」

登座、「奮迅三昧より起つて、活獅子、馬と作して騎る。燈王佛燈王佛、我れに一座の須彌を還せ。」

祝聖、「大日本國駿州路大龍山臨濟禪寺、新任持傳法沙門宗休、謹んで寶香を焚いて、端に爲に、今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、國家萬國より安く、玉燭四時を調ふ、多

君苞桑の計、百世其れ本支。」(萬國を一に萬石に作る。)

檀那、「這の香、寶爐に薰向して源府君の爲に祿算を資倍し奉る。扶桑の弓を囊にして、則ち東のかた齊の四履を盡す。青萍の劍を匣にして、則ち西のかた魏の三河を運ぬ。石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

嗣法、「這の香、寶爐に薰向して、虛堂十世、前住大德後住妙心特芳老漢

法乳の恩に酬い奉る。」

垂語、「聖諦第一義、早く是れ便宜に落つ、諸佛出身の處を知らんと要す。蕪風南より來る。參。僧有り、衆を出でて云く、「綿蕪茅を束ぬ、百丈の規矩曾て紫詔を拜す。布金草を挿む、三代の禮樂、今緇衣に在り。頼に佛法東漸の時に値ふ。願はくは、祖宗南頓の旨を示したまへ。」師云く、「三門舊に依つて南に向つて開く。進んで云く、「允なる哉、河、圖を出し、洛、書を出す。師云く、「劃前に易有り、刪後に詩無し。」僧云く、「記得す、虛堂老祖、九九の數に丁りて徑山に再住す、教有つて雪を祈る、謂つ可し奇外の奇なりと。」師云く、「寒の時は閑梨を寒殺し、熱の時は閑梨を熱殺す。」進んで云く、「寒巖四月始めて春を知る。」師云く、「鷓鴣啼く處、百花、香し。」進んで云く、「老和尚、九九の數に應じて、教許を賜つて初めて吾が山に住す、況んや雪の頌有るをや。僉曰ふ、老虛堂再び出世すと。」(出世を二に出現に作る。)師云く、「家醜を外に向つて揚ぐる莫れ。」進んで云く、「溪山異なりと雖も、雲月はれ同じ。」師云く、「別別、風に和して搭在す玉欄干。」進んで云く、「金春、玉應、謹んで答話を謝す」といつて便ち禮拜す。師云く、「此れ

- ① 蕪々ば水の満ちて廣き貌。
- ② 大滿禪師、六祖慧能禪師に衣鉢を傳ふるを云ふ。
- ③ 四時調和するを玉燭といふのみ。
- ④ 弘忍禪師の禪、北神、南龍の二派に分る、南龍は頓禪なり、これ達磨の直傳なり。
- ⑤ 河圖洛書共に、周易と書經洪範九疇との根源をなす圖書にして、數理の祖なり、易の繫辭に「河、圖を出し、洛、書を出す、聖人之れに則る、天一地二天三地四天五地六云々」と。孔安國の註に「河圖は伏羲氏の天下に王たる、龍馬河より出づ、則ち其の文に則り、以て八卦を畫す、洛書は禹、水を治むる時、神龜文を買ひて背に列す、數あり、九に至る、禹遂に因りて之れを序し以て九類を成す」と。
- ⑥ 玉のかけたる如き帶環、君子

は是れ還佛場、心空及第して歸る。」

提綱、「乾坤の内、宇宙の間、中に一寶有り、龍山に秘在す。府主の請に因つて而して開堂し、住山の鈍斧を提ぐ、天子の詔を拜して而して入寺し、下瀬の玃環を鳴す。吾が祖昔徑山(一)に雙徑を作る。)に住す、此の郎今百蠻を領す。東海の見孫、八十一の黃塵烏帽、西湖の長老、五十三の白髮蒼顏、圓覺場中の列聖、象旋獅獅、通明殿上の侍臣、鶴立鷓班、黒漆の拄杖子魔佛を打し、寶劍の金剛王癡頑を斬る。」杖を拈じて、「正與廢の時、彌勒の下生を待たす、夜摩の瑠璃、兜率の瑪瑙、香嚴の本寂を印せず。錢塘の鸚鵡、吳岫の鷓班。明月の珠光燦爛、流水の經響。潺湲。萬年の松、萬年の枝を抽く、以て規し以て祝す。炎天の梅、炎天の葉を吐く、望み難し攀ち難し。酒珍、無盡藏を開き、良策、太平の寰を定む。」卓一下して云く、「疎簾雪を見て捲き、深戸花に映して關す。」

自序、「宗休、九夷に居らんと欲す、魯叟匏瓜食はれず、將に三徑に歸らんとす。晋人松菊猶は存す。茲に英檀の命に逼られて、拒辭すれども允さず、強ひて祝座に陞つて野干鳴を作す。漸汗漸汗。白槌の謝、開堂の次で、「共しく惟れば、龍泰堂頭大和尚、瑞龍、大智雲を興す、池中の物に非ず。睡虎

- 玃を尊ぶ故に之れを帶ぶ。
- ② 浙江省杭州府にあり。
- ③ 水の靜かに流るる貌。
- ④ 白居易の詩に「香爐峰の雪巖をかゝけて看る」と。
- ⑤ 歸去來辭に、「三徑荒に就き、松菊猶は存す。」隱遁者または挂冠せし人の門庭を三徑といふ、又は自己の園圃をいふ。
- ⑥ 獅子吼に對し、修道未熟なる人の胡道亂説を貶下して言ふ語なり。
- ⑦ 五千餘卷の經文をいふ。

多羅藏を典る、教外の宗を立す。衆の歸する所、也た誰か仰がざらん乎。茲に尊を降りて卑に就き、槌を鳴して法を證することを辱うす。激切屏營の至りに堪ふる無し。下座して必ず十笏室に趨つて、一炊巾を展べん。」

總謝「又惟れば、四來の耆宿、一會の名細、諸位禪師、獅子、後を産す、無量の釋迦を賢劫に出す。雞卵、鳳を生ず、河沙の妙徳を心源に接す。嘗に四天下の獨尊を仰ぐのみならず、況んや復た十地上の大士と稱するをや。各各道體、起居萬福。」

拈提「記得す、僧、松源に問うて曰く、「只だ大師郡王、一毫端に於て彈指を勞せず、是の如きの清淨の寶刹を成就するが如きんば、昔の賢干とは是れ同か是れ別か。」師云く、「動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せず。」此の僧の間端、水を掬すれば、月手に在り、松源の答處、花を弄すれば、香衣に滿つ。休上座亦職翁に代つて、聊か微を表し去らん。乳峯碧を登し、錦鏡輝を流す。」

①多數の賢人、世に出現する時期といふこと。
②菩薩より佛に至る迄、修行上の階級、即ち十住、十行、十回向を経て至る位にして、此の位を超えて等覺、沙覺と進むなり。
③雲巖山の別名、山中に錦鏡池あり、流れて深谷に下る、雙洞並び落ち、恰も雙乳の流下するが如し、故に名くと。

尾州青龍山瑞泉禪寺語錄

侍者 某編

山門、指して云く、「瑞泉の一滴、松源を激揚す。」左右を顧視して云く、「青龍を駕與する者、來つて箇の門に入れ。」喝一喝す。
據室、「扣玄室中、佛魔交接。」案を打つて云く、「草を打つて蛇を驚かし、花を移して蝶を兼ぬ。」

拈衣、「曹溪の直履に依倚として、靈山の金襴に彷彿たり。別別。」搭起して云く、「一把の柳枝收不得、風に和して搭在す玉欄干。」
祝聖、「大日本國尾州路丹羽縣青龍山瑞泉禪寺新持住傳法沙門宗休、謹んで寶香を焚いて、端に爲に 今上皇帝 聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。 陛下恭しく願はくは、仁徳春を回す、三王を四にし、五伯を六にす。喜氣雪を消す、白虎を右にし、青龍を左にす。彌樓山を仰いで壽山と爲し、香水海を湛へて福海と作す。」

①直ちに嗣ぐの意なり。
②伯は諸侯の盟主の意にして、もと侯伯の伯と混するおそれあるより、嗣の字を須ふ、齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の莊王を五伯といふ。
③西を白虎、東を青龍といふ、天の四方の星象によりて名く。
④彌樓山の周圍をめぐる海なり。
⑤杜鵑なり。
⑥列子に、「渤海の東に五山あり、一を岱輿、二を員嶠、三

開山、香を拈じて、「梅花雪一枝を攀折して、住山薄福恩を報じ來る。端無く穿卻す崑崙の鼻、四海の香風是れより吹く。」
退院、「自ら乃翁に代つて住山と稱す、三年の光景髮斑斑たり。一聲の杜宇袈裟角、蓬萊の左股を割取して還る。」

を方壺、四を瀛州、五を蓬萊といふ。」

偈頌

佛涅槃 八首

鳥啼き花落つ涅槃臺、竺土の山河灰よりも冷じ、須彌千百億を割取して、瓣香喚び醒す臥如來。

西方に美有り花に背いて歸る、生死涅槃皆昨非、無色界中多少の涙洒いで細雨と爲つて春衣を濕す。

是れ正法耶邪法耶、多羅八萬塵沙を撒す、番番の諸佛世に出づ、先づ梅花に始つて棟花に終ふ。

紫金光聚河沙を照す、識らず生耶是れ滅耶、東風に向つて斯の意を問はんと欲す、鶯に和して吹き折る一枝の花。

業風吹き起す二千年、大地山河佛骨羶し、今日一錠に錠碎し了る、鳥啼き花落ちて又蒼天。

西に美人有り無頼の查、袈裟一別天涯を隔つ、愁腸斷盡す崑崙の鐵、

①偈は梵音伽陀、頌は支那に於ける詩の六義の一、伽陀の譯語なり、偈頌は梵漢兼舉の名稱とす。

②三界の一、最上位にある天界、無所有所、非想非々想處是れなり、此の界はすべて形無く、たゞ識のみありて住す、故に無色界といふ、色界の衆生も色身の繫縛より離れて、進み入る境界なり。

③多羅は經卷のこと。
④あふち、高さ丈余、葉は槐に似て尖り、三四月頃花を開き、紅紫色なり。

⑤紫磨金ともいふ、紫の光澤ある黄金のことなり。轉じて又釋尊の御肉身をいふこともあ

猶ほ是れ春閨夢裡の花。

玄と説き妙と説く作屢生、一字の全く筆耕を借る無し、此の老元來太平の賊、果然として陥卻す鐵圍城。

大小の瞿曇度生と叫ぶ、看來れば食を奪ひ又耕を驅る、簾前の細雨花に張ぐ涙、五百由旬一化城。

佛生日 十首

他は是れ西方の一美人、銀盤浴し出して曉粧新なり、袈裟錯つて毒花に觸れられて、腸は斷ゆ 毘藍園裡の春。

東海の鯉魚 薄伽尊、韶陽の棒下雨盆を傾く、塵勞八萬洗へども何ぞ盡さん、滿架の薔薇露一痕。

竺土の山河襍穢の中、不祥の兒梵宮王に坐す、滿身の泥水狗も何ぞ喫せん、一棒は他の跛脚翁に還す。

咄哉 丫角の黒崑崙、華堂を坐斷して獨尊と稱す、猶ほ冤讎を結ぶ二千歳、花を打つの風雨老雲門。

韶陽の棒下平なること能はず、藥嶠の杓頭化生を弄す、別に吾が家の

るなり。

① あゝ悲しいかなといふ嘆聲なり。

② 查は様、「いっただなり。

③ 輪轉那、輪圍那、踰延那、由延ともいふ、門量、又は合應と譯す、印度に於ける距離を計算する名稱なり、一日の行程に名くるものにして、三十里或は四十里にして、六丁を一里としたるものなり、異説多し。

④ 重尼尼園のこと、降誕會に用ふる花御堂、花亭のことなり。

⑤ 薄伽婆、世尊と譯す、佛の敬稱なり。

⑥ 雲門禪師をいふ。

⑦ 雙のむすび方の名、あげまき、小兒の結ぶ髪なり。

⑧ 藥山惟嚴禪師なり。

⑨ 臘月八日、釋尊が明星を見て佛道を證得したまひし翌日なり。

蠱毒水を濺いで、全身陥卻す鐵圍城。

未だ母胎を出でざるに三十棒、西天東土禍殃生ず、薔薇誤つて微風に觸れられて、露は碎く水晶簾外の聲。

元是れ如來の淨法身、周行七步泥塵を曳く、藥山の杓柄長きこと多少ぞ、葉底の殘紅雨春を洗ふ。

露柱懐胎也太奇、果然として這の不祥兒を生ず、餘殃未だ了せず二千歳、洗出す薔薇の雨一枝。

韶老の棒頭天下の疼、等閑に敲き出す紫金容、若し耻を雪ぐ薔薇の雨無くんば、也た是れ開梨飯後の鐘。

西天の老沙門、冤を報するに卻つて恩を以てす、花を獻じて春手に在り、水を洒いで月に痕無し。

佛成道 八首

昨夜南に向つて 北辰を見る、眼中八萬四千の塵、瞿曇老也た虛堂老、古今羞を識る一人も無し。棒頭に眼有り火星飛ぶ、活瞿曇に逼つて鐵圍に陥らしむ、坐して 驢年に到るも道を成せず、滿山の風雨急に歸り來れ。

六年嶺北雪の生涯、錯つて星兒を認む老釋迦、成道任他あれ空劫の外、工夫猶ほ未だ梅花に到らず。我れに瞿曇の活眼睛を還せ、六年間坐鈍遲の生、依然として未だ舊窠窟を出でず、西に 長庚有

り東に啓明。

苦なる哉天竺の古先生、雪北六年功成らず、錯つて無量の秤子上に墮す、三千の佛國一毫輕し。

雪嶺聞く時九鼎重し、明星を見て後一毫輕し、今朝縦ひ是れ成道と叫ぶも、猶ほ梅花の老師兄有り。(老師兄を一に老主兄に作る。)

天上一枚の星を貪り見て、錯つて多羅八萬の經と作す、今日重ねて此の義を宣べんと欲す、黃鶯谷を出でて又叮嚀。

六年雪北不毛の地、一卷の兵書妄談を打す、星營中に落ちて諸葛死す、臥龍奮迅す活羅曇。

智門蓮華の話

智門公案の中を透得して、荷花雨過ぎて一枝紅なり、大唐國裡人の會する無し、吹き起す香風日本の東。

蟄龍

泥蟠豈に久しく地中に屈せんや、桃花三月の風を待たず、別に禿僧霹靂の手有り、拈じ來つて拄杖を虚空に靠く。

須彌の枕子

山形の枕子逍遙に任す、大仰機に當つて推せども搖がす、忽ち秋風に夢を吹き破らる、須彌百億小芭蕉。

仲秋、破沙盆の話を頌す

七花八裂太虚空、正法元來汝が躬に在り、跣跳す密庵の舊窠窟、秋天の明月一盆紅なり。

臨濟、半夏に黃檗山に上る 二首

風顛夏を破つて等閑に還る、葛地に踢蹴す黃檗山、若し他の爲に一棒を行せずんば、尋常黑豆の老癡頑。

黃檗山頭に正宗を滅す、喝雷棒雨活機鋒、尋常尾を擺ひ頭を搖かし去る、濟水那邊に大龍と化す。

鐵狗

銅頭鐵額黑崑崙、紫金光聚の尊を活喫す、趙州の皮袋裡に入らず、一聲月に吠ゆ落花の村。

雲門箇の一字

雪千峯を覆ふて天未だ晴れず、那僧の間處大運生、箇の一字雷霆の舌、

永平正法眼藏示衆に曰く、天上の天花、人間の天華、天雨曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華、及び十方無量國土の華は皆雪裡梅花の屬なり。梅華の恩澤なうけて花開するが故に、百億華は梅華の眷屬也と、梅花は即ち佛祖廣大の心華にして、宇宙を一梅華と拈出するの提撕なり、以て知るべし。
青原下七世智門光祥、香林澄遠の法嗣、僧との問話に曰く、僧智門に問ふ、蓮花不出水の時如何。智門曰く、蓮華。僧曰く、出水の後如何。門曰

く、荷葉」と。これ借事問なり、言名數句を離れて參究せんことを要す。
傳説に曰ふ、禹門に三級の瀨あり、三月に至る毎に、桃花の浪漲る、魚よく水に逆ひ躍つて、浪を過ぐるものは即ち龍と化し、風雷を起し其の尾を燒いて天に上ると。
破れすり鉢のこと。
應庵曼華禪師の法嗣、密庵成傑禪師なり。
信趙州に問ふ、狗子還つて佛性ありや、也た無や、州曰く、有り、僧曰く、已に有り、甚麼として、這箇の皮袋に撞入す、州曰く、他の知つて故らに犯すが爲なり、又僧あり、問ふ、狗子還つて佛性ありや也た無や、州曰く、無、僧曰く、一切衆生皆佛性あり、狗子什麼として却つて又無なる、州曰く、伊に業識あるが

吹き散す檐間積雨の聲。

佛法は一隻の船の如し

慧明の一隻舟に駕起して、垂絲千尺凡流を截る、風を罵り雨を喝す浪花の底、金鱗を釣らすんば誓つて休せず。

① 鰲山に雪に値ふ 二首

店上未眠の僧一枚、今朝成道六花堆し、當時若し是れ巖頭老ならば、鰲山に和却して踏倒し來らん。

② 三人一隊の野狐精、何事ぞ連聲に老兄と叫ぶ、箇々看來れば白拈賊、鰲山成道假銀城。

靈雲、桃花を見る

呵呵大笑す豁然の時、觸發す春風桃一枝、娘生本來の眼を打失す、靈雲も亦暗證の禪師。

鐵拄杖

一條の拄杖虚空に靠く、鐵樹形成つて全く功を絶す、若し南泉をして正令を行せしめば、普賢妙徳落花の風。

須彌の筆

東海松蘇利に涵して傾く、須彌百億一毫輕し、分明なり紙上の燈王佛、跳つて西來五字の城に入る。

成就四法

妙の一字佛も宣べ難し、元是れ逆に非ず普賢に非ず、四法成るを待つ遅八刻、花は開く天地未分の先。

大江和尚、百丈に住するの日、祖塔を拜する偈有り、其の韻に依る

百丈山高し向上の禪、眞丹國也た扶桑の邊、縱然ひ野鴨飛び過ぎ去るも、只だ大江春水の前に在り。(扶桑を一に搏桑に作る。)

① 支那及び日本をいふ。
② 百丈野鴨子の公案をいふ。

爲なりと。

③ 靈峰義存禪師が師兄巖頭全盛の提擲を受けて、鰲山に在つて大悟成道せしを云ふ。

④ 巖頭、欽山文遠及び靈峰三人、友を結び遅く宗師を訪ふ。

追悼

不二和尚、西源翁を悼むの韻に次ぐ

翁吾れに負くか我れ翁に負くか、猶ほ冤苦を添へて蒼穹に哭す、他家親しく白雲の子を得たり、天外の青山父の風有り。

鄧林和尚を悼む

久しく龍潭と響く多少の風、平生四海の一禪翁、雷霆の意氣皿盆の口、紙燈を吹滅して霜葉紅なり。

玉衡座元を悼む

玉衡座元は、吾が衡梅祖翁の徒なり。大愚の祖塔を守つて而して晨香夕燈忘る無し焉。一日造化の兒に觸れて、溘然として逝く矣、寔に享祿四年春二月五莫なり。吁、吾が門の不幸、焉れより大なるは莫し、訃を聞く者、嘆息せざる靡し。予も亦偈を作りて以て諸徒の悲哀を助くと云ふ。

璇璣は北に轉じ 玉衡は南、五十年前二十三、吾れ豈に知に酬ゆるに

① 宗榮大愚と號す、智門祥に嗣法す、寛文中、朝廷特號を諸相非相禪師と賜ふ。

② 俄かに變する貌。
③ 五莫は五日に同じ。莫は晝夜にして、幾の時に生じたりといふ瑞草、月の一日より十五日までに日毎に一葉を生じ、

一瓣無からん、鼻端先づ晚梅に向つて參せよ。

景堂和尚を悼む

① 大心の硝子活機録、三尺の 龍泉正宗を滅す、
② 舌猶ほ在り雷聲□、
雨點□□長松。

天龍寺眞乘院祝英座元を悼む

龍門十日折り残す花、其の人を見ず感慨加はる、無色界中多少の涙、西山の雨と作つて袈裟に洒ぐ。

宗順杜陀を悼む

三十才名惜むべき哉、胸中の書傳寒灰と變す、家山一片の好風月、春は梅窓に在り歸去來

大藏西江軒雪窓首座を悼む

大藏五千の文字禪、西江の一滴錯つて流傳す、花に先つて吾が首座行脚せり、春雪吹き残す臆の半邊。

謙仲讓首座を悼む

空しく記す同名 南嶽の碑、閻浮五十七年移る、薰風は吾が徒の慍を解かず、吹き折る炎天の梅一

十六日より晦日迄には亦日毎に一葉づゝを落せりといふ。
① 一種の玉、又北斗七星の第二位の星なり。
② 星の名なり。
③ 一瓣の香をいふ。
④ 小城の人なり、初め景川隆に參じ、其の心印を傳ふ、後、妙心寺に出世し、永正享祿の間、二回尾張の瑞泉寺の住持たり、天文十年十二月賊の爲に切られて歿す。
⑤ 初め景川の跡を繼いで大心院に住す、故に爾といふ。
⑥ 銘銀の名。
⑦ 赤字不明の處。
⑧ 六祖慧能の法嗣、南岳懷讓禪師の譲りをとる、故に之れをいふのみ。

枝。

宗慶庵主を悼んで瑞應和尚の韻に和す

瑞應堂上老師、家兄宗慶庵主を追悼す、余高韻を攀して一哀を助く。

識らず家兄何の日か来らん、疎鐘落日決然として離る、老松世を閱して雲壑に臥す、定んで焚公東に指す枝有らん。

韻を次いで譽禪尼を悼む

龍女の寶珠一瀧を認む、今古に禪騰して價何ぞ休せん、荷花紅碎く新地の雨、疑ふ是れ芭蕉秋に耐へざるかと。

某禪尼を悼む

返魂一炷鐵崑崙、報せんと欲するに元來是れ恩にあらず、大義渡頭千古の恨、落花流水江村を繞る。

天慶祐公禪尼を悼む

卒に一偈を賦して、玉何藏主に寄せて、天慶祐公禪尼を悼む。以て

井年の齋筵に赴かざるの罪を償ふと云ふ。

去年今日風光に別る、斷盡す梅花鐵作の腸、小玉聲中入見えす、枕屏の殘夢醒めて猶ほ香し。

①一つのあわなり。
②井は一めぐりして、又新たに
なるより、年の始めをいふ。

韻を次いで先天居士を悼む

橘家の跨竜又跳樓、昨日は慈恩今は驛と作る、劍樹刀山芭葉の雨、風流ならざる處也た風流。

光翁巨公大禪定門を悼む 細川六郎殿

遠き者は聲を呑み近き者は悲しむ、頭を回せば冬日影西に移る、牡丹一閨春は夢の如し、王老庭前陸を召す時。

韻を次いで徳勝居士を悼む

八十年の非今日知る、虚空消殞す身を轉する時、無去無來の處に藏れんと欲す、月に叫ぶ梅花孤雁の枝。

宗鼎宗斑二禪門を悼む

龍金鼎に吟じ虎山に藏る、凡鱗を脱卻して一斑を露はす、父子不傳眞の消息、依然として花は帯ぶ舊紅顔。

天澤和尚十三回忌

恭しく以れば、吾が大法兄、前住龍峯天澤大和尚、大梅の梅子にして、而して龍雲の鼻祖なり。外、朴直を示し、内、溫雅を懐く。癡然として衣に勝へず、頗る古衲子の風有り焉。潛行密用、誰か其

①陸且大夫、字は景、支那蘇州吳郡の人なり、唐の至徳年中、御史大夫となる、夙に坐禪を好む、初め南泉に見えて即ち問ふ、古人瓶中に一鵝を養ふ、鵝漸く長大にして瓶を出すこと能はず、鵝を損することを得ず、和尚作麼生か出し得ん。泉、大夫と召す、陸應諾す、泉曰く、出せりと。大夫茲に於てか省悟する處ありと。此の因縁を語るものなり。

②鼎、斑は暗に名字を打するなり。虎山は虎丘山なり、閩悟克勤の法嗣虎丘紹隆禪師、此所に禪風を擧揚し、大慧と共に克勤下二甘露門と稱せら

の彷彿を窺はん。熱喝痛棒、誰か其の機鋒に觸れん。謂つ可し、百世の臨濟なりと。愚昔遊方に志し、一步を發するの初め、老兄を妙法精舎に扣く。三到九登、霜辛を喫すること殆ど數歲なり、夙縁の感する所、恩讎酬いがたし矣。老兄一日、師命を受け、遂に瑞泉の法席を董す、緇素歡呼、遐邇欣伏す、祖道の光輝、焉れより盛なるは莫し。瘴雨の濡す攸、蠻烟の染む所、俄爾として微恙、溘然として化を戢む。一門の不幸、惜む可き哉。其の徒履を尾の犬山に瘞め、像を攝の龍雲に圖す。爾來、鳥積み兎久しうし、指を僂するに、今茲に永五戊辰、孟春二十有五莫は、乃ち十三白の辰なり。其の高弟妙法和尙、齋筵を先廬に設け、齊しく龍象の衆に供す矣、至れり矣。愚も亦默止するを獲す、叨りに村偈を唱へて、以て厥の丹悃を共にす。蓋し深心を將つて塵刹に奉するのみ、伏して乞ふ昭亮せよ。元是れ我が家の老大龜、先師に嗣いで先師に寫はず、金欄傳外人の會する無し、聞卻す春風花一枝。

景川和尚三十三回忌、松岳和尚香語の韻に依る

れたり。

- ① 馬祖の大梅法常、禪子に印可せし時、大梅に因みて梅子の熟するにきつしたる語なり。
- ② 瘴せたる形容。
- ③ 日月の重なるをいふ。
- ④ 後柏原天皇の永正五年なり。
- ⑤ 十三年目の忌辰。
- ⑥ 亡靈供養の建なり。
- ⑦ 香宿に同じ。
- ⑧ 諱は宗隆、伊勢の人、幼にして圓明寺に投じて剃具、後桃隱の鎚下にあること十三年、桃隱の寂後、龍安寺の雪江深に依る、京の妙心、龍安、尾張の瑞泉、丹波の龍興、伊勢の大樹寺等に隱住す、明應九年の春、大心院に寂す。
- ⑨ 北斗、牽牛星の繞る途をいふ。
- ⑩ 無間地獄をいふ、五逆罪、謗法の罪を犯せるもの此所に生る。

塔を大龜と號す多少の年、雷遷り電繞る斗牛の躡、胸中の五逆藏すこと得ず、熱鐵花開く阿鼻の烟。

景堂和尚七回忌、韻に依る

德爾齒の尊以て加ふること蔑し、吾が禪鸚鵡拏茶と叫ぶ、岐山雪白し象王の袴、銀色の普賢來つて花を獻す。

普門寺某三回忌の香語

再び普門を現す南海の涯、梅檀沈水佛陀耶、拈じ來れば物物他物に非ず、小鐵圍山太白華。

普門寺明巖座元三十三回忌

普門示現老師翁、曆數卅三汝が躬に在り、春王正月の朔を待たず、一爐の沈水、木犀の風。

寶泰寺大器座元七年忌

吾が首座曾て行脚し來る、爐香未だ冷かならず七年移る、崑崙の鼻孔無功德、炎天梅葉の詩を聽取せよ。

不孤軒德首座十三年忌

- ① 諱は玄訥、山城の人なり、始め景川に參じ、其の心印を傳ふ、景川の寂後、大心院に住す、後勅を奉じて妙心に出世す、永正享祿の間、二回尾張の瑞泉寺に住持たり。
- ② 香水の名なり。
- ③ 木犀、香木なり、沈水に似たる香氣あり。
- ④ 崑崙の意、叢林種々混雜して用ふ、此所は莊子の混沌の意をいふ、即ち「元氣未だ分れざるなり、耳目を穿ちて死す」とあるこれなり。

百億の須彌 小博山、八萬の閻浮一沈水、十有三年 德孤ならず、菊は秋香を餘し梅は藥を吐く。

以心傳公小祥忌 大永六年季春十有一日、適ち以心傳公の小祥忌辰なり。聊か 伽陀一篇を唱へて、以て菲薄の奠に充つ。

記得す去年今日の事、鳥啼き花落ちて一回 新なり、當陽拈じて小香燭と作す、喚び醒す春閨夢裡の人。

大玄宗濟上座三七日忌 勢州の人

臨濟の三關打破了、吹毛磨し盡して急に提撕す、滿林霜限ちて秋 光 冷じ、一曲の 伊州残月の西。

汝雲妙慶 大姉五七の忌

梅湖藏主、祖妣汝雲妙慶大姉五七忌の爲に、預め齋を設く。手から六喻經を贈寫し、貫華一章を唱へて、以て撫育の厚恩に酬ゆ。恩、聊か其の韻を攀づ。

生死海中一漚無し、涅槃岸畔同流を絶す、半離の残月眞の沈水、手に信せて拈じ來る専ら爲にする秋。

博山は香爐なり、海中の博山に形どる、下盤に湯を貯へ、雲氣香を蒸す、海水の四方に環るに象ると。
論語の里仁に、德孤ならず、必ず隣ありと。
偶頌のことなり、德を頌する所の詩の體にして韻文なり、宗門古來の禪詩、頌偈、頌、頌古と稱するものは、押韻平仄必ず詩の體に倣つて作る、現今用ふる法語、香譜等に至る迄、其の作法専ら詩の體による、又經とも伽陀とも稱することあり。
伊勢の人、故に點出するなり。

淵了正源信士 卒哭忌に薦す

丹州の人事、一色幕下の忠臣、遠山氏淵了正源公、今茲に永正丁卯夏五下八の日に丁りて、命を輕んじ義を重んじ、陣前に戦死す矣。所謂重賞の下に必ず勇夫有る者か。蓋し忠臣は孝門に出づる者なり、傍に觀るだも忍びがたし、況んや復た父母兄弟の情をや。遂に野偶一章を作りて、以て百日の奠に當つと云ふ。

都盧大地法身の香、心源に薰徹して十方に透る、一色明邊君自ら看よ、秋天舊に依つて遠山長し。

遠山氏某七年忌

七年一枕 黒甜の餘、父の風を慕ひ今父の書を読む、烏鉢遠山限り無く好し、先廬の脩竹影蕭疎。

月溪常圓三十三年忌

剎那三十有三秋、劍樹刀山解脫樓、信せずんば回光返照して看よ、一天の明月江に入つて流る。

聖泉居士三十三回忌

國譯圓滿本光國師見桃錄 卷之一

丹州の人、善信女をいふ、今は大居士、居士の對稱として、大姉の號を戒名に付す、如來在世中、既に大姉の語を用ひ給ふこと、太子瑞應經、行む妙等に見ゆ。
金剛經應化非身分三十二に、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀と、此の偏中夢、幻、泡影、露、電を稱して六喻といふ。
一百日の忌辰をいふ。
すべてといふ意なり、替換第三十四則の評に、寒すれども寒を聞かず、熱すれども熱を聞かず、都盧是れ箇の解脫門と。
支那南方の俗語、午睡を黒甜といふ。

雲漢に透り也た黄泉に徹す、這箇の一番三十年、自家門外の雪を掃はず、只だ看る春の早梅の邊に在ることを。

先考十七年忌

佛恩に酬ゆるか祖恩に報ゆるか、露の一字老雲門、劈開す十七年前の面、屋後の青山笑つて言はす。

柴屋居士十七年忌

先に東關に入るは山を看んが爲なり、主人去つて十七年間、松門一柴屋依然として在り、只だ恨む名を聞いて顔に對せざることを。

某三十三回忌

武関會て此の郎を失してより、幾乎三十有三霜、端無く拈出して恩に酬い去る、秋後満山楓葉香し。

先妣三十三年忌

眞箇娘生の舊面皮、元來子母相知らず、一恩三十三年の後、雪は重し梅花臘月の枝。

宗歎宗喜父子五七日忌

君臣父子、三綱を整ふ、命を戰場に殞して忠孝彰る、劍樹刀山百雜碎、當陽拈じて本來の香と作す。

① 先父をいふ、父死する之れを考といひ、母死する之れを妣といふ。
② 雲門云く、露、露堂々、古佛露柱、體露金風。皆露現、不覆藏の意を表す。
③ 居士號を打す。
④ 君臣、父子、夫婦の道、之れを三綱といふ。

す。

宗室禪門十七年忌

熱喝噴拳五逆の兒、阿鼻の火坑を掀翻し來る、恩に報ゆるが是か也た讎に酬ゆるが是か、雪を吹く炎天の梅一枝。

古月妙圓禪定尼七周忌

一千の佛母老、摩耶、百萬の人師老釋迦、今日恩に酬いて消する底の物、臘天の風雪七梅花。

華屋宗榮百年忌

曾て華屋より泉臺に落つ、往苒たる光陰一百回、我れに江南の寶薰の在る有り、秋風吹いて月中の梅に入る。

駿陽の僧の爲に、其の慈母追室妙清禪定尼を薦す

恩を報する一瓣の、鷓鴣斑、深きことは海の深きに似たり高きことは山に似たり、山は是れ士峯天下の白、相逢ふて識らす慈顔に對することを。

旭芳宗泉禪定門三十三回忌

蝸牛角上一英雄、功名を留取す、麟閣の中、碧眼黃頭夢を説くことを休めよ、天堂地獄大槐宮。

① 釋尊の母君なり。
② 長びく意。
③ 形鶴に似て稍大なり、背部は灰蒼にして、柿色の斑點ありと、又香の異名なるが。
④ 麒麟閣をいふ、漢朝、功臣の像を畫きて後世に残せしもの、以て麟閣に畫くとは功名を止むることなり。唐劉廷芝の詩に、將軍權閣神仙を畫く、一朝病に臥し相識無し」と、即ち是れなり。

玉叟玄繼居士一周忌

忠臣元孝門の中より出づ、近代麒麟第一の功、五月牡丹花夢の如し、午簾雨過ぎて微風を起す。

宗琳居士七年忌

今日相逢うて一笑新なり、分明に記し得たり七年の春、簷頭滴滴蓋微の雨、洗ひ出す阿爺の淨法身。

春陽宗照信女十三回忌

春陽秋露十三回、杜宇聲中喚べども來らず、別に 聖胎長養の處有り、一枝身を結ぶ縁苦梅。

瑞雲開基玉峯大姉十三回忌

秋風葉落つ十三年、老淚衣を濕す何の風縁ぞ、崑崙を劈破して香片と作す、瑞雲吹き起す玉峰の前。

明叟宗鑑禪定門七周忌

天文八祀八月二十九日、乃ち明 叟宗鑑禪定門七周忌の辰なり。孝子 預め仲春二十九冀に於て、供佛齋僧の次で、 苾芻衆に命じて、 一乗妙典を頓寫す。仍つて小比丘宗休が手を信ふて、この松子膜を焚いて、以て岡極の恩に酬ゆと云ふ。其の偈に曰く、

這の香佛祖不傳の傳、懷中に秘在すること巳に七年、今日看來れば松子膜、 碧落を衝開し黃泉に徹す。

春溪智雲大姉七周忌

今茲に文丑 孟春二十六冀、廻ち宜春軒主翁の萱堂、春溪智雲大姉の七回忌なり。 休也、七年の前、夜雨燒香し、七年の後、春風燒香す、蓋し風縁の感する所か。 偈を作つて以て孝子の一哀を助く。

- ① 青天をいふ。
- ② 孟春は一月を云ふ。
- ③ 宗休自ら云ふなり。

七年の春夢老婆婆、爲に勸む一杯紅杏の霞、誰ぞや前身戒和尚、香烟散じて百東坡と作る。

詩

大雲山龍安寺歲旦 四首

龍安龍峯の一龍孫、當處に豁開す甘露門、春風多少の力を借らす、大雲吹き起す盡乾坤。龍寶國師の上堂を擧す。

大雲山裡孟春寒し、敢て諸方の熱瞞を受けず、臘雪吹き添ふ新白髮、花に逢ふて猶ほ舊時の看を作す。

佛法年頭無御つて有、祖師の鼻孔舊か新か、乾元の一氣、隗より始む、花も亦黄金臺上の春。

大王萬福春來也、花は滿つ扶桑六十州、若し眉毛長きこと幾尺と問はゞ、報じて言へ西嶺雪千秋と。

徳林和尚歲旦の韻に次ぐ

新年舊歲事如何、昨日今朝也た任他あれ、翁は徳春に輝き我れは鬢雪、菱花半掩ふて獨り高歌す。

歲旦

年年何ぞ用ひん新舊を問ふことを、佛法南方古今を絶す、屋後の梅花無盡藏、門前の柳色萬黄金。

尾州青龍山瑞泉寺歲旦 二首

托出す 青龍領下の珠、春光爛熳として天衢に接す、滿堂花に酔ふ三千指、佛法新年一點無し。

鴻鈞一氣天關を轉す、楊柳眉を舒べ花顔を解く、萬古瑞泉流盡さず、七珍八寶湧いて山の如し。

河州東吳庵の歲旦 三首

新年の佛法有か無か、拄杖慇懃に來つて吾れに問ふ、纜を解く春風舟一隻、千秋の雪を載せて 東吳に到る。

新年の拄杖舊同參、今日相逢ふて俗談無し、法幢を建て今宗旨を立す、一莖の春草活伽藍。

地軸幹回し天輪を轉す、造化功成りて一氣新なり、侍者報じて言ふ花萬福と、太平の春は太平の人に屬す。

京都府御室の東にあり、當村は初め衣笠左大臣實能の別業にして、傍に一字の佛殿を營みて、徳大寺と號せり、其の後同公有の世にいたり、細川勝元請ふて自家別莊とす、文明五年勝元の歿するや、遺囑によりて龍安寺と名け、妙心寺の僧義天を聘して開祖たらしむ。

易の元亨利貞の元にして、春の氣をいふ。
士の優れたるを招かんとするには、先づ劣者を用ふべしとの故事。戰國策に、燕の昭王、位に即き、身を卑くし幣を厚くして、以て賢者を招く、郭

隗先生曰く、(中略)今王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ、隗すら且つ事へらる、況んや隗より賢なるものをや云々と、隗の意氣たるや、實に陽春の氣なり、自ら隗に比するが。
古の名鏡、鬢雪なるが故に鏡を掩ふなり。
莊子に、千金之珠は必ず九重の淵にあり、而して鹽龍領下にあり」と。又止觀に、明月の神珠、九重の淵内龍領下にあり」と。

杜工部の絶句に、窓に含む西嶺千秋の雪、門に泊す東吳萬里の船。蓋し之れを讀し來るものか。
はなだ色の書衣、唐の太宗の詩に、葦編斷復續、縹緗舒還卷」と。縹は萌黄色なり。
易經、書經、詩經、禮記、春秋、樂記。樂記亡びて周禮を以て

儒士某少年の試毫を和す

結髮師に従ふ伊洛の涯、^①標囊細帙色交加す、天工春風の手を試みんと欲して、先づ開く。六經三史の花。(開を一に發に作る。)

童子試毫の韻を和す 五首

硯池波暖にして梅を浴する辰、月は是れ。毛錐字字新なり、復た長繩の鶯日を繫ぐ無し、讀書終日餘春を惜む。

梅花の標格雪の精神、一歳新なる時詩も亦新なり、持して渠儂に贈る。寸陰の璧、今より惜むべし少年の春。

春風筆を呼んで新正を賀す、竹は平安を報じ花は太平、誰か。蒙求中の一句を把つて、雛鶯に教へて詩を學ぶ聲を得ん。

廿四番の風此れより吹く、^②鯉庭の桃李競うて開く時、小童若し是れ。鄰人の子ならば、禮を學んで如何ぞ詩を學ばざらん。

内苑花開く胡蝶の風、新詩様に入つて墨痕濃なり、讀書道ふこと莫れ來年在りと、春再び回らず。顔紅ならず。

希周の髻年の試毫を和す

之れに烏ふ。三史は史記、前漢書、後漢書をいふ。

①毛錐は筆なり。

②大禹、尺璧を惜まずして寸陰を惜むと。

③唐の李瀚の選する書、經史中より事實の相類するものを取りて、兩々相對せしめ、記誦に便ならしむ。

④孔子の子を伯魚といふ、其の生るゝに及び、魯の昭公二歳を賜ふ、因つて名となすと、其の詩は「以て興すべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべく、之れを近くしては父に事へ、之れを遠くしては君に事へ、又多く禽獸草木の名を知る」と、論語に見ゆ。

⑤孔子のことをいふ、鄭は孔子の生地なれば、孔子の徒ならばの意なり。

⑥髻髪を垂るゝ位の少年。

仁氣一たび陶して花木濃なり、春城處として恩風ならざる無し、奇才何事ぞ朱崖の外、玉堂雲霧の中に在るべきに。

高野山に題す

高野山高うして點塵を絶す、松杉路を夾んで古碑泯す、花は熏す雲霧烟霞の底、自らはれ。龍華三會の春。

藤代に題す

山水尤も奇なるは天下に多し、花香月影看よ如何、^①瀟湘の八景又二を添ふ、吹上の沙和歌の浦波。

鴉山に題す

北苑の風烟君顔つ可し、吳僧茗を煮て鴉山を説く、鴉山好しと雖も誰か商略せん、我が前丁後蔡の間に待つ。

富士山に題す

何の年か。鷲背山を負ひ來る、百億の須彌點埃を絶す、四十由旬士峯の雪、眼高うして看て。天台に到らず。

人の士峯に題する韻に依る



①龍華は樹なり、華龍の如しと、當來の彌勒、此の樹下に於いて釋迦の未だ度せざるもを度し、次に其の餘を度す、凡そ六十八億人、之れを第一會と云ふ、次に六十六億、次に六十四億と、故に龍華三會と云ふ。
②瀟湘は支那湖南省にある瀟水、湘水の二河の名、永州に合して瀟湘といふ。此所山水明麗、景色佳絶なり、瀟湘の夜雨、洞庭の秋月、遠寺の曉鐘、遠浦の歸帆、山市の晴嵐、漁村の夕照、江天の暮雪、平沙の落雁、これをいふ。
③海中のおほきなすつげん。
④支那浙江省台州府天台縣の北にあり、智者大師の開く處。臨海記に曰く、天台山は超然として秀出ず、山八重あり、之れを見るに一の如し、高さ一萬八千丈、周圍八百里」と

① 坡仙聞く昔斯間に到ることを、獨り愛す全身雲水の間、乾坤を白盡す
士峯の雪、眼高うして宋地山無きに似たり。

松風石

出し盡す 扶餘萬里程、松陰六月風を以て鳴る、老來殘暑を推すに力
無し、石に嗽ぎ流に枕して此の聲を聴く。(扶餘を一に夫餘に作る。)

繼鹿尾に花を見る 尾州

鹿野の春を移して斯地に看る、千年の象教一枝残る、幽人指點す花か雪
か、片片風に和して玉欄に上る。

茅野に花を看る

雲山櫻を擁す千萬里、多年天外に金峯を望む、花を出でて還つて又花に
入り去る、春夜朦朧たり古寺の鐘。(千萬里を一に千萬重に作る。)

小僧に贈る

古寺歸り來つて閒に曾を記す、十年の前身事谷陵と成る、山禽語らす人の問ふ無し、一榻の秋風白髮
の僧。

播陽の太守赤松兵部大夫に寄す

風流の太守久しく名を聞く、水遠く山長し情更に情、手を拍して呵呵相見し了る、老僧門外に松聲
を送る。

韻を洞下の僧に次ぐ

鯨波萬里の長きを遠しとせず、袈裟角草鞋を裏んで香し、青鷹室に入る
果して何の微ぞ、記すや否や 浮山殘夢の牀

韻を次いで夢庵老人に寄す

湘山は黛の如く洞庭は鬚、月色朦朧として雨氣濡ふ、中に畫師寫し難
き處有り、詩僧閑に石屏に倚つて孤なり。

宗藝喝食落髮 丹州の俗姓井上

丹山此の鳳凰兒を産す、六藝文章 羽儀好し、井上の碧梧風動せず、巢
に栖んで高く聳ゆ萬年の枝。

歐陽修が秋聲賦を讀む 二首

① 醉翁亭の畔響 颺颺、聲は西南に在り定めて秋なる可し、今夜暗中に
摸索して識る、梧桐一葉亦曹劉。

聲は西南に在りて醉翁を迷はす、暗に識る秋意の梧桐に屬するを、宋下四百年の天下、吹醒す山川

あり。
① 東坡居士をいふ。
② 今の盛京省奉天府開原縣治なり。

隱遁して山中にあるをいふ。
晉書に「孫楚、字は子荆、操
卓絶爽邁、不群陵傲する所多
し、輒曲の譽をかく、年四十、
始めて鎮東軍事に參じ、馮翊
の太守に終りぬ、初め少時、
隱遁せんとして、王濟に謂つ
て「枕石漱流」と云ふべき
を誤りて「漱石枕流」とい
ふ、王濟曰く、流は枕すべき
に非ず、石は漱すべきにあら
ずと。楚曰く、枕流は其の耳
を洗はんとす、漱石は齒を刷
かんと欲するなり」と。

③ 次韻は詩の韻を前後易ふるこ
となく其の僅用ふるをいふ。

④ 浮山法遠禪師、葉縣歸香禪師
の法嗣、歐陽文忠公、師に參
じて大いに會ありといふ。

⑤ 鳥の漸卦に「鴻陸に漸む、其
の羽を用ひて儀とすべし、吉」とあり、儀法をいふ。又、陸
退之燕喜亭に「知以て之れを
謀り、仁以て之れに居る、吾
之れを去つて天朝に羽儀す
る、遠むらざるを知る。また
義表の意あるなり。

⑥ 收めて文章軌範、古文眞寶に
あり。

⑦ 歐陽公が廬陵の太守たりし
時、嘗みしもの、醉翁亭の記
あり。

⑧ 風の聲にいふ、張正元の賦に、
「颺颺として凄し」と。

黃落の風。

盆石に題す 京南宗珠の請

奇石持し來つて天より翁に與ふ、^①九華何ぞ必ずしも壺中に在らん、青螺涌くが如し平沙の上、復た江山の日東に出づる無し。

某が來觀を和す

月には秋を語り分花には春を語る、天に問ふ何の幸ぞ吟身に伴ふ、詩歌自ら風流の種有り、白髮三千雪中に滿つ。

松岳和尚茶話の韻に和す

瀟嶠の夢を原ねんと欲す、侍者茶を點じ來れ、茶罷み夢醒めて後、鐘聲月に催さる。

松岳和尚茶話の詩に云く、「茶は禪味を兼ねて可なり、能く俗塵を避け來る、且く車を停めて話らんと欲す、楓林暮色催す。」

策彦西堂の大明國に赴くを送る

此の老禪機衆流を載る、南遊何の日か 大刀頭、海門風定つて鯨波穩かなり、一葉舟中四百州。

策彦西堂、再び大明に赴くを送る

千里鶯啼いて遠く人を送る、白頭何の日か又春に逢はん、歸舟早く西湖の月を載せて、我れに梅花面目の眞を呈せよ。

仁澤老禪、岐陽に歸るを送る

詩家第一の碧瞳胡、歸り去つて黃花有れども無きが若し、九月岐陽定んで微雪、關山の梅樹 荷盧都。

津首座、東關に歸るに餞す

柳標擔ひ來る士峯の雪、袈裟帯び去る御園の花、^②冤家何事ぞ冤苦を添ふ、杜宇一聲天の一涯。

希庵老禪の越に赴くを送る

誤つて杜鵑と作す君聞く莫れ、淵明去つて後晋に文無し、花に先づ歸雁知んぬ何事ぞ、飛んで越山深處の雲に入る。

梅江藏主、關西に歸るを送る

山雲海月の情を語らんと欲すれば、春風使を奉じて京城を出づ、君聽け三疊陽關の曲、鶯は花邊に向つて聲を惜ます。

國譯圖畫本光國師見機錄 卷之一

①茶の異名なり。

②名は周良、謙齋と號す、洛北鹿苑寺に入り、心齋安に法を嗣ぐ。天文六年防州の太守大内義興、榮前博多の新蓋寺願願に命ずるに入明の使節を以てし、師に屬するに其の副使を以てす、天文八年再び遣明正使として入明し、世宗皇帝に謁し、大いに優遇せらる。

③武田信玄の請に應じて、甲斐の蕨林寺、長興寺等の諸刹に止ること數年、歸つて天龍寺塔頭の妙智院に靖居す、天正七年六月一日寂す。

④故郷に歸る隱語、刀の頭に環あり、環還音相通す、古詩に「何の日か大刀頭」と。

⑤岐陽は岐阜を云ふ。

⑥故郷の義なり、又支那運化縣西北三十里にあり、山邊關に近し、故に名く。又樂府に、關山月の曲あり、離別に多く關山を用ひて遠別の阻と爲すと。

⑦無言の説。

⑧杖に作る木なり、杖を云ふ。

⑨仇敵をいふ、忘れられぬ意に用ふ。

⑩諱は玄密、山城の人なり、始め建仁寺の月谷輔を拜して剃具し、靈巖に依ること久し、去つて美濃惠溪寺に往き

三省先生を送る

トは龜に匪す分筮は著に匪す、斯心 四聖未だ曾て知らず、機前に劃破して君に與へて看せしむ、六月梅花 太極の枝。

明山藏主、東に歸るを送る

再會期し難し老顔を奈せん、東遊萬里白河の關、殘紅新綠滿山の雨、
杜宇等閑に呼び得て還る。

哲上人、肥陽の古寺に歸るを送る

渠儀何事ぞ高城を憶ふ、語り盡す三年海月の情、西陽關を出でては能く
記取せよ、落花啼いて送る杜鵑の聲。

天得首座、岐陽に歸るに餞す

海東得來和尚、祖師の心を傳へて宗大いに興る、萬里の郷關猶ほ未だ
忘れず、雲を逐ふて飛び去る老 烏藤。

僧の九州に歸るを送る

甘棠の茂舎先宗を慕ふ、秋客衣に入つて歸意濃なり、再會期し難し吾
れ老いんたり矣、海西月落つ五更の鐘。

功岳座元の駿陽に歸るを送る

松三保に連る衣を掛くる藤、天女花を獻じ龍燈を點す、來るも亦無心
歸るも亦好し、孤雲倦鳥一閑僧。

重陽の前日十洲の郷に歸るを送る

茅鞋櫻笠草袈裟、曉に長安殘月の家を出づ、怪しむ可し斯の行節に先つ
て去ることを、淵明終に黃花に負かず。

真安藏主、藝陽に歸るを送る

誤つて他郷を認めて故郷と作す、巾瓶相待す五年強、衣を拂つて好し去
る家山の路、秋海棠の西夕陽ならんと欲す。

宗擴藏局の舊梓に歸つて母を省するを送る

那處の春山か故郷ならざる、孃生の面目露堂堂、歸り來つて老僧に
呈示して看せしめよ、秋は信州の紅海棠に在り。

楓林殘照 高雄山に遊んで作る 二首

楓橋何事ぞ等閑に過ぐ、山は晚秋に到つて勝槩多し、一塵を把つて落日
を回さんと欲す、烏藤亦是れ魯陽が戈。

て、明叔漫に參じ、遂に言外に徹す、永祿の始め、勳を奉じて妙心に住し、其の名聲下に高し、武田信玄の三請に應じて惠林寺に入り、久しからずして美濃大圓寺に遷る、文龜元年賊の爲に傷を得て寂す。

①送別の時、唱ふる詩をいふ。唐の王維が元二の安西に使者を送る時に、「渭城の朝雨輕塵を過す、客舍青青柳色新なり、君に勸む更に一盃の酒を盡せ、西陽關を出づれば故人無からんと、後人之れを陽關の曲となし、三疊して之れを唱ふ、蘇軾の詩に、「陽關三疊君須らく秘すべし、陽西を除却して歌を解せず」と、三疊は三重に同じ。

②聲聞、緣覺、菩薩、佛の四をいふ。

③天地陰陽未だ分れざる以前をいふ。

①不如歸の意を等閑に呼んで顧みぬとなり。

②拄杖をいふ。

③史記の燕世家に、「召公の西方を治むるや、甚だ兆民の和を得たり、召公郷邑を遊行し棠樹あり、獄政事を其の下に決す、諸人皆其所を得、職を失ふものなし、召公卒して棠樹を懐ひ、敢て伐らず、之れを歌詠し甘棠の詩を作る。」即ち詩の召南に、「蔽芾たる甘棠、剪る勿れ伐る勿れ、召伯の茂りし所」と、先宗の徳を比するなり。

④彼の暹羅が「天津風雲のがよひち吹きとちよ、乙女の姿しげしとよめん」の意を出したるなり。

⑤淵明が歸去來の辭に曰く、「雲無心にして岫を出で、鳥飛びに倦んで還るを知る」と。

秋花に在るか春楓に在るか、夕陽斜に挂く滿林の紅、紅圍み綠擁す寒山の路、吟じて 牧之が詩句の中に入る。

杜鵑を待つ

彷彿として去年杜鵑を聴く、暮雲深く擁す蜀山の邊、一聲定めて曉天の雨なる可し、窓は長松に掩ふて獨り眠らず。

藤繞庵

地を江南にトす 南更に南、藤蘿深き處鬢髮、花を垂れ蔓を挂く三千尺、春風を縛住して一庵と作す。

花を待つ

最も怪しむ 東君の馬前まざることを、詩を爲つて誰か 祖生が鞭を著けん、三千一念花を待つ意、白髮の開僧柱に倚つて眠る。(「爲る」を一に「作る」に作る。)

葉底の殘紅

細雨香を洒して新緑深し、墙を過ぐる黃蝶枝を繞つて尋ぬ、滿城の春色 永嘉の末、一片の殘紅正始の音。

春池の梅影

池亭只だ 横斜を愛するが爲に、曾て難波より此の花を移す、道者の家風若し相似たらば、晴滿月を吹いて袈裟に上らん。

盤餐

嫩鶯盤戸未だ曾て開かず、幽谷寒深うして雷を待つに似たり、温願若し氷雪の底に通せば、春風先づ起せ臥龍梅。

五月の菊

夏に在る黃花秋に在るに似たり、山房五月 小窓の秋、一枝雨に臥す 羲皇の上、元嘉以後の秋を待たず。

秋後山を觀る

斜風黃落す雨斑斑、一鳥啼かず秋後閑なり、司馬灰寒し數峯の色、元嘉の時節獨り山を觀る。

紅雨

朝に遊履を埋めて跡雪を凝す、暮に疎簾に洒いで影花かと訝る、是れ 巫山神女の夢なる可し、紅と爲り雨と爲りて君が家に到る。

③九月九日、菊の節句なり。
④歸去來の辭に、「三徑荒に就き、松菊猶ほ存す」と。

⑤群芳譜に、「秋海棠、一名八月春、また花疏に、「秋海棠は嬌好、宜しく幽砌、北窓の下に之れを種うべし」と、時節を云ふものか。
⑥見舞ふことなり。父母及び其の親戚等に用ふ。

⑦母のことなり。
⑧杜牧之が山行の詩に、「遠く寒山に上れば石徑斜なり、白雲生する處人家あり、東を停めて坐るに愛す楓林の晩、霜葉二月の花よりも紅なり。」

⑨東君は太陽をいふ。史記封禪書に、「五帝東君は雲中司命の屬」と、註に「東君は日なり」と、然れども後世多く春神の稱とす。

⑩先鞭のことなり、晉書劉琨傳に、「琨、祖繼と友たり、親故に與ふる書に曰く、我れ戈を枕にして且を待つ、志遠塵を鼻せんとす、常に祖生の吾れに先んじて鞭を著けんことを恐る」と。

⑪永嘉玄覺禪師、六祖大師の法嗣。初め六祖に參じ、錫を振ひ祖を廻ること三匝して、三千の威儀八萬の細行を論じ、衆を驚し、無生の意を得て激賞せられ、留まること一宿して、心印を付せられ、一宿覺と異稱す。乃つて花の殘るを意味するものか。

⑫梅をいふ。林和靖の詩に、「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」と。

⑬竹の簾なり。

⑭人品の高きことをいふ。太古の伏羲時代より以上の人といふ意。書言故事に、「晉の陶明、夏日北窓の下に高臥す、風あり飄然として至る、自ら

涼螢竹を度る 三首

① 秦皇竹帛積んで堆を成す、螢火稍消して灰よりも冷じ、小碧窓前無月の夜、涼に乗じて空しく寂寥を照し来る。

② 腐草螢と化す涼意微なり、雨の時影を添へて月の時希なり、光を分つて照さず書窓の夜、脩竹叢の西綏綏として飛ぶ。

③ 新竹緑濃にして花も如かず、微涼暑を吹いて郊墟に入る、夜來螢も亦般人の鑑、昔時聖に非ざるの書を照すこと莫れ。

寒雁

旅雁聲寒し蘆葦の涯、江風曉に徹して吹くに堪へず、霜辛雪苦翅翎短し、歸意花を待つて花較遅し。

竹窓雪を聴く

十年塵夢の迷を喚び醒す、半窓の雪竹響高低、斯聲畫堂の上に到らず、何事ぞ荆公獨り臍を噬む。

松寺に鶉を聴く 三首

① 耶溪の古寺月斜明なり、箇の長松を留めて杜宇鳴く、何事ぞ君に問ふ歸意切なる、一聲卻つて千聲に彷彿たり。

② 耶溪の新緑花に勝るや不や、日暮れて杜鵑啼いて幽を出づ、雲は隔つ東關未歸の客、松聲好しと雖も卻つて愁を添ふ。

③ 箇の長松樹新銘を換ふ、復た詩人の意を著けて聴く無し、啼落す若耶溪上の月、今より榜を挂けん杜鵑亭。

寒雲雪ならんと欲す

凍雲雪ならんと欲して層巒を擁す、半は疎簾を捲いて玉欄に倚る、陽臺に向つて暮雨と爲らず、梅花被底夢應に寒かるべし。

東川に杜鵑無し

南人の雪と北人の梅と、此の地に杜宇を尋ね來るが如し、未だ疑團を免れず無も亦好し、旅簷の殘雨客腸摧く。

水邊の梅花

梅は江南野水の涯に在り、人を驚す春色兩三枝、横斜影落つ黄昏の後、月を添ふ鷗邊也た一奇。

寺近うして鐘を聞く

殷殷たる疎鐘聞いて迷はず、海山近く接す、古招提、春來更に花を出づる色有り、一朵の紅雲斜月

謂ふ、蠶皇以上の人」と。

① 楚の襄王夢に巫山の神女と會せし故事。劉廷芝の公子行に、「雲と爲り雨となり楚の襄王」と、李白の清平調に、「雲雨巫山枉けて斷腸」と。

② 秦の始皇、先代の經書を集めて之れを燒き、天下の人を愚にすと。

③ 殷の紂王の暴逆、遂に滅亡に歸する故、古人殷鑑遠からずといひて、無道を戒められたり。

① 梵に拓闢提耨、唐に四方僧物といふ、或は聖といふ、別房施、又は對面施と譯す、後魏の大武帝始光元年伽藍を作りて、始めて招提の名を得たり、常住の僧物をいふ。

の西。

中華の書に日本の凝露臺を言ふ、戯に題す

日出處の東漢家を移す、① 瑤臺凝露洛陽の涯、四海蒼生の渴を蘇す合し、養ひ得たり芙蓉八月の花。

旅宿の曉 題詠

異郷客と爲つて先生に別る、月江村に落ちて五更ならんと欲す、白歸舟に集る士峯の雪、袈裟裏ま

す杜鵑の聲。

花の錦 和歌の題

遊絲を剪取して百尺長し、春風織り出す錦衣裳、花前怪しむ莫れ無

家の客、一枝を帯びて故郷に還らんと欲す。

花前月を見る 和歌の題

清水の巖前に白櫻を愛す、花有り月あり 二難并す、茲の遊奇絶衰老を

慰す、色を闘はしめ光を争ふ 不夜城。

梅の關 和歌の題

東風を鎖断して香を漏さず、春遊の佳客詩腸を腦ます、鷄聲啼破す

①月の異名、又玉の臺、淮南子に「殷の紂王瑤室瑤臺を作る」と。
②「かげらふ」なり、沈約の詩に、「遊絲空に映じて轉す」と。
③賢主、嘉賓、之れを二難といふ、月と花とに比するなり。
④燈燭の光晝を欺くをいふ、後轉じて繁華熱鬧の地をいふ。

② 函關の月、誰か識る花中に孟嘗有ることを。

扇面の八景 二首、各四景

雁平沙に落つ月の上る時、洞庭七十二峯奇なり、湘南湘北雨か雪か、

水遠く山長し歸去來。

帆腹風を含んで歸艇輕し、市人は利を争うて名を争はず、半江日落つ漁

村の外、寺數峯を隔つ鐘一聲。

歸帆、晴嵐、夕照、晚鐘。

山水の圖に題す 二首

人は柴門に倚つて月を期するや不や、斜陽落ちんと欲す釣魚の舟、西湖

は十景瀟湘は八、紅樹蘆花一色の秋。

青箬綠簑張志和、斜風細雨十年過ぐ、山中好しと雖も月無かる可し、

江湖詩景の多きに較ぶること莫れ。

竹間兩雀の圖に題す

竹間の雨雀 呂か劉か、爲に商山の羽 鞞を借らんや不や、四海の英雄鴻鶴の志 大謀豈に稻

梁の秋に在らん。

扇面の圖 三首

② 孟嘗君、虎狼の秦を遁るゝと

③ 函谷關を通らんとす、客の

鷄鳴を能くするものありて良

く之れを説するを得たりと。

春を破りて魁をなすをいふ。

④ 瀟湘の八景、指呼の裡にあ

り、遊し詩の詩ならんか。

⑤ 漢の高祖は劉氏、后は呂氏、

遠謀あれども、劉氏を安んぜ

天に先つて物有り之れを梅と謂ふ、畫師に憑り仗つて資つて始めて開く、橋上の杜鵑枝上の雀、一編の心易百花の魁。

花は趙昌に到つて真に逼ると雖も、華光の墨も亦精神ならず、珍禽枝上吾れに向つて語る、今古梅を知る只だ一人。

海外遠く移る安石榴、花を開き實を結ぶ夏還た秋、辛酸寒苦備に嘗め得たり、眼は神農の一舌頭に在り。

墨芙蓉に題す

芙蓉寂莫たり水の濱、淡く蛾眉を掃ふ冷太真、地に在つては枝を連ねんとは總べて虚語、秋風紅脆し馬鬼の塵。

東坡が畫竹に題す

一竿也た足れり此の風枝、翠袖の佳人瀟洒の姿、坡老胸中三斗の墨、湘江の雨と作つて吹くに禁へず。

畫梅に題す

顔色馨香誰か眞を寫す、世に馬を相する九方甄なし、詩僧若し花の來處を問はゞ、太極の光陰春を記せず。

① 宋の邵堯夫、梅花心易を作る、後世の賣卜者等の大いなるこぶところとなる。
② 美人の眉にたとふ。
③ 楊貴妃名は太真、玄宗の后なり。
④ 驛名、安祿山の亂に、唐の玄宗の後楊貴妃、馬鬼驛にて殺さるとある、是れなり。
⑤ 藝文類集に、九方象は良馬か相するもの、伯樂の備なり」と、列子に「九方象能く馬を相す、秦の穆公之をして馬を求めしむ」と、蓋し之れならん。

雞冠花の圖

頸は絳羅を帯び頭は冠を戴く、木雞闘ひ倚る玉欄干、花中縦ひ孟嘗の客有るも、白雲の關を透ること千古難し。

海棠雙禽の圖

妍を闘はしむ唐室幾千紅ぞ、寵は海棠春睡の中に在り、李杜相雙ぶ二鳥の如し、君が爲に飛弊る落花の風。

黃連青雀の圖

漢苑の春風王母遅し、卻つて疑ふ青雀偶歸り來るか、蟠桃未だ實らす三千歳、暫く黃花に倚つて一枝を借る。

扇面 畫かす

好箇の畫師此に到つて休す、紅粉を塗らす自ら風流、分明なり紙上の西來意、雪裡の芭蕉笑つて點頭す。

① 李白、杜甫の詩をいふか。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之一 終

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之二

遠孫比丘衆等重編

像贊

出山釋迦像贊 二首

西竺の老沙門、宛に報するに卻つて恩を以てす。花を獻すれば春手に在り、水を洒げば月に痕無し。香南雪北、路頭を失卻す、相隨來也、箇の老比丘。

文殊贊

獅子窟を把つて、活伽藍と作す。多少衆と問へば、前三後三。

達磨贊

流蓬直指、落葉單傳、大唐國裡、將に謂へり禪無しと。徒らに柴米を費

して、面壁九年。咳。吾が祖來也、月青天に在り。

問訊す梅か又杏か、九年面壁是れ拈華、一時に起ひ出して棒を行すべきに、魏主梁王作家に非ず。

①又「前三三、後三三」ともいふ、前後彼此相等しきないふ、又無量、無数の意に用ふ。

兀坐九年の春、花を拈ず開達磨、昔日梁王に對す、幕面に何ぞ唾せざる。

六宗受降と叫ぶ、葛藤格を踏倒す。到る處人の冑ふ無し、空しく過ぐ龍慶江。足三國に跨り、眼

五天を貫く。東走西走、衣破れ履穿つ。

面壁九年、罔續の裏に墮す、若し禪を會すと道はど、西天萬里。(この贊は足利義晴公の需により大永二年十月五日)

同 半身

眼東震を看て、意西乾に在り、失卻了也、鼻孔半邊。

百丈贊

將に謂へり奇特、大雄峯に坐すと、小叢林の漢、徒を匡し衆を立す。

臨濟贊

勢は沛公が先づ關に入るに似たり、吹毛盡ぞ老癡頭を斬らざる。言ふことと莫れ佛法多子無しと、黃檗山頭に棒を喫して還る。

四睡贊

四睡一覺、人虎已に分る。無底の籃兒、峨帽の雪を盛る。蕉尾の苔帯、五臺の雲を掃ふ。豐干饒舌、我が同群に非ず。咳。寥寥たる天地知音少なり、唯だ松風のふ有つて聞くに耐へず。

②梁の武帝なり、達磨との聖蹟第一義に關する商量は、古來叢林の逸傳として存す。
③棒は馬を繋ぐ杭なり。
④五天竺の略稱なり。
⑤百丈山の別稱なり。

布袋贊

二童笑裡に春を藏すに似たり、梅里の分身總に未だ真ならず。布袋頭に向つて空しく打失す、長汀風月自家の珍。

神農贊

民を救ひ國を醫す世に逢ふこと難し、鹿皮衣を著けて聖容を顯す、大地都盧禪本草、舌頭に眼を具す只だ神農。

鍾馗贊

終南の進士、關北の忠臣、桂を攀ぢすと雖も、以て藟を薦む可し。三尺の寶劍、四海の風塵、李唐の主を輔けて、楊太真が爲にす。厲鬼を驅逐し、邪神を折伏す、子今子古、法を護し人を護す。花を移して蝶を兼ぬ、誰が家か春ならざらん。

福祿壽を贊す

雪舟の圖

曾て塵土に降る、南極の老人、北斗裡に向つて、長法身を藏す。福海底無し、壽山嶼岫、眉毛生也、珍重す萬春。德雲比丘 大休叟。

靈照女

紅粉を塗らず面花の如し、有漏の筵離無頼の查。龐老賺過す兒女子、啼を止むる紅葉貧家に満つ。

白居易を贊す

江南野梅在り、空劫以前に開く、即心の雪を掃はす、自然に春到來す。

北野天神 二首

萬里飄然逐臣と成る、比來天地の一詩人、三千の風月吟じ盡さす、松老い梅飛ぶ北野の春。駿州長谷川越前の守藤原輝貞の請。

寛延の聖代菅原に降す、宰官の身を現す一普門、三千の好風月を吟取して、梅花枝上に乾坤を定む。

渡唐天神の像 八首

詩語禪に通じ歌は神を感す、冠巾の和尚假か真か、梅香直に透る。龍淵の室、花は扶桑に向つて春を漏泄す。

北野の君元北闕の臣、徑雲深き處全身を現す、三千の風月一衣鉢、梅花に分付して總に真ならず。

寛延王佐の才を棄擲して、鯨波萬里舟ならずして來る、徑山文武の大爐

●明州奉化縣の人なり、自ら契比と號す、常に一布袋を荷ふ、時人、長汀子、又は布袋和尚と稱す、一文錢を乞ふ偶に一鉢千家の飯、孤身萬里に遊ぶ、青目人を見ることまれなり、道を問ふ白雲の頭。●梁の貞明三年丙子三月寂す。●唐の武德中、舉に應じて第せず、階に觸れて死す、後、明皇靈寤して夢みらく、一小鬼玉笛を盜む、上叱す、大鬼あり、被帽壓龜角帶して、小鬼を捉へ、その目を割き擊きて之を噴ふ、上問ふ、答へて曰く、臣は終南の進士なりと、舉に應じて第せず、階に觸れて死す、旨を奉じて抱帶を賜

ひて之れを葬る、暫つて天下虚耗の妖孽を除かんと。靈家冥道子に命じて之れを畫かしむと。●玄宗皇帝は李姓なり、故にいふ。●楊貴妃をさす、玄宗の后、名は太真なり。●さいはひと傳縁といのちながきといふ。●諱は等楊、備漢齊、米元山主人、楊智者、雲谷軒等の號稱あり、備中の寶福寺に入りて得度し、天性畫を好み習經を事とせず、涙痕を點じて畫ける鼠の話新界に喧傳せらる、壯年相國寺洪德禪師に侍し、又鎌倉に赴き、建長寺玉隱永興に従ふ、明に渡り、四明山に登り、天童山の第一座となる、明主動して本朝田子の浦の圖を畫かしむ。歸朝して、周防の雲谷寺に住す、永正三年二

輪、身形を煉り得て早く梅に到る。

徑雲吼破す一聲の雷、禪熟し來るか詩熟し來るか、北野春寒し舊廬の雪、

身を終るまで臥龍梅と作る合きに。

龍淵窟裡龍鱗を得たり、北野君の家別に春を置く、萬古乾坤開闢の後、

梅花の世界一詩人。

龍淵の室を扣いて東來と叫ぶ、吹起す爐中文武の灰、徑山三月の桂を攀

折して、拈じて北野一枝の梅と成す。

青衫白髮老袈裟、夢に非ず真に作家に參見す、徑山三月の桂を攀折して、

等閒に拈じて小梅花と作す。

四萬三千首の錦囊、徑雲月に敲く一禪牀、是非梅花の夢に付すべきに、

虛名を惹き得て大唐に滿つ。

今宮大明神を贊す

扶桑六十六州の中、神德昭昭たり此の宮を仰ぐ、法を護し人を護す威猛の力、滿山の松竹も亦仁風、

鄧林法兄の像贊

南浦の末派、西源の的傳、叢規井井、瓜瓞綿綿。店上に雪に阻てらるゝは則ち吾れと素有り、

月十八日寂す。

●本光國師なり。

●龍淵居士の女なり、當に居士

に隨つて竹漣簾を作り、之れ

を驚いで朝夕に供す、居士將

に入滅せんとす、靈照をして

出でて日の早晩を見、午に及

んで以て報せしむ、女蓮かに

報じて曰く、日已に申す、而

も蝕ありと、居士戸を出で、

見る次いで、靈照父の坐に登

つて合掌して坐亡すと。

●白樂天なり。

●寬平延喜、宇多天皇及び醍醐

天皇の年號なり。

●徑山方丈の額なり。

●諱は紹明、建長寺の大應國師

なり。

●殿は小瓜なり。

簾前に紫を賜ふときは則ち御に對して玄を談す。●兎角日月を跳起し、龜毛乾坤を吞卻す。新寶林に

住して、只だ虛堂の八十を缺く。老黃藥を掌して、臨濟百千を屑しとせず。誰か知らん正法眼藏、

這の瞎驢邊に滅向することを。滅不滅、再び●驚膠を把つて斷絃を續ぐ。

寶林の諸徒、鄧林翁の遺像を繪いて予に就いて贊を需む。事拒む可き

に非ず、聊か野語を贅して、寶林常住の供養に充つ。大永三年、

林鐘吉辰、劣弟宗休燒香拜贊。

三綱見禪師の壽像 洞家の僧

太陽の皮履を袈裟に裹む、再び異苗をして毒牙を抽んでしむ、寶鏡臺前

本來の面、依倚として相似たり趙昌が花。

前住光通仙奇鶴禪師の肖像

眼中の丁謂、紙上の張公。毒氣未だ除かず、蜀川の鳥頭子を師とす。文

字立せず、●熊峰の絳衣翁を祖とす。板を鳴し床を敲いて、法道を輝光し、

鏡を拈じ拂を豎て、●宗風を振起す。●養老の全機を奪ふときは、則ち古

帆掛けて、後黃河北に向ふ。羲皇の●艮卦を畫するときは、則ち雜華資つ

て始む。紅日東に昇る。咄。眞の面目を看んと要す麼。猶ほ梅花有り路

●兎角龜毛は、非有、假有の理

を表す語、龜に毛髮なきも、

垢つきて毛の如く見ゆ、兎に

角なきも耳長くして角の如く

見ゆ、共に似て無きものなれ

ばなり。

●臨濟滅時、三聖、慧然に印可

して、誰か知らん吾が正法眼

藏、這の瞎驢邊に向つて滅却

することをしといへるに出

づ。

●能く相續して斷絶せざる意に

須ひる語。韻府に、「漢の武

帝、時に四海より師を獻す、

帝の強時に絶ゆ、膠を以て之

れを續ぐに、弦の兩頭邊に相

著く、終日射れども斷えず、

帝大いに喜んで續弦と名

未だ通せず。

竹溪筠長老、先師の像を圖して、予に就いて贊を需む。口に信せて亂道す。天文龍集癸卯林鐘日。

前住普門泰雲安禪師の像贊

斯の老慈顏醉うて霞に似たり、蘭溪の利觀其の芽を出す。端無く三摩地に入得して、宴坐す春風小白花。天文癸卯秋八月、雲雲庵祐宗休贊。

密傳座元贊

他は是れ有鄰の貽厥、自ら玉峯の密傳と稱す。曲柔木上を坐斷して、甲子を問へば米年と答ふ。靈蹤を蟠龍窟に記し、正宗を瞎驢邊に滅す。眞個滅か不滅か、夕陽は長く我が西に在り。

小師等、持徳密傳繼禪師の壽像を繪いて以て贊を需む。口に信せて亂道すと云ふ。前住長法、春谷果公藏主寫照の贊

天源流を分ち、太虚響を接す。洋嶼の禪蚌蛤の如し、異代同名、虎丘の機、茶菟に似たり。大藏掌に在り萬岳千峯、折拄杖頭十洲三島。曲柔木上、佛法會せず、嶺南の盧龍、徒らに墮權を拾ふ。俗氣未だ除かず、巖中の幼輿、空しく遺像を留む。嘆、歲暮れ天寒し、松柏綠長し。大永元年臘月。

く。風麟より之れを製す、故に又此の名あり。

②十二律の内、六月の律に當る故に六月の異名。

③達磨をいふ。

④巖頭全藏禪師なり。

⑤八卦の一なり、一陰二陽の卦なり。

⑥三昧に同じ。

⑦年齡を問ふなり、一甲子は六十なり。

⑧茶菟、虎のことなり。

⑨大藏兼能禪師なり。

年臘月。

攝州西江開基、雪窻最公首座の像贊

龍寶處を護して、大藏の波瀾を激揚す。孤古丘に首して、少林の皮髓を分張す。三皇に彷彿として同じからず、半月に依係として相似たり。首座行道也た、威音の劫初、首座說法也た率陀宮裡。英氣凜凜として生けるが如し、玉音、琅琅として耳に在り。寶積の松何の色をか作す、境を奪はず人を奪はず。雪窓の蘭其の芽を抽んづ。是の父有りて是の子有り、雙徑の雲を眇視し、西江の水を吸盡す。還つて會す麼。這箇、響、咄。衆角多しと雖も一麟足れり矣。西江の開基雪窻最公首座、二神足有り、曰く、怡溪、曰く、温叔。工に命じて師の像を繪いて、予に寄せて以て贊を需む。大永甲申臘月吉辰。

季友契公首座の壽像

鐘谷の遺響、百里震驚す、龍津龍子、頭角、蟬、五逆の子孫、電卷き雷走る。一喝寶主、雲起り風生す。嘆、黑漫漫地、慧日永く明かなり。

大藏の中興開基、華屋宗英首座大師の像贊

- ①過去莊嚴劫に於ける最初の佛を威音王佛といふ、故に父母未生前、天地未開以前と同じく、過去際を表す語なり。
- ②音の清み渡るを云ふ。
- ③臨濟の四料簡、人境俱不奪は其の一なり。
- ④響はものを指す語なり。
- ⑤龍生龍子に同じ、この父あり此の子ありなどに同じ。
- ⑥高くけはしき形、金石蟬など熱語す、頭角の超越して居るをいふ。
- ⑦一面の暗黒といふが如し。

大藏の金翅、直に狻龍を取る。九萬里の風に搏つては、則ち禪源の派を接す。三千刹界を動しては、則ち洋嶼の宗を探る。脚力を費さず、通玄室に坐す。淨裸赤條條、寸絲挂けず、^①尼總持の皮肉を脱す。明皎皎白的的、一法の所印、大愛道の遺蹤を躡む。鐵壁線路を通じ、須彌鐵鋒に跳る。真相を石んと要す麼、花影月重重。

聖壽開基天慶祐大師壽像の贊

混沌眉を畫く、春山青く分春水。緑なり。燈籠合掌す、江月照し分松風吹く。相逢ふて識らず、借問す是れ誰ぞ。人の頭を取り人の腰を取る。子湖の犬、^②劉鐵磨を嗾む、吾が皮を得たり吾が肉を得たり。少林の狐、尼總持を誑かす、生涯只だ三事積有り、聖壽以て萬年の基を固うす。收。

天慶大師頃ろ工をして壽像を繪かしてめて贊語を老拙に需む。拙辭して曰く、「汝の徳は大にして而して吾が才は短し矣。何ぞ江湖の名宿に投じ、其の名を衒ひ其の徳を遺さざる乎哉。」尼曰く、「大手筆無きにあらず、蓋し直指の才、單傳の器、難い哉。請ふ一二を叙して、以て無窮に垂れば足らん矣。」一言肝に銘す、再辭するに及ばず。瓢を執つて其の上に贊すと云ふ。 永正十四仲春 上 游日。

明窓宗珠庵主の像

四海九州唯だ一翁、茶經を傳ふる外新功を得たり。前丁後葵春宵の夢、吹き醒す桃花扇底の風。

前の左 金吾、額田耕雲咲夫居士の像贊

紙上の張公子、袖中の^③邵堯夫、漢室に輔弼として、洛都に優游す。蚤に左京兆に侍し、曉に左金吾に除す。衰衰たる源流、恭しく惟れば、出自を同じくす。草草たる居士、更に赤鬚胡有り。林際の寶劍を握住し、天澤の衣盃を劈破す。雜道者を笑ひ、^④賈浮屠を罵る、綠蕪霜寒し。或時は兎を獵して一棚の^⑤鴨を臂にす、烏帽塵暗し。或時は狗を追ふて十影の駒に鞭つ、夕陽を送り素月を迎ふ。瓊筵を開いて花衢に坐す、孟津に次りて而して密謀す。八百人期せずして會す、淀河に臨んで而して戰死す。三千の卒前驅と爲る、惜しい哉名父子、遺恨吳を吞むことを失す。顔色猶は舊に依る、墨梅の圖と作す莫れ。 永正十三霜季秋 上 游日。

前の賀州の太守仁翁舜 法禪定 門畫像の贊

月を繪く者は光を繪かす、精神掬す可し。樹を種うる者は徳を種うるが如し、靈壽根を深うす。^⑥菟裘を江左に卜し、牡丹を洛園に賞す。喜んで兵書を讀んで、龍韜虎略の術を誦んす。勤めて玉庫を知して、狗偷鼠竊の

① 達磨大師の法嗣、梁の武帝の女にして、初め始祖に事へて弟子となり、道を悟り涙を示す、即ち達磨の肉を得たるの人なり。
② 嵩山下の老尼、鄭賈を評にせず、得法の後、機鋒峻峭、當時の禪客と往來して、盛に宗旨を商榷す。

③ 金吾は武官の名なり。
④ 邵雍、字は堯夫、宋の河南の人なり、學を爲す堅苦烈風、寒けれども爐せず、暑けれども扇せず、徳氣粹然、群居燕飲、笑語終日、人の善を言ふを好み、未だ嘗て人の惡に及ばず、神宗の熙寧十年卒す、年六十七、元祐中康節と諡す、即ち百源學派の祖なり。
⑤ 浮圖とも書く、佛陀(Buddha)の訛なり、佛、佛寺、卒都婆等を指すことあり、此の所は僧侶を意味す。
⑥ はやぶさ、くまだかをいふ。
⑦ 魯の都。左傳に「隱公曰く、莒

冤を禦ぐ。文武の道未だ墜ちず、典刑今尚ほ存す。竹椅蒲團坐禪、曾て燦可の迹を師とす。蓮漏香火念佛、晩に遠持の門を候ふ。積善の家餘慶在り、厥の子有り厥の孫あり。(鼠竊を一に鼠盜に作り、香火を一に香花に作る。)

右立入氏前の賀州太守仁翁舜法禪定門の肖像、孝子、老拙に就いて贊を求む。拒辭するに及ばず、口に信せて亂道す。永正庚辰小春日。

德雲院前の刑部通叟宗普大居士肖像の贊

一王一姓、六十六州、高く矢田の前蹤を躡んで、新に劍履を賜ふ。故より義家の後裔と稱す、丕いに箕裘を續く。誠なる哉千兵は得易し、眷みるに夫れ一人尤を抜く。桃李園中群臣を宴して、而して月に酔ひ、梧桐名上刑官に處して、以て秋を司る。靈鷲の席を退いて釋を罵り、呼鷹臺に登つて劉に依る。玉笛高樓、如今枕上に開夢無し。錦繡園里、少日才華貴遊に接す。其の和也竊竊然として、春の大地に行るが如し、其の量や浩浩乎として海の細流を納るゝに似たり。活處に機を投ず、將に謂へり、丹霞居士と。別戸に相見す、元來德雲比丘、還つて參得す麼。收。

右德雲院殿前の刑部通叟宗普大居士は、乃ち遠州太守勝益の第三骨にして、而して叔父一叟叟の

猶子なり。壯歲藝に遊び仁に據る。謂つ可し亂代の英雄なりと。春秋三十八上、不幸にして逝す矣。山崩梁壞の歎無き克はず、仍つて孝子國慶、工に命じて像を圖し贊を需む。贊して以て遠大を祝すと云ふ。大永第四三月二十有六日、前正法山大休叟龍安の室に書す。

牡丹花夢庵居士の像 (有相の)

洛社の香英、恭しく惟れば、本姓は久我に出づ。天曆の貴種、矧んや亦中院の先君たるを乎。五濁、烏曇鉢を現す、三昧、鷹浮圖を笑ふ。或時は藥草を採つて、仙窟を窺ひ、或時は芝詔を拜して帝都に朝す。古今一千首を誦して、而して周詩に擬す。律、雅頌に合す、源氏六十卷を講じて、而して台教に配す。味醍醐に同じ、餘情を花鳥に託し、歸興を尊體に催す。和歌、連歌、神を感じ鬼を感す。内典外典、佛を學び儒を學ぶ。手理の團扇千億の放翁、飄飄たる風襟月臆、頭上の長帽七世の坡老、蕭蕭たり雪鬢霜鬢、行李俗ならず、梧に隠つて吾れを忘る。偉なる哉、香孩兒の猪に屬するが如し。其の群を出で其の萃を抜く。翩然たり漆園叟の蝶と化するに似たり。在るときは則ち人、忘すれば則ち書、清也清也、還つて眞の形模を看んと要す麼。夢、庵に非ず、庵、夢に非ず、牡丹花春一株。咄。

國譯西漢本光國師見桃錄 卷之二

妻に營ましむ、吾將に老せん」とあり、よりに後人致仕して隱居する所の稱とす、蘇軾の詩に「一林叢竹吾菟裘」と。

⑤ 父祖の業を云ふ、禮記の學記に曰く、「良冶の子は必らず裘を作ること學び、良弓の子は必らず箕を爲ること學ぶ」と。

⑥ 李太白桃李園に宴する序に曰く、「瓊筵を開いて以て花に坐し、羽觴を飛して月に酔ふ云」と。

⑦ 錦繡園里。錦を着て故郷に歸るなり。

⑧ 丹霞、居士。丹霞千淳と題居士となり。

⑤ 五濁。一には劫濁とて、天災、疫病など絶えず起りて時節の悪しくなれると、二には見濁とて衆生愚見を逞しうして是非とし、非を是とする等、顛倒の見解盛なること、三には煩惱濁とて、衆生が貪欲、瞋恚、愚痴等の三毒煩惱の興盛となること、四には衆生濁とて、衆生果報漸く衰へ、身體矮弱、精神痴鈍となれること、五には命濁とて、衆生の命根順次に短天となれること、かゝる世を又五濁惡世といふ。

花園の主大休叟、香を焼いて賛して、以て等清禪者の需を極ぐ。大永龍集戊子孟夏四奠。

一元院殿先天宗普居士の像賛

① 濫公は宋地の大醫王、仁徳民を育し國を治す。真卿は唐朝の一元老、才名古に輝き今に騰る。將に謂へり、麤桃俗李と。由來甘草人參、父子家を興す、攝の刺史を領す。既に累代に及ぶ、君臣義を重んず、源京兆に奉じて、屢寸陰を惜む。衆星の韓斗、久旱の傅霖、薛嵩が業を繼いで、而して蹴鞠場を擅にす。半梅半泥半雪、雅經の流を學んで而して和歌の道に通ず。一龍一吟一吟、其の詞語を華にすと雖も、胸襟に芥とせず。平蕪霜寒し、鷹を呼んで臺に登る、雁影陣陣たり。長楸日落つ、犬を追ふて銅を鳴す、馬蹄駭駭たり。政を禹謨舜典に考へ、武を齊鏘周鏘に試む。黃石が一巻の書を傳へて、冠を以て履に直く。碧巖百則の話に參じて、鐵を點じて金と成す。瞿曇を活喫して、鱸の鱠炙の如し。彌勒を生吞して、鵝の湯燂に似たり。言言也た衰也た賤、著著縦有り擒有り。機に當つては、毘耶居士の牀を倒す。默處雷走、手に信せて、鹽官國師の

① 古今云々、古今集は延喜五年、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬牛忠孝の四人勅を奉じて撰したる和歌集なり。

② 源氏六十巻は、紫式部の作にかゝる源氏物語をいふ。

③ 漆園の叟、莊周、周の蒙の人、嘗て漆園の吏となる、故に謂ふ、其の著莊子蝴蝶篇に曰く、「昔莊周夢に蝴蝶となる、栩栩然として蝴蝶なり、愉びて意に適ふ、周たるを知らざるなり、俄然として覺むれば則ち蘧々然として周なり云云」とあり。夢庵の夢字を點出するなり。

④ 龍集、龍は星の名、此の星年に一次周行す、集は次なり、歲次などに同じく年號の下に記する語なり。

⑤ 司馬光、司馬君實、宋の仁宗に仕へ、諫院に知たり、後累官して宰相に至る、太師温國

扇を拈す、意氣風凜たり。乾坤の内獨歩と稱す、宇宙の間知音を絶す。笑ふに堪へたり化騰の豪莊、扶搖萬里垂天の翼を折く。臥龍の諸葛と成る合きに、遺恨千載吞吳の心を失す。流水東に去り、殘月西に沈む。嘍。將相王侯豈に種無からん。枝枝葉葉皆檀林。

藥師寺國長公、先考一元院殿先天宗普居士

の像を畫いて賛を需む。筆に任せて厥の大略を記すと云ふ。享祿初元戊子菊月日、

正法山主大休叟

越州の太守藤原朝臣松井雲江守慶居士

の壽像賛 此の像賛、丹波桑田郡

金剛山龍潭寺に在り。

木公冬に榮ゆ、斯の郎能く晩節を持す。藤氏日に營ふ、其の祖曾て朝權を執る。名四海に

公を贈り、文正と諡す、著す所資治通鑑の外、文集八十巻等あり。

① 眞卿、顔眞卿、師古五世の從孫、吳郡の從弟なり、少にして博學辭章に工なり、官太子の太師に至り、魯郡公に封ぜらる、書道を以て普く知らる。

② 政を云々、禹謨、舜典は書經の内容を分ちたるものなり。

③ 黃石、張其少時下邳圯上に遊び、一老翁に逢ひ、一巻の書を授く、曰く、之れを讀まば帝者の師なるべしと、異日、濟北穀城山下の黃石に見えしに、先の老翁は即ち吾れなりと、具に其の書を見るに、乃ち太公の兵法なりと。

④ 附唐佳話に、松江の鱸、所謂東南の佳味と。

⑤ 湯燂、湯にて煮るなり、其の美味を食ふが如きないふ。

⑥ 毘耶居士、法眼居士なり。

⑦ 默處雷走、即ち維摩の一默雷の如しとあるより出づ。

⑧ 鹽官國師、鹽官は地によつて得たる名、齊安禪師なり、馬祖道一禪師の法嗣。

⑨ 扇を拈す、齊安と侍者との問答商量なり。鹽官一日侍者を喚んで我がために扇を過し來れ、者曰く、扇子破れぬ、官曰く、扇子既に破れなば、我れに犀牛角を選し來れ、者對ふるなし、資福一圓相を畫いて中に一の牛字を書すと。扇子は圓形にして展疊自在法界一圓の様子、鹽官手許にある一物を借りて、侍者の伎倆を驗す、單中の扇子を持ち來れの語に對して、侍者は破れぬといふ、蓋だ力量あるが如し、次に犀牛角を選し來れに於いて一語の對ふる能はず、傍觀せる資福如實、空即

喧しく、徳八坂に溢る。右典既源家に奉じては、則ち幕下の諸將を指
麾す。前太守越國に任じては、則ち旁く野外の遺賢を求む。進退禮を以
てし、忠孝兼ね全し。世の騷亂に罹つて、而して蹤淡路に迷ふ。時の嘉運
に遇ふて、而して生きて太田に還る。錦織閨里を照し、旌旗山川を領す。
加之、洋嶼の風を慕ひ、衣孟三拜し、龍潭の室に入りて、紙燈再び然す。
百八の摩尼、佛祖を轉回し、一條の白棒、乾坤を打定す。杜邇飄然たる
孤僧、早く塵事を謝す。李源元來信士、未だ俗縁を盡さず。葛洪井畔秋老
い、丹陽廊裡雲連る。嘆。箕裘の業を續いで、子孫萬年。

昔享祿三祀龍集庚寅夏五吉辰、

平氏松田古巖宗松居士の像贊

萬原の王子王孫、枝を引き蔓を牽く。松田の難兄難弟、帯を並べ根
を同じうす。文武の道を傳へ、忠孝の門に出づ。五員を鷗皮に裏み、浙
潮八月怒を發す。靈均を魚腹に投じ、湘水五日魂を招く。腰間の劍霜
雪を照し、手裡の扇乾坤を握る。噫。
享祿辛卯臘月日

雲軸昌慶禪定門肖像の贊

前の河州太守庄所重信公は、平氏芥河の華族、累代の武閥なり。去歲
辛卯五月二十一日、造化の小兒に觸れて而して逝す矣。春秋四十七、
齡未だ知命に及ばず、烏摩、惜しむべき哉。公存する日、洞家の僧之
れに諱して昌慶と曰ふ、没後余之れに字して雲軸と曰ふ焉。今茲に家
嗣厥の像を繪いて、贊辭を圖上に需む。峻拒する克はず、卒に村偈一
章を賦して以て其の請を塞ぐ。寔に享祿五祀壬辰夏五月初吉なり。
葛原の奕葉正盛の孫、曾て玉門を出で、武門に列る、積善の餘慶猶ほ盡
きず、一張の弓は挂く搏桑の暎。

石雲庵主太玄宗白居士壽像の贊

後生揚子雲有り、玄尙ほ白しと嘲らる。本姓は藤原氏たり、紫の朱を奪
ふを惡む。雪を烹氷を敲く、茶烟半榻。花に酌み月に醉ふ、松醪一壺、
蓮社の十八賢を追慕して、大念佛小念佛、蒲團六七箇を坐破す。死工夫活
工夫、其の右也日本の扇を拈じ、其の左也水晶の珠を轉す。俗にして而し
て髮無し、僧にして而して鬚有り、僧に非ず俗に非ず、是れ甚の形模ぞ。
吾が道一以て之れを貫く。參乎參乎。

是色、色即是空の當體を現す。即ち此の消息を語るもの也。
①蒙莊。莊周を云ふ、蒙縣の人なる故にいふ、著書莊子逍遙游に、鳥あり、其の骨を鷗となす、背は泰山の若く翼は垂天の雲の若し、扶搖して搏ち羊角して上るもの九萬里、雲氣を絶ち、青天を負ひ、然して後に南を圖る、且に南冥に適かんとするなり」と。
②將相云々。史記の陳涉世家に、壯士死せざれば即ち已まん、死せば即ち大名を擧げんのみ、王侯將相寧ぞ種有らんや」と之れを反語せしなり。
③松なり、晚節を持するに對す。
④八坂は地の極まる所、淮南子に「九州の外に八坂あり」と、又八坂に作る。
⑤典廩。馬寮の頭の唐名なり。
⑥賢者の用ひられずして林澤に

あるをいふ。
①百八の摩尼、摩尼寶珠の略、無垢、離垢、如意珠などと譯す、寶珠の名、龍王の窟中より出で、衣服、財寶、飲食等を生み出すが故に如意珠といふ。或は帝釋の持てる金剛にして阿修羅と戦ふ時、碎けて圓淨提に落ち、變じて珠となるものといひ、或は又過去久遠佛の舍利にして、其の佛の法既に盡きぬれば、變じて此の珠になるといへり。而して此處にては百八より成れる珠數のことないふ。
②葛原、平氏は桓武天皇の皇子葛原親王の裔なり故にいふ。
③難兄難弟。兄たり難く弟たり難きないふ。
④五員。五千盾、父兄楚の平王に殺さる、員吳に奔り、吳を導き楚を伐つ、遂に平王の尸を用して之れを鞭つ、鞭吳王

嗣子石黑詮尙、老父の壽像を繪いて贊を雷む。厥の孝志を感じて拒むこと克はず。書して以て行實と爲す。

越州の太守源朝臣額田西河宗昭居士の像贊

額田某、其の父宗昭の壽像を圖して、贊詞を予に雷む。曰く、「某が祖父、世世越の中に家す、國の騷屑に暨んで洛に入る。幾も無く屋を鳩嶺の麓に儲す、而して居ること年有り矣。丙丁の火に罹つて、家譜焼失す矣。再び洛に入り、右京兆勝元公に侍す。公の藥師寺元長に命じて、攝州の刺史を領するに及んで、父宗昭をして之れを輔佐せしむ。爾より以來、堅を蒙り鋭を執り、百戰百勝、其の功亦大なり」と。予も亦宗昭と。方外の交有り、聊か小偈を撰つて其の請を塞ぐと云ふ。

合に麒麟殿閣の中に在るべきに、賢太守を佐けて忠功を立つ。化身千百億の春色、何事ぞ梅花放翁を畫く。

土岐椋月道珊居士壽像の贊

文王は是れ仁義の釋迦、岐下鳳を栖ましむ。儒童は彼の菩薩の孔子、

周末麟を獲たり。將に謂へり第一聖諦と、直に得たり百億化身。洞山五位の旗を豎つるときは、則ち氣魔壘を刷る、般陀八正の慧を抛つときは、則ち胸俗塵を拂ふ。藝文武を兼ね、道君臣に合す。繡戸花に映す。或時は魯論を講じて名郷黨に光れり。珠簾雪に捲く。或時は和歌を詠じて徳鬼神を感ず。唐書東夷の國を載せ、建茶北焙の春を試む。夷吾を方袍に被らしむ、錯を將つて錯に就く。放翁を團扇に畫く、眞に逼つて眞ならず。水尾濫觴、源流衰衰として竭くる無し。圮上に履を進む、家聲日日維れ新なり。之れを留侯の菊に譬ふ、祝するに蒙莊が椿を以てす。咳。補袞調羹の手、正法輪を撥轉す。

右常陽信太莊江戸崎の城主、姓は源、世稱土岐治頼、字は椋月、諱は道珊庵主、自ら壽像を繪いて遠く寄せて贊を予に雷む。予老せり矣、固辭すれども允さず、仍つて俚語を撰つて以て公の實録と爲す。

三友院殿前の右京兆松岳桓公大居士の贊(三友院殿は細川高國なり政元の養嗣子年四十八自双)

川黨の領袖、源家の棟梁、文武の才を具して、多田滿仲に藍氷たり。騎射の妙を傳へて、八幡太郎に權輿す。東西馬を馳せ鑼を鳴し、左右に犬

夫差を諫めて従はれず、大宰語之れを説す、王乃ち屈膝の劍を賜ふ、瘞るに臨夷の皮を以てし、之れを江中に浮ぶと。

① 蒙均、屈原の字なり、離騷經に曰く、「余に賜ふに嘉命を以てす、余に名づけて正則といひ、余に字して蒙均といふ」と。魚腹に投ずは沙を懐いて湘水に沈むをいふ、即ち五月五日なり、楚人之れを哀みて此に日に至ることに、竹筒に米を入れ、水に投じて之れを祭るといふ。

② 蓮社十八賢、慧遠法師は支那東晉の人、道安に師事し、二十四歳より講説に従事し、五十一歳、關中の亂を避けて、襄陽より廬山に入り、池を穿ちて白蓮を植ふ、同信の僧俗とともに、専心念佛を修し、白蓮社と稱し、社中百二十三人、何れも當代の名士名僧たり。就中慧遠、慧永、慧時、道生、曇順、僧叡、曇恒、道暉、曇詒、道敬、覺明、劉程之、張野、月鏡之、張全、宗炳、謝靈運、雷次宗等は十八賢と稱せられたり。

③ 騷屑。風の音なり、劉向の賦に、「風騷屑以て木を搖す」と、國の騷動をいふ。
④ 丙丁の災。火災をいふ。
⑤ 方外。道の外、孔子曰く、「莊子は方外に遊ぶものなり」と。
⑥ 周末云々。孔子春秋を著し、「哀公十四年春、西の狩に麟を獲」といふ句にて筆をとすめられたり。
⑦ 魯論。論語のことなり。
⑧ 夷吾。管仲なり、齊の桓公を佐く。
⑨ 留侯。張良なり。
⑩ 藍氷。藍より出でて藍より青

を追ふて墻に逼らしむ。宰相古再び温公を得たり、雲山觀を改む。京兆今十韓愈を合す、星斗光を増す。或時は着英を洛社に會し、或時は義兵を晉陽に起す。本朝の風を移すときは、則ち歌を詠じて難波の什を學ぶ。上巳の景を餘すときは、則ち詩を賦して曲水の觴を飛す。名四海に喧しく、

一〇八
く、水よりいでて水より冷くなること。
①上巳の景。王羲之、會稽山陰に蘭亭を作る、三月上巳之れに會して、曲水の宴を催し、序を作る、人口に膾炙す。
②一妹。一人の美人なり。

威十方に振ふ。窓を照す螢囊、精を研き思を覃ぼして、藝術の圃を窺ふ。空に翔る鳧鷖、鞠を蹴り腿を練つて、遊戯の場を擅にす。松を以てし、竹を以てし、梅を以てす。之れを三友院と勝す。蘭有り蓮有り菊あり、之れを四愛堂に擬す。加之、聖に在りては聖に同じ、凡に在りては凡に同す。脚下一條の紅線、佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。堂内三尺の金剛、燕寢水枕軟森たり。龍安の夜話牀を連ぬ。人品高い哉、光風霽月、意氣凜乎たり、烈日秋霜。唳。花を繪く者は其の香を繪かず。

天文龍集癸卯林鐘八莫、前妙心大休叟宗休書。(大休叟宗休書を一に大休叟宗休焚香贊に作る。)
西月慶照信女の壽像
紫羅帳裡に衣珠を繫く、百陋恰も一妹に逢ふが如し、濃抹淡粧限り無き意、丹青只だ合に西湖を畫くべし。
坂井備前守香林宗遠の像

此の師の動問敢て誰か論せん、古より忠臣孝門に出づ、只だ劉を安んずる一周勃のみ有りて、秋霜三尺乾坤を定む。

是雲宗拂の像

高屋氏諱は宗拂、字は是雲、世々積徳の門たり。形俗に處すと雖も、頗る塵表の物なり。天文庚子夏五朔一日、造化の小兒に觸れて、溘然として逝く矣。孝子追悼に堪へず、畫師に命じて寫照す、滿面の霜凜凜として生けるが如し。一日、一僧に紹介して肖像に贊せんことを求む。吁、予の感ずる所の者は孝なり、其の志擲つ可けんや、叨に一偈を題すと云ふ。

①劉云々。漢の高祖は劉氏、后は呂氏なり。周勃、高祖に事へ、戰功多し、高祖崩じて呂氏の墓を憂へ、呂后崩るるに及び陳平と計り、諸呂を誅して代王を迎へて位に即かしむ、是れを文帝とす。
②秋霜三尺。劍なり、漢の高祖、三尺の劍を提げて天下を平定すとあるより出づ。

會、雲雷吼裂す太虛空

蘭庭常秀の像

山田氏蘭庭常秀道人は、予が入室の參徒なり。蓋し天衣の下に秀鬣面有るが如きなり。不幸にして逝す矣。嗣子彌太郎、工に命じて其の像を圖す、一日持ち來りて贊語を予に需む。之れを展ぶれば、凜乎として餘勇生けるが如し、感無きこと克はず。仍ち偈を作り請を塞ぐと云ふ。

弓は強を挽き兮矢は長を用ふ、吾が法社を護して金湯と作す、曹溪鏡裡本來の面、花に清香有り月に光有り。
天文十三甲辰八月日。

自贊

百億の須彌條拄杖、三千刹界小袈裟、無法を將つて大龜氏に付す、梅里の下生春花に在り。

山偈を賦して憶龜年に付す。大永癸未林鐘初吉、正法當住大休叟。這の無明禿、①慈顯臍腹、②脩吭矮身。達磨の華を拈じて、錯を將つて錯に就く。靈山の月を畫いて、眞に逼つて眞に非ず。昔帝自家の雪を掃ひ、袈裟御園の春を帶ぶ。晴漆桶、笑、閻閻たり。誰か道ふ藁苴の勤巴子と、從來蓬髮の休上人。咄。

享祿庚寅林鐘吉辰、元從座元の爲に、花園宗休贊す。

蛇を畫いて足を添ふ竹篋子、電を種ゑて根を尋ぬ木面翁。若し是れ機に當つて正令を行せば、韶陽臨濟落花の風。右詔首座の請。

我れに定相無し、惡を逐ひ邪に隨ふ。③金伽梨を著けて、佛界に入り魔界に入る。黑豆の法を用ひて、主家と作り賓家と作る。人天の眼を瞎して、暗に塵沙を撒す。自ら威勢を逞しうす。門に當る一

①慈顯臍腹。愚顯便々たる腹をいふ。臍は腹の大なるありさま、又腹下の白き所をいふ。
②脩吭矮身。吭はのど、又はのどぶえにて、頸の長きをいふ。
③和き敬む貌、中正の貌、論語に「上大夫と言へば閻々如たり」と。
④金伽梨。僧伽黎衣なり、三品九種の袈裟の總稱なり。

雙の艾虎、誰か毒氣に觸る。室に據る三尺の筠蛇、西源の派脈を續ぎ、東海の津涯を窮む。咳。臨濟の樹を扶起して、春風又花を發く。

天文八稔龍集己亥三月初吉、松源十三世花園大休叟宗休、玄津首座の請に應じ、靈雲丈室に書す。

三十年胡亂、元來掠虛頭、喚んで馬と作すときは則ち馬、喚んで牛と作すときは則ち牛。錯錯、靈雲を見んと要す麼、桃花水を逐ふて流る。

太原座元、予が幻質を繪いて贊を求む、筆に任せて其の上に贊す。

天文龍集乙巳夏五、花園に住する大休叟書す。

吾が扶桑國、佛日再び嗽す。白拈の臨濟を捉敗し、黒頭の松源を罵倒す。咳。唯だ一喝を餘して、五逆雷奔す。

嗽首座の請に因る、大休叟自贊、天文乙巳夏五、念八。

此の像贊は參州溼美郡長松山太平寺に在り。

龍にして而して頭上に角無く、蛇にして而して眼裡に筋有り。朝に西源の水を吸盡し、暮に南浦の雲を吐出す。其の名を聞かんより見んには如かず、其の面を見んより聞かんには如かず。一髪より重く、千斤より輕し。因。拈じ來つて天下、人に與へて看せしむ。拄杖花を開いて春十分。

①幻質。肖像を云ふ。
②嗽。旭日なり、朝日の出づるが如く輝きそむるを云ふ。
③黒頭。俗に云ふ頭の黒き鼠と謂ふが如き意、白拈に對するなり。
④念八。二十八日をいふ。兼明書に曰く、吳王の女、名二十、而して江南の人二十を呼んで念と爲す、故に北人は避けずと。

胸中の五逆藏す能はず、我れを阿鼻熱鐵の牀に坐せしむ。臨濟の兒孫普天の下、唯だ一喝を餘して商量せんことを要す。

祖台首座、予が幻質を繪いて贊を求む。偶を作りて以て其の請を塞ぐと云ふ。天文丙午八月初

吉、前妙心大休叟宗休書す。

道 號 頌 上

石庵 韶首座

雲根を坐斷す老衲衣、半巖の春雨禪扉を掩ふ、銀山鐵壁迸開し了る、百鳥花を銜んで別處に飛ぶ。

月航 津首座

江水秋を涵して玉兔輝く、孤帆高く挂く截流の機、廣寒八萬四千の戸、一葉舟中に糺み載せて歸る。

東庵 宗叡首座

吠瑠璃界一 封疆、孤峯を坐斷して牀を下らず、佛日再び嗽す明歴歴、

眼頭高く掛けて扶桑に在り。

天庵 祖台首座

月斧雲斤法梁を架す、乾坤を把つて一封疆と作す、大機大用大人の境、

坐斷す普賢三昧の牀。

梅意 宗雲

萬里西來の閑達磨、門前の湖水波瀾を起す、暗香疎影黃昏の後、月は天心に在り君自ら看よ。

① 雲根。石なり。

② 封疆。國境なり。

③ 月斧雲斤。天宇によりて工筆するなり。

④ 暗香疎影。西湖處士の梅の詩に、「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」と。

義岳 忠

高標卓爾として直に超宗、塊視す 華山の千萬重、勢層雲に薄る何の似たる所ぞ、秋天一朶 玉芙蓉。

友室 益

知心古より世間に無し、此の芳鄰を托して徳孤ならず、入得すれば他の

梅と月とに還す、

鴛鴦未だ繡工夫を了せず。

蘭谷 金

蕙弟罷參の地を同じうすと雖も、許さず梅兄入室の春、元是れ曹溪の

那一滴、流芳千載果して何人ぞ。

月堂 清

秋風鼻を撲つて桂花香し、始めて心空及第の場に到る、光境俱に忘る

底の時節、呵呵として手を拍して禪牀を下る。

花庵 春

熊峰鷺嶺一枝同じ、移して此の門に入つて分外紅なり、只だ主人の意安樂なるが爲に、太平日

として東風ならざる無し。

① 華山。李白華山の落雁峰に登り、此の山尤も高し、呼吸の氣、想ふに帝座に通せん」と、即ち之れなり、岳によりて露出す。

② 玉芙蓉。富嶽を形によりて又芙蓉峰といふ。

③ 鷺嶽云々。咸照郎の長安古意に、「比目鷺嶽真に羨むべし、雙去雙來君見え、生憎や帳額孤鸞を繡す」と。

④ 蕙弟。蘭によりて蕙草の榮枯する處、その餘衆と地を同じうするに喩ふ。

⑤ 熊峰。熊耳山なり、遼磨を辨りし處。

春溪

太古乾坤一氣浮ぶ、冬に非ず夏に非ず又秋に非ず、綠楊芳草東西の岸、牧し得たり瀉山の老牝牛。

南芳 金

曹溪の明鏡臺を打破して、梅花の面目塵埃を絶す、^①重離六畫分開して後、四海の薰風此れより來る。

天覺

一を得て以て清く一を得て寧し。^②世尊錯つて是れ明星を認む、了然として動せず如如の體、^③月は屋頭に在り花は瓶に在り。

太虚

豎に乾坤を蓋ひ横に十方、法身邊の事露堂堂、誰か知らん手を長空の外に撒して、塞雁影沈んで秋水茫たり。

天先 性

蒼蒼何の色ぞ坤維を蓋ふ、直に得たり 純清絶點の時、^④羲皇の春一劃を待たず、梅は開く太極已前の枝。

澤翁 濡

① 重離六畫。易の離爲火、三三をいふ。

② 一。即ち涅槃妙心なり。

③ 世尊云々。臘月八日未明、明星を見て悟道し給ふを云ふ。

④ 月云々。李翱の藥山禪師に贈る時に「我れ來つて道を問ふ餘説無し、雲は青天に在り水瓶に在り」と、蓋しこれより購出し來るものか。

⑤ 手を撒す。手放して歩むを云ふ。

⑥ 純清絶點。即ち太極以前なり。

⑦ 羲皇云々。伏羲氏なり、始めて易を畫して八卦を作り、之れを重れて六十四卦となす。

⑧ 雲夢。雲夢の澤を云ふ、司馬相如が子虛賦に曰く、「楚に七澤あり、名づけて雲夢と曰ふ、方九百里、其の中山あり、其の山は即ち盤紆蕭鬱、陸崇聳峯、岑峯參差として、日月蔽虧す、交錯糾紛として上霄雲を干し、龍池陂池として下江河に屬す」とある是れなり。

⑨ 麗老西江。麗羅居士、馬祖に參問して曰く、萬法と友たらざる者は是れ什麼人ぞ。祖曰く、汝が一口に西江の水を吸盡するを待つて汝に向つて道はんと。居士言下に大悟す。

⑩ 果々。あきらかなること、詩に「果々として日出づ」と。

⑪ 萬門。鯉、萬門三級の浪を越ゆれば龍となる。

⑫ 少好の貌なり。

⑬ 三要。臨濟禪師爲人の機關、

天地由來積徳の門、主人大坐直に軒に當る、^①雲夢八九胸中の芥、^②龐

桂峯

老西江何ぞ呑むに足らん。
東土の二三奕葉を聯ぬ、^③西天の四七芬芳を發す、^④孤危峭絶攀ち難き處、^⑤熊耳聳高うして秋色長し。

陽甫

一氣生ずる時天靄然、^⑥別春何ぞ必ずしも梅邊に在らん、^⑦金鳥飛び上る扶桑の樹、^⑧達磨元來禪を會せず。

一翁

元來天地是れ同根、^⑨四海の中獨り尊と稱す、^⑩行道威音空劫の外、^⑪強ひて王老に兒孫と喚ばる。

照嶺 眞

影 杲杲たる時空寂寂、^⑫峭嶮嶮の處坦蕩蕩、^⑬三千刹界光明藏、^⑭百億の須彌日月長し。

靈源 性

神龍豈に是れ池中の物ならんや、凡鱗を脱却して、禹門に登る、白浪滔天意氣を添ふ、由來水は崑崙より出づ。

榮中 恩

少林の毒種扶桑に逼し、天下一株の蔭涼、子葉孫枝繁茂の處、秋風 嫋桂久昌昌たり。

玄虛 聃

三要印開す衆妙の門、依然として天地是れ同根、佛老深談の旨を知らんと欲せば、黒漆の昆命空裏に奔る。

玉溪 音

蒼龍窟裡夜沈沈、波浪聲收つて萬壑深し、明月清風無價の寶、高山流水没絃琴。

劫外

行道威音王以前、虚空手を拍して同年と叫ぶ、少室別傳の旨を知らんと欲せば、枯木花を開く時節縁。

悅巖

破顔の尊者同參と叫ぶ、宴坐の空生講談を費す、禪味忘るる時眞の法喜、石屏の雨花響、麤紙たり。

見外 參

若し文字語言の中に見れば、更に那邊に向つてか我が宗を立せん、笑ふに堪へたり善財の強ひて尋覓することを、徳雲は妙音峰に在らず。(見を一に形に作る。)

龜伯 哥

舞袖風に翻る老飲光、蔑を吹く仲子、宮商を絶す、餞行の一句明朝吉なり、海上の蓬萊日月長し。

一是

萬法空に歸して點塵を絶す、非を知る、四十九年の春、當陽直指す即心佛、今日看來れば日下の人。

鐵船 梵盈首座

渾鋼を打就して勢太だ頑なり、浪花雪を捲いて銀山を倒す、古帆高く掛けて後の消息、海西の風月を載せ得て還る。

第一要、第二要、第三要なり。

①黒漆の昆命。黒漆は眞黒なるをいふ、昆命は渾淪に同じ、物の圓渾するに名づく、黒漆は其の色を形容するなり、圓玉の如き黒きものが夜の眞闇を走るといふことにして、有にして有ならず、無にして無ならず、有無を超越するをいひ、宇宙の妙用を表示する語なり。

②没絃琴。絃のなき琴なり。

③空生。須菩提なり、佛十大弟子の一人、解空第一を以ての故に名く。

④麤々。毛の長き貌、それより轉じて長く垂るるにも云ふ。孟浩然の詩に、綠岸麤々楊柳垂ると、此處文章且く麤々存す。

⑤宮商。共に五音の一にして、宮は五音の中、中聲にして主

となるもの、商は金に屬する音なり。

⑥四十九年。莊子に、伯玉行年五十にして、四十九年の非を知る」とあるより出づ。

⑦古帆云々。大應國師、虛堂和尚に謁す、堂便ち問ふ、古帆未だ掛けざる時如何、師曰く、蟻眼裏の五須彌、堂曰く、掛けて後如何、師曰く、黄河北に向つて流る、堂曰く、未だ、更に道へ、師曰く、某甲懸懸、和尚又作麼生、堂曰く、黄河北に向つて流る、師曰く、和尚人を護することなくんばよし、堂曰く、參堂し去れ、命じて賓客を典せしむ。

松屋 宗林監寺

棟梁の材大にして幾か年を経たり、厨庫山門境致全し、十里の風聲聴けば愈好し、三條椽下安眠を打す。

仰岳 祖泰尼

望む可し從來攀づ可からず、一峯屹立して雲間に挿む、針峯頭上に野跳し去つて、塊視す須彌百億の山。

春窓 祖椿尼

東皇第一の功を借らず、戸牖を密開して百花紅なり、端無く心猿を促敗し了る、喚び醒す南華化蝶の翁。

古巖 秀桂尼

阿僧祇劫の長きを歴盡して、峻崖萬仞瞻望を絶す、空生舊時の石を作すこと莫れ、花落ちて齏麩春雨香し。

一宗 宗統尼

東震二三派脈を傳ふ、西乾の四七同流と叫ぶ、天龍の佛法多子無し、玄風を振起して指頭を豎つ。

龍川 秀濟尼

四海五湖同一如、雲を攀ひ霧を躡んで清虚に上る、禹門激起す桃花の浪、首を回らせば諸方點頭の魚。(鰓を一に擲に作る。)

花屋 宗因尼

九衢の車馬芳塵を競ふ、吾れは吾が塵を愛して別に春を置く、鳳樓修造の手を借らず、桃紅李白美なる哉輪。

月溪 妙光尼

勝遊何ぞ必ずしも南樓に在らん、緑浄く春深うして氣秋に似たり、獨り許す寒山口を開いて笑ふことを、氷輪西に落ち水東に流る。

江甫 秀清尼

流水觴を濫べて波勢増す、海東の扶木日初めて昇る、門を出で一咲人の會する無し、達磨元來宋の少陵。(宋を一に會に作る。)

梅窓 理清尼

物有り天に先つ名未だ安んぜず、誰か戸牖を穿つて香に瞞せらる、穢皇の一劃華嚴の易、小碧紗前月に和して擲す。

①扶木。扶桑に同じ。
②小碧紗。小窓に張りし碧紗なり。
③擲。散する意なり。

心溪 宗田尼

佛祖元來不傳を傳ふ、^①琮琤として日夜響潺湲、意中の消息耳中に得たり、雨と爲る泉聲橋前に落

汝舟 祖川尼

運濟す支那四百州、梳竿管索凡流を截る、^②般人去つて後良河無し、空載す蘆花明月の秋。

春庭 訓

神光雪に立つ二三尺、達磨花を拈す八九年、別に東君の情報を傳ふる有り、黃鳥話し盡す玉階の前。

湖隱 賀

雲は南浦に歸り水は西源、朝市山林皆煩有り、高臥安眠何の處か好き、白鷗門外鶴の乾坤。

春學 篤

燕子日長し花の發く初め、少年叢中三餘を惜しむ、西祖の西來意を知らんと欲せば、先づ東丘東魯の書を讀むべし。

褒英 名讚、一華の的、雪村の孫

春秋の筆力勢雄なる哉、千萬人の中俊才と稱す、將に謂へり少林消息斷ゆと、雪村深き處一華開く。

旭峯 東

金鳥海を出で、一飛輕し、先づ高山を照して若英に昇る、徳雲相見の處に撈到すれば、黒崑崙大光明を放つ。

直庵 順

乾坤を控聚して毒拳を豎つ、^③采椽斲らず自ら天然、徳山臨濟門の入る無し、雪月風花一老禪。

梅室 春

是れ西湖處士の家にあらず、老禪の方丈南涯に住す、猗牀三萬二千の月、一夜の工夫只だ花の爲にす。

菊裔 勻

花晩節を持って曾て移らず、^④晋後の風流隱逸の姿、三玄三要の語を、^⑤槩括して、小色猶は霜に傲る枝有り。

古帆 順

①琮琤。玉の鳴る音。

②般人。殷王帝辛、妲己を寵し、税を重くし刑を酷にし、鹿池園囿を作り、長夜の飲をなす、庶兄微子、大臣箕子、比干屬々諫むれども聽かず、遂に比干を殺し、箕子を囚ふ、此くの如くにして、遂に武王に滅ぼさる。箕子、微子、比干は皆其朝の臣なり。

③東丘。東家の丘にして孔子を云ふ。孔子家語に、孔子の四家に愚夫あり、孔子は是れ聖人なるを知らず、乃ち曰く、彼は東家の丘なりと。孔子は魯の公族孟孫氏の後たり、並びに東魯と云ふのみ、即ち孔子の書を云ふ。

④采椽斲らず。堯の堂の高き三尺、土増三段、茅茨翦らず、采椽斲らずと、采は梓の木也、また一説に山より采り來るまゝの木を云ふと、奢らざるをいふ。

⑤西湖處士。林和靖なり。晋後云々。淵明歸去來に、三徑荒に就き、松菊尚ほ存す。周茂叔の愛蓮の説に、菊は花の隱逸なるものなりと。

⑥槩括。ためぎ。曲れるを正す木、淮南子に、其の曲規に中るは槩括の力とあり。

鐵船陸地に波を起し來る、空劫の前未だ掛けざる時、五須彌を把つて一片と成す、東西南北風の吹くに任す。

月浦 宗光

遠く海嶼を離れて雲衝を出づ、氷輪を推轉して瀛瀛乎たり、影波心に落つ般若の體、蚌胎吐出す光明珠。

林叔 梵精藏主、夢窓國師の雲孫

恭しく以れば蓮仙自出を同じうす、靈徹に相逢ふて記何を曾てせん、一衣一鉢西湖の月、梅花樹下の僧に分付す。

安芳 榴

寥寥たる心事自ら平均、珍重す歸家穩坐の人、四海の香風吹けども起たす、花を開き實を結ぶ漢園の春。

梅湖 鶴藏主

疎影暗香家に到る句、隨波逐浪截流の機、僧有りて若し花の來處を問はゞ、春は孤山雪後の枝に在り。

玉海 善琛藏主

元自ら圓成磨けども 磷かす、珠合浦に還つて物成新なり、夜來樓着す珊瑚樹、月白く風消し無

①海嶼。海山に同じ。
②瑣。論語に「磨けども磷ろかす」とあり。磨滅變形せざるより、外物に汚されざるを云ふ。

價の珍。(價を一に家に作る。)

材庵 承國門下の僧、諱を輪と曰ふ

林に凡木無し一封疆、這裡容る可し獅子の牀、作家宗匠の手を借らす、百千の日月雕梁に挂く。

春芳

溫然一氣東より來る、花は開く破顔微笑の時、諸佛番番世に出づ、梅蘭蓮菊時を同じうせず。

怡庵

花門闌に満ちて喜色加はる、夜垣何ぞ馬筭が家に比せん、主人安樂活

喜春

三昧、暮山の雲を拾ふて閒に茶を煮る。

芳園 菊

① 歡棕に堪へず積善の家、② 韶光九十日に相加はる、一枝の佛法多子無し、先づ破顔微笑の花に付す。

小牡丹花以て加ふる蔑し、③ 東籬の秋色君が家に屬す、少年叢裡首を回して看れば、晋後の風流猶ほ花に在り。

柏庵 元梁

④ 馬筭。馬祖道一禪師の家は筭筭を作るを樂とす、故に諱名して、馬筭筭といふ、馬筭はその略なるべし。

⑤ 歡棕。よろこびたのしむ。

⑥ 韶光。美しく輝くこと、是れ春光九十日をいふか。

⑦ 東籬の秋色。菊花をいふ。

指示す庭前那一株、九年面壁、碧瞳胡、若し趙老の雙華甲を論せば、太古の^① 莊椿半途に在り。

玉英 宗哲

晩成の大器天球を琢す、千萬人中獨り尤を抜く、色自ら粹温何の似たる所ぞ、黄花愛し看る晋の風流。

喜雲 宗慶尼

曾て十地を經たり眞の菩薩、終始^② 無心軸を出で來る、持して以て君に贈る怡悦すや否や、風一朶を吹いて天邊に落つ。

菊溪 宗芳

金莖一滴壽無疆、離落水邊猶ほ霜に傲る、四海香風吹けども起たず、花に逢ふて問取す幾^③ 重陽。

月岑 宗珠

指し來る不是話し來る非、^④ 鷲嶺曹溪共に機を顯す、今夜天外に出頭して看よ、山河大地光輝を發す。

器伯

玉に似たるを珪と名く磨すれども礪かす、^⑤ 六翮八翼其の人を得たり、神を祭ること^⑥ 在ますが如し

廟堂の上、北野の梅花南澗の蘋。(澗を一に礪に作る。)

柏翁 宗郝

庭前雪に立つ歳寒の姿、古佛趙州酬い得て奇なり、天地同根同甲子、蒼髯の叟も亦萬年の枝。

春庵 正意上座

屋を環る皆山醉翁と稱す、蒲團紙帳春風に坐す、袈裟撩亂たり三杯の酒、興は簷花細雨の中に在り。

西伯 壽兌

竺土の大仙傳ふるに心を以てす、龜毛の葉を抽んで、翠森森たり、端無く轉じて東來意と作す、吾が祖の^⑦ 甘棠一樹の陰。

檀溪 宗香首座

摩利山中雜樹無し、枝枝葉葉香風を起す、海外に流傳す眞の消息、此れより曹源一滴通す。

桃谷 周仁尼首座

洞中の春色人間に異なる、路は^⑧ 武陵溪上より還る、秦皇の爲に塵垢を洗はず、飛花水を逐ふて日に潺湲。

覺林 妙等尼

① 甘棠。召公奭の爰りし所、後人其の徳を頌して甘棠勿剪の詩を作る。
② 武陵。昔武陵の人、魚を捕るに溪に縁つて行き路の遠近を忘る、忽ち桃花林に逢ふ、漁人之れを異とす、深く入れば小口あり、開けて土地平廣、良田美地あり、村人來り、皆問ふ、自ら云ふ、先世秦の亂を避けて此所に來ると。

佛の一字人口を汚す、只麼に嗽ぎ來る蘆藪の風。公案現成猶ほ未だ了せず、二株の婁桂綠叢叢。

鈍翁 宗銳

文武爐中百鍊し來る、看よ他の鐵漢鑄成す時、太阿の寶劍未だ利しと爲さず、龐老の機關猶ほ是れ癩。

稻屋 祖收

鐵牛耕破す一心田、秋水門に連る八九椽、摺拾の法華穗を遺し去る、民村戸戸豊年を樂む。

香室 嚴

五葉芳を聯ねて春滿堂、龜を證して龍と作す一燈光、耗耗として花落つ半巖の雨、撼動す毘耶の三萬牀。

澄江 清

今千年黃河を待たず、涇渭流を異にす看よ若何、元暉が那一句を藥括して、風素練を翻して清波を湧す。

蘭庭 秀

十蓮多しと雖も一花に輪く、幽芳砌を繞る小雛、色、風流千古豈に極無

からん、子葉孫枝謝家に滿つ。

玉淵 琳

衣裡の寶珠大千に輝く、波に入つて驚起す臥龍の眠、好し龐老が西江水に和して、吸盡し來つて看る明月の泉。

大用 宗碩

劫外の靈機忽ち現前、威風凜凜として坤乾を動す、言ふ莫れ佛法多子無しと、裴休を賺過す黃蘗の禪。

希道 宗弘

羊を亡ぶ威毅多端有り、首鼠瞿聃兩端無し、識らす人々の脚跟下、一條の活路長安に透ることを。

松屋 名は紹長、遠州の人

根を深うし藤を固うして萬年榮ゆ、一木支へ來つて大厦成る、只だ寒山のみ有りて些子に較れり、近く聽けば愈好し遠江の聲。

芳心 宗妙

一字元來佛宣へす、龍兒八歲華鮮と稱す、月宮豈に三星の繞るを待た

①太阿。楚王、風胡子を召して吳越にゆき、歐冶子千將に見えしめ、之れに鐵劍三枚を作らしむ、一を龍泉、二を太阿、三を上市といふ、共に名劍なり。

②摺拾。ひろひとるなり。

③維摩居士の疾を問ふ菩薩の數の多きも、之れを變動せしむる概ありとなり。

④千年云々。黃河は水常に濁り、千歲に一度清むと傳ふ、之れを待つは殆んど望みなきの謂なり、周詩に、「黃河の清むを俟つし、人壽幾何ぞ」と。

⑤涇渭。涇水は濁り渭水は清む、合處三百里 清濁混ぜずと。

⑥筍。竹の一種、又は竹垣なり。

⑦裴休。黃蘗禪師に參じて得法す、字は公美、河東聞喜の人なり。圭峰、宗密と法に於て昆仲、義に於ては交友、恩に於ては善知識、教に於ては内外護たりといふ。

⑧亡羊。莊子に臧と穀の二人、相與に羊を牧して俱に其の羊を亡ぶ、臧に奚事をせしかと問へば、則ち曰く、儂を挟みて書を讀めりと、穀に奚事をせしかと問へば、則ち博塞して以て遊べりと、二人の者その事業同じからざるも其の亡羊に於て等しと。

⑨首鼠兩端。鼠の性疑多きを以て穴を出でず觀望し、一前一却進退決せず、故に兩端を持つるものに喩ふ。

⑩龍兒。法華提婆品に出づ、婆竭羅龍王の女、年甫めて八歲、智慧人にすぐれ、文殊菩薩の

ん、維れ徳維れ馨し當體の達。

古峯 名は勝雲

高うして塵劫より躋攀を絶す、塊視す須彌百億の山、是れ今時の那一色にあらず、秋天舊に依る碧潯顔。

龜溪 慧兆藏主

空谷を出で、也た禪河に入る、正眼流通す迦葉波、雞足山中六を藏し後、一枝の佛法多きを須ひす。(波を一に婆に作る。)

明室 珍

玉兎金鳥照臨せず、靈光古に輝き又今に騰る、門より入る者は他物に非ず、僧寶元來滄海の琛。

鳳嶺 榮儀首座、軒を安巢と扁す

岐山鳥有り同曹を絶す、處を得巢を安んじて羽毛を囀ふ、是れ丹楓碧梧の上にあらず、孤嵐百尺一峯高し。

一麟 瑞祥

衆角多しと雖も獨り群を出づ、四靈瑞を呈して氣雲の如し、漢王の殿閣遺像を留む、魯叟の

春秋闕文を修す。

開庵 興健首座

香嚴竹を撃つて拳を豎つる機、鐵壁重重路の窺ふ無し、補陀巖畔の月に和却して、偃溪の流水門に入り來る。

雲如 宗慧

風に随つて到る處帯無しと雖も、石に觸れて生ずる時根有るに似たり、臨濟の大龍纒かに奮迅す、忽ち法需と爲つて乾坤に洒ぐ。

玉岫 珍

形山に秘在す無價の珍、金に非ず石に非ず、緇磷を絶す、東峯西嶺雲の閒なる處、托出す天邊の月一輪。

覺林

草木山河淨法身、頭頭物物全身を現す、心花開發する底の時節、冷笑す華嚴會上の春。

瑞嶽

試みに龜哥に問へば吉兆多し、頽波砥柱禪河に立す、千年の鳥跋何の色をか現す、其の面花の如し

化尊に依り、諸法實相の理を悟り、釋迦佛の前に來りて、變じて男子となり、直ちに十方無垢世界に成佛すとあり。
⑦ 鷄足山。孤足山、又は鷄足山ともいふ。印度摩伽陀國伽耶の東南七哩にあり、迦葉入寂の地、六は頭尾四肢にて、藏は體を埋めること。
⑧ 琛。寶なり。
⑨ 岐山。支那鳳翔府岐山縣にあり、后稷の十三世の孫、古公亶父始めて此に居る。
⑩ 四靈。麟鳳龜龍の四なり。
⑪ 漢王の殿閣。麒麟閣に功臣の像を畫き留めしを云ふ。
⑫ 魯叟。孔子を指す、春秋の獲麟に筆を止むるを云ふ。

⑬ 補陀。補陀樂山なり、觀世音菩薩の居所、南海中にあり。
⑭ 法需。法雨に同じ、霽然として來る、故にしかいふ。
⑮ 形山。雲門一賣の公案に委しく見ゆ、又楚人卞和、璞を得たる所、後此の玉秦王十五城に代ふ、即ち趙氏連城璧の由來、天下傳ふとある是なり。
⑯ 緇磷。緇は黒色をいふ、磷は光る石なり、緇磷を絶すは、玉石を絶する程の意なり。
⑰ 華嚴會。華嚴經を讀誦して、國家の安康皇祚長久を祝禱する法會。

娑竭羅。

希溪 善灌尼

少林の 尼總持を慕はす、庶幾す當日の老閑師、端無く衆流を截斷し去つて、劈箭猶は遅し閃電の機。

繼芳 性胤

甘蔗華を拈じて春手を授け、黃梅月に和して曉に衣を傳ふ、門門是れより香風起る、露漉して路紅吹けども飛ばす。

無參 宗參

善財此れより遊方を絶す、初發心正覺の場に登る、西天と東土とに往かず、支沙元是れ謝三郎。

希雲

石に觸れて根無し岫を出で、飛ぶ、空に浮んで帯有らず風を逐ふて歸る、線路を放開して他に與へて看せしむ、輕うして道人身上の衣に似たり。

逸峯

五嶽高しと雖も吾れ攀づ可し、飛來一朵雲間より出づ、軒に當つて獨坐する底の時節、塊視す須彌

百億の山。

悅林

破顏微笑の老頭陀、拈華の宗旨多きことを須ひす、給孤園裡好春色、留めて千年の烏鉢羅と作す。

覺翁

高く心空を叫んで江を吸盡す、角巾霜鬢雙雙たり、大疑團破るる底の時節、手を拍して呵呵として老龐を咲ふ。

月巢 初首座、丹州の人

丹山風有り僧中に現す、碧梧に接らず秋風を誦る、桂花の枝第一を占得して、霄を搏つて高く 廣寒宮に入る。

南陽 長成律師、南山の律宗を傳ふ、泉涌門下の碩徳と稱すと云ふ。

道宣の宗を傳へて律藏開く、戈を把つて佛日再び塵いで回す、嶺頭の春色梅に屬して後、四海の薰風此れより來る。

雪庭 宗可

① 尼總持。達磨の法嗣、梁の武帝の女、老閑師は達磨を指すなり。
② 甘蔗。釋尊の姓の一なり、拈華微笑の因縁をいふ。
③ 支沙。師備禪師、雪峰義存の法嗣、姓は謝氏、幼より好んで南台江に釣し、漁者に狎る、人よんで謝三郎といふ。

④ 給孤園。具には紙樹給孤園園といふ、中印度舍衛城の南、凡そ一里の處にあり、もと紙陀太子所有の園林なりしが、須達（給孤獨）長者其の地を購ひて釋尊に獻じ、太子また其の林樹を佛に捧ぐ、かくて二人にて寄進したるが故に、是れを紙樹給孤園と名づけ給へり。

⑤ 桂花云々。月中桂樹あり、故に月字を拈弄するなり。

⑥ 廣寒宮。又廣寒府ともいふ、龍城録に、「上皇、巾天師、道士馮都客と八月望日の夜、天師の作術に因り、三人同じく月中に遊び、一大官府を見る、榜して廣寒清虛の府といふ。」

吾が這裡心の安んず可き無し、黒漫漫地白漫漫、神光縦ひ少林の髓を得るも、梅花徹骨の寒に輸卻す。

安岳 隆泰

一を得て清く分一を得て寧し、嵩呼萬歲兩三聲、而今天下泰山の上、干戈を動せずして太平を致す。

密傳 宗嚴

祖師の心印付し將ち來る、何ぞ南天鐵塔の開くを待たん、眞言成佛の旨を會得して、眼頭高うして黃梅に到らず。

玉岫 宗琳

塵勞を磨し盡して光自ら生ず、人人具足本圓成、形山の一寶價無かるべし、秦王の十五城に換ふこと莫れ。

雲屋 宗澤

鄧林の一木君を得て支ふ、將に謂へり銜樓跨竈の兒と、瑞を爲し祥を爲して天下に雨ふる、須臾に蓋覆す四坤維。

瑞巖 宗祥

瑞雲乍ち起つて乾坤を覆ふ、輕うして天衣の石根を拂ふに似たり、空華を亂墜して我れを試むるを休めよ、銀山鐵壁入るに門無し。(乍を一に忽に作る。)

華仲 淨金

趙州の甲子未だ多しと爲さず、路を問ふ、臺山勸破の婆、鳥、垣窻を奏す百花の裡、木人咲つて唱ふ大平の歌。

以清 維泉

大地元來淨法身、知らず何の處にか鐵座を立せん、曇華瑞を現する底の時節、河水千年一度新なり。

寶岳 法珍

衣珠一顆磨さずして圓なり、形山に秘在して幾年をか歴たり、端的雲外に出頭して看よ、夜光明月青天を照す。

大川 宗三

曹源那一滴を激起して、立立の處、宗猷を立す、銀河倒に應ず須彌の筆、白浪滔天字を學んで流る。

高節 壽筠

また天寶遺事に、唐の明皇、月宮に遊び、天府を見る、榜して廣寒清虛の府といふ、素娥十餘人、皓衣にして白鷺に乗り、桂樹の下に舞ふと。

嵩呼。山呼に同じ、臣民君主の萬歳を呼ぶこと、漢書に、「武帝事華山に用ふ、中嶽に至り、親しく嵩高に登り、御史乘屬廟旁にあり、吏卒みな萬歳を呼ぶ」と。

臺山勸婆。趙州因みに僧、婆子に臺山の道、甚の處に向つてい去ると問ふ、婆云く、臺直去と、僧疑かに行くこと三五歩、婆云く、好箇の師僧、又懸崖に去る、後僧あつて州に攀似す。州曰く、待て我れ去つて爾が與めに道の婆子を勸過せん、明日爾ち去つて、亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ、州歸つて衆に謂ひて曰く、臺山の婆子、我れ爾が與めに勸破し了れりと。

多福の一歳歳寒を凌ぐ、霜前雪後平安を報ず、衝天の意氣層雲の上、
渭子湘孫千萬竿。

虎林 正隆

藏を典る雲窓夢閣の間、風八極に生じて南山を出づ、爪牙備り羽翫成る
矣、臨濟の兒孫一斑を露す。

補拙 勤

垢面蓬頭 老懶の禪、鳴鳩呼醒す一春眼願に垂る、寒涕拭ふに心無し、
手は熱す山中煨芋の烟。

悦更 玄怡

天壽域を開いて八荒安んじ、卻つて算ふ 塔堂幾千ぞ、試みに聴け西風
一横笛、新翻唱へ起す萬年の歌。

永年 玄甫

黄竹墟の西 青雀回る、龜臺の金母瑤池に宴す、春風坐了す九千歳、海
上の蟠桃實を結ぶこと遅し。

柏心 梵茂

看よ他の華甲趙州翁、錯つて認む西來の雙碧瞳、龜蛇と其の齒を聞はし
むることを休めよ、三星夜夜 蟾宮を繞る。

聖倫 慧扇

彼の眞丹を化す上大人、儒童菩薩是れ前身、仁里に居らす名を得るや否
や、衆角多しと雖も唯だ一麟。

壽岳 宗仙

龜齡鶴算白頭翁、三呼萬歳の嵩きを屑しとせず、遠く看近く聴けば聲愈好し、長
松脩竹無窮を祝す。

月桂 宗光

雲斤玉を削つて氷輪輾る、美譽芳聲載せ得て新なり、廣寒の枝第一を折り取つて、詩
を作り遠く寄せて 佳人に與ふ。

大宗 昌乘藏主、龍淵派

龍淵深き處 老龍蟠る、日本支那多少の孫、一口に平吞して還つて吐出す、烏頭
の毒氣乾坤に溢る。

松庵 宗藤藏主

いふ、填、糞共に昔けん、同
字なり。

曹溪。曹溪の源、六祖慧能禪
師の流をいふ。

渭子湘孫云々。節字を拈弄す
るなり。

老懶の禪。懶瓚禪師、寒涕を
拭はざること前に見ゆ。

塔堂。龜の土塔三段、草を生
ず、十五日以前は一葉を増す、
十五日以後は一葉を落す、名
づけて寶英といふと、これな
り。

青雀。西王母の使なり。西王
母再來を約して遂に來らす
と。漢武故事に七月七日、乾
承殿に齋居す、忽ち青雀あり、
西より來つて殿前に集る、上
東方朔に問ふ、朔曰く、是れ
西王母來らんとするなりと、
頃ありて王母至る、去るに至
つて、帝に許すに三年の後、
復た來るを以てす、後、竟に

來らすと、之れを譏案するな
り、蟠桃は王母の漢皇に獻ぜ
し桃、三千年に一實すと。

三星。二十八宿中の心宿の星
なり。

蟾宮は月なり。

衆角。聖字に就いて點出す。

佳人。よき人といふ程の意。

山門の境地人の標榜、棟梁の材を得て宗再び興る、近く聽けば微風聲愈好し、三間の茅屋半間の僧。

橋洲 宗金藏主

千江月に印す光明藏、古佛心を傳へて一箇も無し、塔様機前若し相問はば、南村は梅白く北村は蘆。(蘆を一に盧に作る。)

續芳 宗繼

誰か 鷲膠を把つて断絃を理む、九年の弓少林より傳ふ、寒梅甲を破る
六花の陣、箭を看よ成音空劫の前。

維馨 宗範

東君の春信君が家に到る、是れより群芳次第に加はる、
傳へ得て、暗中に摸索して梅花を識る。

有節 理忠尼、醫王門下

摠持尼少林の響に效ふ、九年の皮髓を分ち得て親し、若し宗門の功第一を論せば、
に上せん。

壽峯 宗丘

巍然として突出す衆山の中、老彭に比するに依備として同じからず、鶴算會齡齒を聞はしむるを休めよ、常春藤萬年の松に挂る。

傳巖 永霖

義層雲に薄る大丈夫、聖朝 雨落ちて物皆濡ふ、今に至るまで天下磐石を安んじ、野に在る遺賢畫圖に入る。

春芳 名は桂、建仁寺の沙彌

花は發く東皇の第一機、根は蟠窟より遠く移し來る、少年能く 狀元
の日を記して、凌霄三月の枝を探り取る。

雪庭 名は瑞、建仁寺の沙彌

普通年後宋の丁卯、巽二先驅して膝六多し、松柏歲寒うして猶ほ忍ぶ
べし、梅花太だ瘦す又如何。

鐵牛

二輪園を鎔して一頭を鑄る、胡僧の心印誰れ有つてか酬いん、機に當つて
山前高く 車と叫ぶ。

松雲 長

①鷲膠。一に續絃膠とも云ふ、前に見ゆ、繼字を打するなり。
②蓮仙。林逋、字は君復、宋の錢塘の人、和靖先生なり。
③成音。龜鑑とひ、よきけたがき手本などと云ふ意なり。

①雨落ちて。霖字を打するなり。
②根云々。桂字を打し來るなり。
③狀元。進士の試験に及第して一番となりたるものをいふ、宋史に「三場に狀元たり」と。
④巽二。風の神、膝六は雪の神をいふ。
⑤拗折。へしなること。
⑥牛。牛の鳴く聲。

一四〇
帯を固うし根を深うす億萬年、春空霞靄として翠天に連る、風に随つて若し夜來の雨と作らば、箇の一枝を留めて杜鵑を啼かしめん。

月岑 宗圓、淨土宗

昨夜秋風廣寒を動す、桂花影映じて數峯殘る、雲斤郢人の手を借らず、削り出す青山の玉一團。

清芳 淨土宗

帶水挖泥、遠社の蓮、崑崙の鼻孔半邊穿つ、歸り來つて寥寥地を認むること莫れ、風幽香を送る落日の前。

蘭曉 四十字數殿、名は宗芳

蕙草多しと雖も以て加ふる茂し、根を林藪に托す楚人の家、從來朝廷の上に在るべきに、香春畦に滿つ只だ一枝。

壽岳 宗延、明石の則兼公

尼丘を以て老彭に比すること莫れ、金華の仙子長生を授く、嵩呼三十六峯の外、四海波平かなり萬歳の聲。

龍雲 堀豊後守、名は宗興

神物蜿蜒として石根より出づ、今に至るまで韓孟約猶ほ存す、一飛風雷の力を借らず、浪桃花を激して禹門に登る。

悅叟 鶴原氏宗怡求む

春門闌に滿ちて喜色多し、老年の花も亦温和を帯ぶ、君が家自ら長生の訣有り、鶴算龜齡他に譲らず。

大業 宗繼

三千世界眼中に穿つ、百二の山河掌内に收む、若し此の老の功第一を論せば、武門閥閥箕裘を續ぐ。

大成 宗功、備の甲族、廣澤

家業興る時日に轉た新なり、美なる哉奐や美なる哉輪、籬邊の燕雀相賀するを休めよ、三百の周詩碩人を賦す。

義江 光忠 禪門

足を濯ふ機前便宜に落つ、急流勇退運關黎、丈夫の意氣層雲の上、渡頭の風月を開卻し來る。

松翁

①雲斤云々。莊子に「郢人垺にて其の鼻端を埽る、堯叢の如し、匠石をして切らしむ、匠石、斤を運らし、風を成し、聽いて之れを斲る、堯を盡して鼻傷らず」とあり。
②遠社の蓮。蓮社十八賢、前に見ゆ。
③金華の仙子。黃老即ち老子をいふ。

④百二山河。史記に「秦は形勝の國、河山の險を帯び、懸隔萬里、持戟百萬、秦百二を得たり」と、古人倍を云ふて二と、蓋し百倍の意なり、地の利一人以て百に當るべき所をいふ。
⑤美云々。輪奐の美なるを云ふ、屋宇の高くして華なるをいふ。

根に 茯苓有り幾春をか經たる、和扁の術を傳へて自ら神を願ふ、蒼髯豈に敢て秦垢に染まらんや、萬岳千峯一老身。

松屋

蒼髯更棟梁の姿有り、一木今大厦を支へ來る、十里の風聲聴けば愈好し、儒門の知識戒禪師。

榮仲 泉隆

士林古より英豪を出す、雲 新豐を擁して樹影高し、三尺の吹毛元動かす、太平の天下卯金刀。

太陽 宗旭、信州知久氏

足を衝る葵花日向つて傾く、君を堯舜に致して丹誠を抱く、鵝湖山下神在すが如し、陰德今に至るまで人名を誦す。

春芳

造化私無し德隣有り、東君の雨露百花勻し、春は梅に於てすると秋菊に於てすると、敢て保す 張良が婦人に似たることを。

芳室 宗葩尼

紅釋迦春雨の過ぐるに隨ふ、紫彌勒曉風の吹くを待つ、天花亂墜す珠簾

の外、獅床三萬を撼動し來る。

喜雲 明怡大姉

十地の初め分十地の終り、無心袖を出でて又風に隨ふ、君に一朵を贈る須らく怡悦すべし、春色光明兜率宮。

希周 宗鼎

① 孟斯の詩一篇を留め得て、文有り郁郁として曾て遷らす、家を齊へ國を治む任似に似たり、能く蒼姬を保つ八百年。

花屋 周林信女

輪奐美なる哉桃李の中、珠簾甲帳春風に坐す、家家富を争ふ翟曇老、多御す一枝微笑の紅。

繼芳 祖胤大姉

鷲嶺の一枝別春を傳ふ、燈花燭を續いで瑞光新なり、二三四七相承の後、更に芳を尋ね臭を逐ふ人有り。

梅隱 祐芳信女

一枝の春色人間を謝す、嵐ち得たり水邊林下の間、試みに看よ娘生眞の面目、月花影を移す小

死す」と、即ち却つて新豐の雲氣、靜かなるをいひしものなり。
② 張良。狀貌婦人の如しと、而して其計を帷幄の内に運らして、勝を千里に收むと、此の春芳、又婦人に類するや。
③ 孟斯の詩。孟斯は魏の屬、一同に九十九子を生む、詩の周南に、「孟斯の羽族々なり、宜なり爾の子孫振々たる」とあり、其く夫婦和合して子孫の多きをいふ。

① 茯苓。寓生の植物、黒松の舊根株の邊の土中に自生し、塊を成すこと拳の如く、肉に紅白の別あり、藥用とす。淮南子に「千年の松下に茯苓あり」と。
② 和扁。扁鵲等の醫術をいふ。
③ 新豐。白氏文集、新豐折臂翁、邊功を戒むる詩に、「幾くも無くして天賣大いに兵を徴す、戸に三丁あれば一丁を點す、點じ得て驅け將めて何處か去る、五月萬里雲南行、開道らく雲南盧水あり、椒花落つる時燼烟起る、大軍徒涉水湯の如し、未だ過ぎず十人二三は

孤山。

桂室 宗昌信女

根は是れ西天の胡種族、少林門下二株抽んづ、香を輸す白を遜る梅と月と、清きことは 姮娥宮裡

の秋に似たり。

見室 妙心信女

佛眼も窺ひ難し一丈方、機を藏して密密露堂堂、桃花亂れ落つ 曼陀の

雨、毘耶三萬の牀を撼動す。

月岫 慈園信女

宮裡の姮娥獨り欄に倚る、春花の影を移して人に與へて看せしむ、千山

萬嶽雲收つて後、中峯を光照す玉一團。

慧雲 宗智信女

頓に十地を超ゆ未だ奇と爲さず、佛日の禪に參す無著尼、徑山三月の桂を攀折して、拈じて黒漆

の竹篋と成し來る。

渭川 宗清信女

脩竹林深し千畝の秋、清流何ぞ敢て涇に混じて流れん、釣竿風穩かなり禁池の影、魚龍頭を畏れて

釣に上らす。

天外 超

別傳向上の禪、坐斷す盡乾坤、天外に出頭して看よ、毘盧脚下の邊。

花溪

微笑の尊者、廣長の能仁、水有れば月を含む、誰が家か春ならざる。

燈溪

四七燭を續ぎ、二三流を同じうす、龜を燈して籠と作す、須彌 點頭。

玉岫 梵圭

溫潤縝密、山色連城、藍田日暖かに、崑崗烟生す。

潤屋 宗瓊信女(信女を一に信男に作る。)

恩光雨露新に、晚節其の身を保つ、無盡藏開くや、楊州家裡の珍。

睡足 相國寺雲澤の仁恕の請

胸中の物八九の雲夢、眼底の書三萬の祿渠、雨過ぎて海棠春院静か

なり、清風一枕 黒甜の餘

話月齋

① 姮娥。月の異名。
 ② 曼陀羅華。蓮華、天妙華、白花と譯す、花の名なり。光潔にして異香あり、見る者の意を喜ばしむと、桃花の雨に比する也。
 ③ 徑山。大慧宗杲禪師の住山、無著は師に就いて法を受く、儀禮、總持等尼僧の傑出したるものとして稱せらる。

④ 毘盧。毘盧遮那佛の時、光明遍照と譯す、佛の身光、智光が遍く理事無礙の法界を照して、圓明なるの義なり、宗教にては大日如來と稱するは、即ち是れなり。
 ⑤ 點頭。うなづいて頭を動すを云ふ。
 ⑥ 溫、潤、縝、密。密は玉の四圍といひ、君子の徳に喩ふ。
 ⑦ 藍田。搜神記に「玉を藍田に積みて美婦を得たり」と。
 ⑧ 崑崗。千字文に「玉は崑崗より出づ」と。
 ⑨ 胸中八九の雲夢。胸中の秘めて大なるを形容して云ふ、前漢書司馬相如傳に「雲夢の如き者八九を呑む、曾て華芥せ

暮山の雲を拾ふて束ねて薪と作す、茶を煮て榻に對す主と賓と、曹溪は月を語り士峯は雪、一語應に俗塵に落つる無かるべし。

萬休齋

白鷗我れに似て未だ吾れを忘れず、迷悟聖凡二途無し、瓦解氷消甚の時節ぞ、心閒なれば朝市も亦江湖。

半梅齋

梅は色を分つに因つて三白を遜る、雪は香あらざるが爲に一籌を輸く、劉項元來天下半なり、枝南枝北鴻溝を割く。

大笑齋

五峯の請

離邊の斥鴳鵬程を小なりとす、口を開いて呵呵天地驚く、此に到つて寒山手を拱して立つ、柴門月色大江横ふ。

松鷗齋 江心

多とす汝が書齋實に名に合へり、青松社裡白鷗と盟ふ、近く聽けば愈好し遠く聽けば好し、十里の清風撲鹿の聲。

愈好齋

齋主老蒼顔、松を栽ゑて境の閒なるを愛す、微風聽き得て好し、天地一寒山。

す」と、雲夢は前に見ゆ、楚の七澤の一なり。

●黒甜。支那南方の俗語にて午睡をいふ。

●朝市。繁華雜沓の巷、江湖は人寰を離れし閑寂の處をいふ、即ち坐禪せば、四條五條の橋の上のゆきゝの人を、深山水に見ての心なり。

●劉項。劉邦、及び項羽を云ふ、史記に「項王乃ち漢と約し、天下を中分し、鴻溝以西を割き漢となし、鴻溝而東の者を楚となす」と。

道號領下

希雲號

定光精舍は尾の古刹なり、適ち大覺門下の一派なり。其の徒宗端藏局、予が室を扣いて、朝參暮究、孜孜として倦まず、志勤めたり矣。一日來つて告げて云く、「某諱は端、請ふ和尚之れに字せよ、以て華衰と爲さん」と。仍つて命するに希雲を以てす焉。蓋し古顔を希ふものは顔が徒なり、今日白雲を希ふものは白雲が孫なり、予が取る所茲に在るのみ。一偈を厥の上に係けて、遠大を祝すと云ふ。顔に非ず曠に非ず是れ龍に非ず、棒雨喝雷風も亦從ふ、金剛栗蓬鐵酸餛、甘棠故笏先宗を慕ふ。

明屋號

神高山龍寶禪寺は、和の望刹なり、其の主宗朝典藏、吾が門に入つて錫を挂くること年有り、晨參暮請、忘らす、其の志嘉尚す可し、一

- ① 道號。所得の道を表す語たり、又表徳の號とも云ふ。佛道に歸入すれば、受業師、本師等法諱を授く、爾後參禪修道の結果を見て、知識、名匠、特に其の號を尋る、故に道號といふ。
- ② 大覺門下。日本禪二十四流の一、唐長寺開山の太覺禪師闡溪道隆和尚を以て派祖となす。
- ③ 顔を希ふ。孔子十哲の一、亞聖顏淵回なり、此の人たらんことを望むものは、即ち顔の徒なりとなり。
- ④ 鐵酸餛。酸餛は酸餛ならん、

日側に侍する次で、席を前めて云く、「某諱有りて字無し、請ふ和尚之れを圖れ。仍つて明屋を以て之れを稱す、并せて村偈一章を賦して、以て遠大を祝すと云ふ。

心月孤圓大法輪、揚州是れ自家の珍に非ず、此の中花竹和氣有り、風光を占斷して主人と作る。

南華號

河陽の一縣に難僧有り、諱を榮と曰ふ、族は逆卷氏なり。韶胤の歳より、宜春法兄の室に投じて、師資の禮を執る焉。染衣の後幾ならずして、而して盛和墳寺の席を主る。繩墨を忽にせず、緇禮肅如たり。一日華姪の好を通じて、予に就いて字を徵す、南華を以て之れに命す。予不敏なりと雖も、且つ之れを説かん。夫れ南方は離の卦なり、離の言は麗なり、日月は天に麗き、草木は地に麗く、其の徳文明にして、而して華蟲の文有るが如きなり。華也草木欣欣として榮に向はんとす、春秋腓、咸く是れ南訛長養の功なり。蓋し南華真經は、莊座主荒唐の説なり。遽然として蝶と化し、栩栩として南華に入る。然れども而も梅に近づかず、大椿八千の春秋に誇ると雖も、朝菌一日の榮を奈ともせず、予が取らざる所なり。因つて記す曹溪の能大師、

- ① 儀にて作りたる饅頭にて、衲僧の嘴を下し能はざる意に用ふ。
- ② 揚州。支那の地名、古より繁華の地として名高し、唐詩にも「烟火三月揚州に下る」とある、之れなり。
- ③ 韶胤。胤の代りて新しくなる時分にて、小兒七八歳の頃をいふ。
- ④ 離は八卦の中位南方に當る。
- ⑤ 南華真經は莊子の別名、即ち莊子の述なり。
- ⑥ 遽然は、自得の貌。
- ⑦ 栩栩は喜び意に適ふ貌。

唐の龍朔中に黃梅の衣を傳へて、而して法幢を南華の地に建つ。斯の時宗に南北有り、曰く、南能、曰く、北秀。彼も一時なり、此れも一時なり、王侯の仰慕する所なり。宗門の榮、焉れより大なるは莫し。加之、吾が臨濟大師も亦南華の人なり。榮嶠の棒下に於て、骨髄に痒徹するものは、臨濟一人のみ。故に榮、囑して曰く、「吾が宗汝に到つて大いに興らん」と。是れに蘇つて之れを觀るに、或は八十生の知識、或は百世の師なり。榮也、二師の華胄たり、南華と稱す亦宜ならずや。他日梅嶺の春を河内に回し、臨濟の涼を天下に布かんこと必せり矣。祝祝。偈に曰く、

日輪午に當る 妙芬陀、花果同時に看よ若何と、曹溪別傳の旨を識らん
と欲せば、一枝の春色多きことを須ひず。

一庵

一僧有り、諱を虔と曰ふ、肥の前州より來る、遁ち永明門下の徒なり。昔因を忘れず、一日予が室を扣いて字を徵す。來意の感する所、之れに字して一庵と曰ふ、蓋し來由有るなり。昔馬師、虔上に住庵す、鬼神の爲に夜垣を築く、果して八十四人を江西の派下に出す、亦護法の力にあらず乎。虔や他時異日、金鷄一粒を銜んで、十方の僧に供養せんもの、公に非ずして誰ぞや。之れを勉めよ、書して以て遠大を祝す。其の偈に曰く、

九州四海獨り翁と稱す、山鬼窺ひ難し密室の中、道ふ莫れ夜垣我れを助くるに非ずと、江西此れより宗風を振はん。

汝雲號

神應主盟、祖泰藏主は、遁ち龍淵の龍孫、白雲の雲仍なり。姓は新見氏、備の甲族なり。一日予が室を扣いて字を徵す焉。予告げて曰く、「白雲は汝が祖なり、泰は汝が諱なり、汝雲を以て稱と爲す可ならん乎。」大凡そ雲の言は運なり、山川の氣石に觸れて起る、之れを雲と謂ふ。舒ぶるときは則ち彌綸して四海を覆ひ、卷くときは則ち消液して無形に入る。卷舒自在、變化得て測る可からざるなり。按ずるに公羊傳に曰く、「朝を崇へずして而して偏く天下に雨ふるものは、泰山の雲なり。」予が取る所茲に在り焉。若し教家に據つて之れを論せば、吾が佛、四種の雲を説いて四比丘に喩ふ。一に曰く、雷して雨ふらず、言ふところは其の十二部經を誦して、而も人の爲に説かざるなり。二に曰く、雨ふりて雷せず、言ふところは其の顏貌端正、好んで善友と相隨ふなり。三に曰く、雨ふらず雷せず、言ふところは意儀を具せず、諸善を修せざるなり。四に曰く、亦雨ふり亦雷せず、言ふところは其の學問修習、自を覺し他を覺するなり。是れに蘇つて三草二木恩に沾ひ、四生九類徳を感ず焉。四種の中、亦雨ふり亦雷するは、是れ龍淵の雲耶。雨

① 江西云々。江西馬祖禪師に比するなり。
② 彌綸。廣がること。
③ 崇。終ふるなり。朝を終へずしてに同じ。

ふり雷せず、是れ泰山の雲耶。抑亦菩薩の十地を法雲と名くるなり。始覺の智、本覺の理に歸入して、而して始本不二なり。是れ乃ち汝が不二門なり。智行運動するときは則ち大智雲を起し、大法雨を澍ぐ。是れ甘露門にあらず乎。佛は人なり、開梨則ち雲水、不二則ち甘露門なり。德澤をしも云はん乎哉、法雨をしも云はん乎哉、他日朝を崇へずして天下に雨ふるものは、汝雲に非ずして而して誰ぞ哉。旗れを勉めよ。偈を作りて以て遠大を祝すと云ふ。

直に龍淵より起つて、四坤を覆ふ、盡扶桑國是れ仍孫、忽ち霖雨と爲りて、枯槁を蘇す、不二廣く開く甘露門。

雲華號

巢林庵頭の祥公藏局、俗は藤氏なり、洞家の名宿、之れに字して雲華と云ふ。系くるに一偈を以てす。然れども世の騷亂に罹りて、而して飛鳥を亡じ、驚蛇を失す、以て遺憾と爲す。頃ろ楮皮を老拙に寄せて、伽陀一章を求む、書して以て其の請を塞ぐと云ふ。

磐石根を託して膚寸新なり、天瑞氣を呈し地春を回す、春空一朵眞の鳥鉢、持し來つて道人に贈るに堪へず。

梅江號

對陽の宗信藏主は西源翁の小子なり、余が側に侍すること殆んど一兩霜矣。然れども堂に昇りて未だ室に入らず。一日舊梓に歸らんことを告ぐ、蓋し慈明母を省するの謂乎。之れに餞して梅江の二字を摘み、以て道稱と爲す。夫れ梅の梅たる、春を穢易の畫先に占む、白にして而も白ならず、紅にして而も紅ならず、宗を龍朔年後に分つ。頓にして頓ならず、漸にして漸ならず、謂つべし百花の魁なりと、嗚呼、實を道ひて花を道はず、説命の闕文乎、實を道はず花を道はず、楚辭の遺恨のみ。牡丹は實無し、荔枝は花に非ず、豈に同日の語ならん乎。抑又江の江たる、江西に濫觴し、湖南に瀾漫たり。月の水に在る、猶ほ春の花に在るが如し。花に清香あり、水に令姿あり、之れを掬すれば月、之れを弄すれば花、春湖の白鷗、自然に宜しい哉。他時異日、西來意を漏泄し、雪月花を流傳せんもの、是れ梅江にあらざらん乎哉、仍つて小偈を作つて以て祝すと云ふ。

西天の四七水器に傳ふ、東土の二三花衣に滿つ、畢竟花に非ず又水に非ず、暗香疎影、野蕒薇。永正六冬節後一日。

①舊梓。故郷をいふ。
 ②穢易云々。伏犠の易を畫する以前、即ち梅の萬花のいまだ開かざるに獨り混沌を破りて魁くるをいふなり。
 ③野蕒薇。三柳軒雜議に「蕒薇は野客なり。」又香譜に「大食國蕒薇花の露、五代の時、藩使十五瓶を以て獻す。」

古 礪號

昔僧有り、大龍に問ふ、「如何が是れ堅固法身。」龍云く、「山花開いて錦に似たり、礪水湛へて藍の如し。」茲に一僧あり、諱を良堅と曰ふ、紙を寄せて號を求む、之れを雅稱して古礪と曰ふ、余が字する所、其の大龍の舊話端に在る耳。堅禪堅禪、二六時提撕して看よ、古礪寒泉他物に非ず、若し是れ 瞪目せば、争か底を見ることを得ん。偶に云く、主人門外の舊山河、風定つて 湛然自ら波たゝす、空劫以前今日の事、落花流水早く蹉過す。

文仲號

竹隱軒主虎藏局、道稱を求む、之れを稱して文仲と曰ふ、仍つて貫華一章を唱へて、以て其の義を稱すと云ふ。大器成る時道を載せて行く、管窺錯つて認む老書生、一朝跳出す 南山の裡、凜凜たる威風 八紘を動す。

龍光號

攝の下郡に古禪利有り、醫王と曰ふ、迺ち天龍門下の末派なり。周珍首座其の席を主る。幼より

- ① 礪は水のある谷、瀾に同じ。
- ② 提撕。二字共にひつさぐる意、師家が學人を提携誘引して、正眼を開かしむること。
- ③ 瞪目、目を張りて見開くこと。
- ④ 湛然。水の清みたゝへたる貌。
- ⑤ 管窺。くだの穴からのぞくことなり。小見をいふ。
- ⑥ 南山。支那の南山、周の都せし豊鎬の南にあり、時に「南山の毒の如く、毒けず崩れず」とある之れなり、又李白の時に「弓は播く南山の虎」と、然れども茲は必ずしも定まれる地名とも限らず。
- ⑦ 八紘。八荒に同じ、八方の事なり、茲は八方の綱維なり。

醫を學んで、盧扁の術を得たり。換骨の方、願神の術、謂つ可し今日の醫王善逝なりと。近頃予に就いて字を徵す、龍光を以て之れに命す。昔宋の司馬溫公、天下の宰相なり、僧有り、相公の諱の光字を避けて瑠璃皎佛と唱ふ、古今の笑具なり。仍つて偶を作り、以て左證と爲す。扶桑樹萬八千の東、國を醫し民を養ふ唯だ一翁、淨瑠璃皎の諱に觸れず、人參甘草再溫公。(淨瑠璃皎を一に淨瑠璃光に作る。)

春韶號

令津首座は過水派下の僧なり、一日入室の次で、予に字を徵す。之れに字して春韶と曰ふ。仍つて俚語一篇を摘つて、以て其の請を塞ぐと云ふ。

藏龍號

物陽和を遂ふて資つて始めて生ず、唐虞の禮樂昇平に屬す、吾が家の一曲宮商の外、聞塵を洗ひ盡す流水の聲。魯史に云く、「深山大澤は龍の窟なり。」宗澤藏主、余に就いて道稱を需む、之れに字して藏龍と曰ふ。偶を作り以て證と爲すと云ふ。多年神物泥蟻に堪へたり、豈に池中に向つて獨尊を屈せんや、若し春雷蟄戸を開くに遇はゞ、鱗蟲

- ① 盧扁。古の名醫扁鵲なり、盧人なるが故にいふ。
- ② 笑具。わらひ草なり。
- ③ 聞塵。耳なり。

三百總に兒孫

東明號

東山下の小阿師、諱を昇如と曰ふ、予に就いて字を索む、之れを雅稱して東明と曰ふ。仍つて貫華一章を製して、以て遠大を祝す。先づ高山を照す日近き耶、之れを仰げば仁義の老蒼迦、天外に出頭して須らく看取すべし、八十の華嚴春花に在り。

芳才號

禪佐藏主、芳才と號す、吾が鄧林師兄の命する攸なり。紙を寄せて偈を求む。花を擲め錦を簇らす好文章、覺範參寥當るべからず、正法輪を轉す調羹の手、僧中今視る斯郎有ることを。大永五年孟春。

桃嶽號

智康藏主、道稱を予に求む、命するに桃嶽の二字を以てす。蓋し丹田の神、之れを桃康に認む、義此れに取るのみ。仍つて拙偈一章を唱へて、以て左證と爲すと云ふ。古來度湖神茶を仰ぐ、直に丹田に入つて衆邪を摧く、洞中春色の煖を羨ます、金輪法外斯の花有

り。昔享祿第四辛卯夷則吉辰、妙心住山大休老耆書す。

直指號

吾が山の後版、鄧林の一枝、諱を諤と曰ふ、俗は甲族仁木なり。予に就いて道稱を需む、直指を以て之れに命す。因つて偈一章を摘つて、以て其の義を證すと云ふ。心地平かなる時繩墨正し、法梁高く架す鄧林の材、少室單傳の器を成せんと要せば、先づ斯の門より入得し來れ。天文龍集壬寅三月如意殊日。

蘭圃號

駿陽に沙彌あり、諱を金と曰ふ、予之れに字して蘭圃と曰ふ。禪詩一篇を賦して、以て遠大を祝すと云ふ。九腕移し來つて深く芽を託す、風流種有り謝公が家、春風競秀山林の裡、十蕙一枝三四花。(芽を一に才に作る。) 天文十七祀戊申夏五十又二。

桂峯號

慶昌藏主、號を需む、桂峯の二大字を書して之れに與ふ。偈に云く、少林の惡孽、忽ち天香を發す、雲外に出頭して、三色蒼蒼たり。

①八十の華嚴。即ち華嚴經なり、譯者によりて其の卷數を別にす、實又羅陀の譯、唐の靈聖元年に東都の佛授記寺に於て譯したるもの唐經ともいふ、八十卷あり。佛自證の眞理を解きたる經典なり。

②丹田。楚音、優陀那の譯、臍下一寸五分許りの所、體氣をこゝに集むれば精神散亂せず、思惟に通ずといふ、臍下の丹田を下丹田と云ふに對して、兩眉の間を上丹田といふ。

③鄧林。宗棟、細川氏、山城州の産、特芳和尙に久待し、得る所あり、後妙心、大徳寺等に住し、後柏原帝特泥輪旨を山門に下し賜ひて曰く、「正法山妙心禪寺は大燈國師上足の草創草園、先院御願の蘭若なり、是を以て輪命偈に復す、再興時を得」と、以て其の接化の機を推知するを得。

④九腕は鳥なり。楚辭に、既に蘭の九腕に滋し、又蕙を百畝に樹う」と。

覺翁號

賢等老人、楮皮を寄せて道稱を求めらる、之れに命ずるに覺翁を以てす。蓋し教中に等妙の二覺有り、十信位より十地を歴て、而して等覺に至り、等覺一轉して而して妙覺に入る、之れを覺行圓滿と謂ふなり。佛とは覺なり、翁とは老稱なり、佛は是れ西天の老比丘なり。覺と云ひ翁と云ふ、字義炳然たり。若し吾が宗に約せば、一棒一喝の下、頓に正覺を成するものは誰ぞ哉、四海の一暮翁のみ。其の偈に曰く、
迷悟元來二途無し、黃塵烏帽白頭顛、眼は高し三世十方の外、老瞿曇を呼んで我が奴と作す。

業仲號

河陽に丹下氏有り、崑山源公幕下の臣なり。世々忠功あり、而して宗因信男は厥の宗なり。永正庚辰の春、源公の爲に、命を戰場に致す、謂つ可し亂世の英雄なりと。其の徒、紙を寄せて因公の字を求む、之れを稱して業仲と曰ふ。仍つて山偈を賦して以て左證と爲す。

井の西

雲江號

越の太守、藤氏松井宗信公は、源右典厩幕下三代の忠臣なり。所謂武門の干城、法社の驍進なり。

り。先師之れに諱して守慶と曰ふ、老拙之れに字して雲江と曰ふ。仍つて伽陀一章を唱へて、以て遠大を祝すと云ふ。

朝來軸を出で、自ら無心、白鳥明かなる邊春水深し、此に到つて老龐も口を下し難し、旱天に雨と爲り又霖と爲る。

榮中號

多多良氏奈良元吉公は、源右京兆幕下の忠臣なり。弱冠より主に奉じて晨夕を廢せず。官暇の日、雪に笠に、父の書を讀んで而して遂に射騎の妙を得たり。一弛一張、文武の道未だ地に墜らざるもの乎。之れに加ふるに、公、昔吾が鄧林法兄の室に入りて衣を受け、安名して宗繁と曰ふ、謂はゆる俗にして而して眞、眞にして俗なるものなり。今茲に大永乙酉夏、法門に瓜葛たるの故を以て、予が龍安の室を扣いて祝髮染衣す、其の志勤めたり矣。一日話する次で、楮皮を出して字を立せんことを需む、命拒む可からず、字して榮仲と曰ふ。因つて記す、漢の朱翁子錦を衣て郷に歸る、是れ翁子一時の榮耀なり。宋の蘇内翰、燭を賜ふて院に歸る、是れ内翰一場の富貴なり。蓋し公、

●安名は、新戒得度の者の爲に初めて法名を安んずること、得戒受具の者は父母の作るところの名を稱すべからず、必ず佛法によりて、法諱法名を安んずべきなり、存命中得戒、又は出家せざるものには死後、歸戒、剃度を授けて、然るのち法名を安んず。
●瓜葛。親類のつやきをいふ。法門に瓜葛は法系なるをいふ。
●祝髮断なり、祝髮は剃髮に同じ。
●朱買臣、字は翁子、吳の人なり、始め貧にして妻孥に棄てらる、後會稽の太守を拜し、大に富み故郷に歸る、故妻之れを喪望し、遂に自縊すと。

源君の命に榮中して、而して祿を賜ひ官に拜し、位匠作に至るなり、一門の榮、焉れより大なるは莫し。内翰の富、翁子の榮、彼れも一時なり、此れも一時なり、予、榮中と稱するも亦宜ならず乎哉。禪侶一章を唱へて、以て遠大を祝すと云ふ。

富貴前に耀く春一場、錦衣蓮燭恩光を帯ぶ、若し太守朱翁子に非ずんば、内翰昔時の蘇玉堂。(帶を一に賜に作る。)

大永五夏五吉辰。

東明號

細川右京兆の幕下に一老臣有り、秀綱と曰ふなり。姓は源なり、氏は中澤なり、世々越州刺史に任ず。公、蚤に六藝の芳潤に嗽ぎ、而して以て箕裘の業を繼ぐ焉。衰衰たる源流、藉藉たる家聲、言はずして而して知る可きのみ。是れより先、公、野林翁の衣孟を拜し、而して自ら壽室の先登と稱す、翁之れに諱して宗晃と曰ふ。而して後子之れに字して東明と曰ふなり。夫れ公の人と爲りや、仲尼の日月を扶桑に掲げ、而して厥の末光を抱す焉。天地と其の徳を合せ、日月と其の明を合す矣。晃晃焉として之れに就けば日の如し。蓋し明の明たる、私照無きを以て明と爲す矣。然らば則ち誰れか其の徳を仰がざらん乎、誰れか其の明を仰がざらん乎。予が命する所、義茲に在る而已、公厥れ之れを念へ。

- ① 六藝。禮樂射御書數をいふ。
- ② 壽室。住持人の居室、方丈、函丈に同じ。寶林傳に曰く、「西天の第五祖優婆塞多、石室あり、縱十八肘、廣さ十二肘、受學の者、一人の得道ある時は、壽室に室に滿つ、徳多減度に至つて室中の響を將つて之れを茶匙す」と。轉は化度の人數を量る具なり。
- ③ 晃々。日の輝く貌。

青帝春を司つて、震方に居り、道儒星月光を争ひ匡し、元來宇宙雙日無し、赫赫たる威名扶桑を照す、大永乙酉夏五吉辰。

大業號

寶泉寺殿前の常州刺史全勳大居士は、源家の棟梁、細川の砥柱なり。居士曾て龍安の室を扣いて、衣孟を義天師翁に受く。翁之れに諱して全勳と曰ふ、寔に宗門の金湯なり。居士已に薨じて、烏積み免久し。蓋し源深きときは流遠し、厥の子あり、其の孫有るなり、一日來つて予に告げて曰く、「吾が全勳居士は、先龍安の命する所なり。然り而して其の諱を記して其の字を記せず、是れ遺憾のみ、請ふ、之れが爲に焉れに字せよ。」厥の辭肝に命ず、之れを拒む克はず、稱するに大業を以てす。因つて記す、昔々三乾の猛將、人天百萬の兵を發して、三百餘陣を張る、雜華を先鋒と爲し、涅槃を殿後と爲す、堅を被り鋭を執り、魔壘を攻むること殆んど四十九白。茲に於て魔軍大敗し、波旬瓜の如くに潰ゆ。遂に邪を捨て正に歸する者、今に二千歳、其の功も亦大ならず乎。之れを望めば雲の如し、其の業も亦盛んならず乎。之れに就けば日の如し、於戲誰れか仰がざらん哉。

- ① 青帝は春の神をいふ、尙書緯に「春を東帝と爲す、又青帝と爲す」と。
- ② 震方。易八卦の震を方位にあつれば東方に位す。
- ③ 金湯。金城湯池、城池の堅固なること。
- ④ 烏積み免久し。日月の經るをいふ。
- ⑤ 昔云々。釋尊の濟度の大略を記す。
- ⑥ 四十九白は四十九年なり。
- ⑦ 波旬。魔王の名、常に惡意を懷き、惡法を成就し、僧を殺し、人の慧命を斷つといふ。天魔と相對して用ふ。

夫れ居士は天竺氏の將種なり、家系を言へば則ち源あり本あり、行迹を論すれば則ち忠あり義あり、秋天と高を争ふなり。倘し然らば大業と稱するも亦宜なり。仍つて一祇夜を唱へて以て左證と爲す而已。

桃溪號

藤氏伴野は尾州の太守、諱は永勤、予に就いて字を徵す、之れに字して桃溪と曰ふ。蓋し靈雲見桃の義に取るのみ。仍つて貫華一篇を賦して、以て左證と爲すと云ふ。

武陵一たび源頭を失してより、千古花流れて水流れず、敢て保す靈雲の擔板漢、隨波逐浪幾時か休せん。

安邦號 (待曉院)

藥師寺國長公は、梅の宮の奕葉、橘家の棟梁なり。幼にして而して孤、敏にして而して學ぶ。精を騎射に研き、思を倭歌に覃す、幾ど父の風有り。世々京兆の幕下に仕へて、股肱の力を竭し、忠貞の節を持す、寔に遠大の器なり。一日官の暇、予が龍安の室を扣いて打話する次で、近前して曰く、「請ふ、師安名せよ。」予咄して曰く、「歴劫名無し、甚の安名とか説かん。」然り而して堅

①武陵。桃溪の義を購出し來り、靈雲師師の見桃悟道の因に混融するなり。
②擔板漢。一面を見て全體に通ぜざる疑漢をいふ、師見に覺ふ。
③覃す。深く廣くする意。

く請ふて已ます、遂に之れに名けて紹泰と曰ふ。公、信受して而して退く矣。三三四句の後、吳晟を寄せて字を需む、字して安邦と曰ふ。夫れ安なる者は止なり、凡そ人の一世に處する、安處に置くとときは則ち安し、是の故に人情安を欲せざる無し。吁、累卵の危に居して而して泰山の安きを圖る、是れ復た人世の常なり。邦なる者は、古に謂く「諸侯を封するを邦と爲す」と。(邦を一に國に作る)禮に曰く、「大を邦と曰ひ、小を國と曰ふ。」二義既に明かなり矣。蓋し予が所謂安邦は然らず。昔漢の時、賈誼、治安の策を上る、治安なる者は何ぞや、乃ち國を治め民を安んずるの策なり。上古の聖人、以て教を設け、政を施すの大本と爲す。竊かに以れば、公の祖及び子孫、三代、津陽の刺史を領す、爰に治安の策を用ひて、而して養生を起し、社稷を保つ者、年有り矣。因つて記す、洛社の耆英司馬光、偶藥師瑠璃光佛と諱を同じうす、兒童走卒も之れを誦す。(誦を一に稱に作る)元祐中に召されて相と作る。是れより先、民、王呂が新法に苦しむこと久し、光、政柄を執るに及んで、議して以て舊に復す。抑國を醫し民を活するの術は、焚溺を救ふが如く爾り。

①吳晟。支那製の紙なるべし。
②賈誼。漢の文帝の時の人、年二十餘にして博士となり、一歲にして大中大夫となる、禮樂を興さんとして讒に遭ひ、長沙王の傅となる、嘗て屈原を弔ふ文を作る、後、梁の懷王の大傅となり、治安策を上る、懷王馬より墮ちて死するに及んで、自ら責の重きを思ひ、哭泣すること幾餘、遂に死すと。
③社稷。國家といふに同じ、社は土の神、稷は穀の神、國は土穀によりて以て民を養ふ、故に立て、以て之れを祀る。孝經に「其の社稷を保ち、而して其の民を和ぐ」と。
④程明道、程顥、字は伯淳、宋の大儒、業を周茂叔に受く、元豐八年卒す。

程明道嘗て曰く、「君實の言は人參甘草の如し。厥の無妄の疾、藥すること勿うして喜有るの謂乎。此れに由りて之れを觀れば、昔時の溫藥師は、宋室に相として君を堯舜の上に致し、今日の藥師寺は、津陽に守として枕を泰山の安きに置く。彼れは賢宰相、此れは賢太守、支桑異なりと雖も、地を易へば然らん。件件は且く措く、吾が宗、別に安心の藥あり、公、試みに嘗過して看よ、必ず大安樂の地に到らん。祝祝。」

劉の爲に偏に左邊の肩を相ぐ、國昇平に屬す四百年、且喜すらくは商顏猶ほ老いず、橋中の一局漢の山川。大永五 禪季夏吉辰。

輝岳號

攝の入江氏、一の奇男兒あり、幼にして棟梁の材を抱く、生れて而して風流の種と爲る。萬葉千歳を詠じて、精を雪に研き、六韜三略を學んで、思を盤に覃す。箕裘の業、將に寒氷ならんとす矣。一日老拙に就いて、法諱并に道稱を需めらる、乃ち禪果を授けて之れが諱と爲し、輝岳を之れが字と爲す。且つ告げて曰く、「拙聞く、入江は藤氏の的裔たり、厥の家聲や古今に輝騰す。昭昭乎として之れに就けば日の如し、巍巍乎として之れを仰げば山の如し。輝と曰ひ岳と曰ふ、亦宜しからず乎哉。」偈を作りて、以て遠大を祝すと云ふ。卓爾たる高標攀ぶ可からず、日輪推し出す。搏桑の間、三千刹界光 明藏、百億の須彌福壽の山。

支桑。支那扶桑の略。

劉の爲云々。君の爲に偏に丹心を盡すをいふ。

禪は祀に同じ、年をいふ。

搏桑は扶桑に同じ。

模堂號 (院の開基)

有馬の郡主赤松氏、一賢女有り、適ち攝の刺史橋國長公の萱堂なり。諱して清範と曰ふ、字して模堂と曰ふ。老拙之れが爲に偈を作り、以て字說に代ふと云ふ。百丈の叢規今尙ほ存す、三千の禮樂一乾坤、魯般此に到つて繩墨を絶す、月斧雲斤痕を見す。天文龍集癸巳仲春日、大休老酒花園の見慶軒に書す。

心源號

菅家左金吾宗徹居士、予に就いて字を徵す、固辭する克はず、心源を以て之れに命ず。蓋し聞く、居士瑞龍門下の諸老宿に參じて、鳥積み免久し矣、謂つ可し樂嶠下の表休、樂嶠下の李翺なりと。人中の鳥蔑、希世の才なり。仍つて祇夜一篇を摘つて、以て遠大を祝すと云ふ。龍淵の派脈菅原に屬す、聞くならく他は東海の的孫と、謂ふ莫れ祖師意旨無しと、黃河九曲して崑崙より出づ。

秀峯號

國譯圓滿本光國師見桃錄 卷之二

萱堂。詩の衛風伯兮篇に、「焉んぞ護草を得て、昔れ之を背に樹ふ」とあり、背は北堂なり、母の居る所、之れを萱堂といふ。護は蓋に同じ、わすれぐさ、之れを食へば憂を忘ると。

百丈の叢規。百丈の古清規二卷、大智禪師の撰、叢林規矩の第一の書なり。

魯般。孟子離婁上篇に、「離婁の明、公輸子の功も規矩を以てせざれば方員をなすこと能はず」の註に、「公輸子名は班、魯の巧人なり」と、淮南子に「魯般木を以て爲を爲り、而して之れを飛ばす」とあり。

李翺は唐朝の人、朗州刺史たりし時、初め廬山に見ゆ、山顯みず、侍者白して曰く、太

駿州刺史源府君、入室參立の次で、法諱を求む、之れを名けて宗哲と曰ひ、之れに字して秀峯と曰ふ。按するに倒に上り秀づるものは峯なり、蓋し義柱に取るのみ。仍つて偶を作つて、以て遠大を祝すと云ふ。富士蓬萊日本の東、山顔老いす壽窮無し、虚空背上に頭を擡げて看れば、百億の須彌下風に立つ。

芥舟號

尾の賢太守武衛源公の幕下に禿居士あり、宗余と曰ふ。姓は藤、氏は織田、累代武門の勳閥なり。或人其の徳を表して芥舟と號す焉。近頃楮先生を介して、一偶を予に求む。予之れを聞けり、千金を芥にし、萬乗を履にし、而して雲夢の如くなるもの八九澤、其の胸に芥蒂せずと、寔に光風霽月洒落の士なり。蓋し芥舟と號する所以は何ぞや、之れを莊子の逍遙篇に取る耶、且つ夫れ水の積るや、厚からざれば、則ち大舟を負ふに力無し、杯水を坳堂の上に覆せば、則ち芥之れが舟と爲り、杯を置くときは則ち膠す、水淺うして而して舟大なればなり。郭象曰く、「夫れ質小なるものは、資る所大を待たず、則ち質大なるものは、用ふる所小を得

守此に在りと、朝性福急にして乃ち言つて曰く、面を見んよりは如かず名を開かんにはと、山太守と呼ぶ、朝應諾す、山曰く、何ぞ耳を貴んで目を賤しむことを得たる、朝手を拱いて之を謝す、問うて曰く、如何なるか是れ道山、山、手を以て上下を指す、曰く、會するや、朝曰く、不會、山曰く、雲は天にあり水は瓶にあり、朝禮拜し一偶を述べて曰く、身形を鍊り得て鶴形に似たり、千株の松下雨面の經、我れ來つて道を開ふ餘説なし、雲は青天にあり水瓶にあり」と、盛んに方外の遊を爲す、居士の名漸く禪界に知らる。

芥舟。芥といふが如く、胸中苦とならぬをいふ。

す、故に理に至分あり、物に定極あり、各事に稱ふに足りて、其の濟すこと一なり」と。是れに繇つて之れを觀れば、一塵天を翳し、一芥地を覆ふ、居士其の兩間に生れて、仰いで瞻し俯して察す、天地は杯水の芥を浮ぶるが如し、身之れが舟たるなり。然して識浪の爲に溺せられず、淺深高低、情に適して逍遙す矣、飄飄乎として一葦の如く所を縦にす、樂しみ至れり矣。厥の徳天地の間に昭昭乎として、莊が日月の如し、予が言其の明を掩ふ、豈に郭が霧に異ならざらん乎。嗚呼、濟川の材、諸れを含めよ、汝を用ひて舟と作さん、旃れを勉めよ。

春澤號

芥舟平地に波を起す時、空裡の遊絲之れを繋がんと欲す、一夜風吹いて何の處にか去る、蟬蟻海を負ふて蚊眉に入る。

備の後州に甲族あり、姓は藤、氏は廣澤なり、因つて食邑を安田と號す。安田光忠、予未だ其の面を見ずと雖も、遠く書信を寄せて、諱號を需む。諱して宗光と曰ひ、字して春澤と曰ふ矣。蓋し之れを淵明が春水四澤に滿つるの句に取るのみ。祇夜一篇、以て遠大を祝すと云ふ。

淵明春水四澤の句。陶淵明の四時の詩の起句なり、「春水四澤に滿つ、夏雲奇峰多し、秋月明輝を揚げ、冬嶺孤松秀づ」と。然れども許彦詩話にいふ、「四時の詩は此れ顧長康の詩なり、誤つて彭澤集中に入る」と。彭澤は淵明の令たりし處なり。

氷解け雪消して風波たてず、雲夢八九未だ多しと爲さず、天野水を浮べて眼俱に碧なり、一箇の白

尾の甲族織田又六郎信張、冷香軒主に介して、諱號を手に求む。子竊かに聞く、此の郎人と爲り、威にして猛ならず、虎の乙を挾むが如し。爪牙具り分頭角全し、狐其の威を假り、羊其の皮に象るの屬に匪すと。之れに諱して宗乙と曰ひ、之れに字して月虎と曰ふ。可ならん乎、軒主之れを領ふ。抑虎の虎たるや、大戴禮を按するに、云く、「西に毛蟲三百六十あり、虎之れが長たり、生れて而して三日、伏肉を喰はず、牛を食ふの機あり。始めて南山に入りて霧に隠る、こと七日、厥の文炳然たり。」蓋し虎穴に入つて虎鬚を捋で尾を履むものは、乙居士に非ずして誰ぞや。昔長沙の岑禪師、月を翫ぶ次で、仰山、月を指して云く、「人人盡く這箇あり、只だ是れ用ひ得ず。」沙云く、「恰も是れ便ち備を情ふて用ひん那。」仰云く、「備試みに用ひよ看ん。」沙一踏に踏倒す。仰山起つて云く、「師叔一に箇の大蟲に似たり。」後來人號して岑大蟲と爲す。是れに縁りて之れを觀れば、月と曰ひ虎と曰ふ、亦宜しからずや。氣類相感するときは、千峯の月に吼え、萬嶽の風に嘯く、凜乎たる餘勇、今に至るまで斑斑兒孫の在るは、

- ① 虎の乙。虎の脊の兩傍の皮下にありと云ふ乙字形のもの。
- ② 領す。うなづく、承諾するなり。
- ③ 大戴禮。漢の戴徳の輯むる所のものなり、揚雄の傳へたる禮記を小戴禮と云ふに對して名づく。
- ④ 伏肉。蓋し死肉を云ふなるべし。

乙居士の謂乎。偈を作つて以て遠大を祝すと云ふ。

毛群三百六十の長、兔子懷胎大蟲を産す、南山雲霧の裏を跳出して、一聲吼破す廣寒宮。

玉雲號

宗珪信女、紙を寄せて號を求む、之れに雅して玉雲と曰ふ。因つて貫華一章を唱へて、以て其の義を證すと云ふ。

崑山片片崔嵬を覆ふ、帝網重重殿陔を鎖す、朝に風を逐ふて、
荆岫を出づと雖も、暮に雨と爲つて陽臺に到らず。

雲外號

和の山中に甲族あり、山田氏と稱す。武門の関閥、法社の金湯、靈山の遺囑を忘れざるものか。是の故に兒卒も之れを誦し、草木も其の名を識る矣。宋の再温公か、齊の諸田氏か、嘉尚すべきなり。復た教外の宗を慕ふて、日に碧巖集を課す。之れを手にし、之れを口にして輟めず。近頃紙を手に寄せて字を徵す、或人之れに諱して宗公と曰ふ。蓋し公の義たる、天下大小と無く之れを稱して公と曰ふ、諱に宜しからざるなり。余公を改めて興に作るの次で、之れに字して雲外と曰ふ。

國譯圓滿本光國師見桃錄 卷之二

- ① 崔嵬。石山の土を頂くをいふ。
- ② 網一本綱に作る。
- ③ 殿陔は殿塔に同じ。
- ④ 荆岫。荆山下和 岫を出したる所、玉によつて之れをいふ。
- ⑤ 楚の襄王の故事、雲と爲り雨となりの意により、暮に到らざる意をとるなり。
- ⑥ 諸田氏。田横は齊王田榮の弟なり。通鑑集覽に、彭越既に漢の封を受く、田横其の屬徒五百餘人と海に入り、島中に居る、漢の高祖其の亂を爲さんことを恐れて、田横の罪を

按するに大戴禮に云く、「東に鱗蟲三百六十あり、龍之れが長たり。」然らば則ち公も亦鱗蟲の長たり、而して雲を起し雨を降す、人中の龍に非ずして何ぞや。其の變化得て識り難し。孔と云ひ休と云ふ、亦誣ひすや。仍つて偈を作り、以て遠大を祝すと云ふ。

和國の山河瑞氣濃かなり、風塵の表に出で、靈蹤を露す、由來是れ池中の物にあらず、且く春雷を待つて、臥龍を起さん。天文十三龍集甲辰菊月^①上澣日^②。

汝宗說

大雲山中一の侍史あり、諱を派と曰ふなり、乃ち吾が西源翁の舎飴なり。一日子が室を扣いて字を求む、之れに命するに汝宗の二字を以てす。侍史曰く、「其の説得て聞くべしや。」子曰く、「居れ、吾れ汝に語らん。夫れ法輪を建て宗旨を立する者、四七、西乾に倡へ、二三、東震に傳ふ。而して曹溪の一滴此れより分る矣。波浪浪浪、江湖湖南の間に森瀾たり。或は五家、或は七宗、天下滔滔たるもの皆是れなり。誰れか吾が宗に歸せざらんや。譬へば水の海に朝宗せざる無きが如きなり。然りと雖も天下本

故して之れを召す、横樹して曰く、敢て詔を奉ぜずと、使還り報す、帝乃ち衛尉鄺向に詔して曰く、齊王田橫即し至らば敢て勅捕するものは、族夷と致さんと、遂に義、漢に臣たるを恥ぢて自刎す、餘五百人尙ほ海中にあり、使をして之れを召さしむ、横の死なき、皆自殺す。以て其の人と爲りを知る。

①臥龍。龍は靈物なり、起てば必ず爲すことあり、英雄の未だ世に出でざるに喻ふ。三國誌に、「諸葛孔明は臥龍なり」とあり。蓋し之れに比するなり。

②上澣。上旬に同じ。

③倡へ。唱へに通じ、同義なり。

④五家。臨濟、沩仰、曹洞、靈巖、法眼、七宗は此れに攝す、黃蘗の二宗を加へたるものなり。

⑤查盜などをいひて、其の術の巧妙より機鋒端倪すべからざるに喻ふ。

⑥鐘頭。大衆の頭なり。

⑦南浦。大應國師をいふ。

色の白拈と稱するものは、臨濟一人而已。因つて記す、臨濟一日、松を栽うる次で、黃蘗問うて云く、「深山裡に許多を栽ゑて甚麼か作さん。」濟云く、「一には山門の與に境致と作し、一には後人の與に標榜と作さん。」道ひ了つて、鐘頭を將つて地を打つこと三下す。衆云く、「然も是の如くなり」と雖も、子已に吾が三十棒を喫し了れり。濟又鐘頭を以て地を打つこと三下す、嘘嘘の聲を作す。衆云く、「吾が宗、汝に到つて大いに世に興らん」と、一問一答、師資道合す矣。侍史今厥の孫と爲りて厥の宗を定む、夫れ子が字する所、茲に在らず乎。他日若し南浦の春を花園に回し、西源の流を桑海に激せば、吾れ汝を以て臨濟の正宗と爲さん。旂れを勉めよ。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之二終

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之三

遠孫比丘衆等重編

立地

釋迦如來文殊普賢二大士安座の 開光

「本是れ天然の老釋迦、金剛の正眼塵沙を絶す。象旋獅擲大人の境、一會の靈山春花に在り。筆、左眼に點じて云く、「錯。」右眼に點じて云く、「錯。」頂門一隻に點じて云く、「果然果然。」

三島江眞光寺本尊彌陀如來の開光

青山綠水無量壽、玉兔金烏雙眼睛、當處に豁開す。安養界、霜に傲る黃菊一場の榮。夫れ以れば、末劫濁亂願海澄清、枳里俱の三字の義を合して、上中下九品の名を分つ。枯木の形段淵黙の雷聲は、四倒八邪を利濟して、諸

- ①立地。地に立つ、地の上不起するの意、又立地說法といふ如き場合、又立ちどころ其の場にてなどいふ意にて、立地成佛などいひ、忽然などに同じ、此所は此の意をとる。
- ②開光。開光明、開光佛事の略、開眼、點眼に同じ。
- ③安養界。九品安養界ともいひ、極樂世界をいふ。
- ④上中下九品。觀無量壽經に、極樂世界の果相を説き、上、中、下に各また上、中、下ありて、總じて九品ありとなす、これその往生の因種に區別あるを以てなり。

有を空盡す。⑤十惡五逆を捨てず、衆生を接取す。右脇は大勢至、左邊は正法明、主と作り伴と作る、弟の如く兄の如し。凡聖同居、西方を十萬億に縮め、神仙の靈境、三島を咫尺程に移す。人々如來地に入り去る、箇々毗盧頂を踏んで行く、也た奇怪也た奇怪。白鼻の崑崙は太平を賀す。山僧別に眞光を點出せん。看よ看よ。寶樹寶臺七重の影、檀門成する日寺門成す。收。

觀音點眼

⑥梵釋天を照す雙眼睛、湯池と作り也た金城と作る、普門八字に打開したる、永く護す吾が山の正法明。

心安淨源居士、法華千部を誦する供養の語

- ④四倒。四顛倒の略、迷界の衆生は明智なき故、常に正理を顛倒して見解するものこれなり、凡夫世間の實相なる非常を常、非樂を樂、非我を我、非淨を淨となすをいひ、二乘及び菩薩の四顛倒は、涅槃の實相なる常を非常、樂を非樂、我を非我、淨を非淨とするなり。
- ⑤諸有。四洲、四惡趣、六欲天、梵天、無想天、那含天、四禪天、四無色天等を總稱していふなり。これを有と稱する所は、これ等の諸界は、因果相續して果中未來の果を結ぶべき因を具有するが故なり。
- ⑥十惡五逆。十惡は十種の惡業、殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪慾、愚癡、瞋恚をいひ、五逆罪とは恩田に違逆し福田に違逆する五種の暴惡なる罪過、五無間業と
- ⑦收。攝取、をさめざるなしの意、つくせりといふが如し。
- ⑧梵釋天。梵天帝釋天の略なり、梵天は印度教の神名にして、彼にありては天地創造の神として諸神の主位を占む、この神は佛教保護の神として、佛教徒によりても信仰せらる、多くは帝釋天と共に佛像の左右に待す。
- ⑨八字は妙法蓮華經普門品をいふ。
- ⑩卵歲。卵はあげまき、小兒の髪結び方なり、七つ八つの年頃をいふ。
- ⑪五味。乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の五つをいふ、之れを阿含、方等、般若、法華、涅槃の五時に配するなり、醍醐は

薩訶世界南瞻部洲、扶桑國攝津州に居住する
奉三寶の弟子藤原朝臣親吉、形俗に處すと雖も、
心は浮圖氏の如し。① 卅歳より日に法華を課す。

寸陰分陰、之れを手にして釋てず、之れを口にし
て輟めず、一部に始りて千部に終る。謂つ可し在
家の菩薩と。也た其の功大なる哉、其の徳至れ
る哉。那由他の舌を以て、説いて塵劫に到るも、

豈に盡す可けんや。夫れ法華は諸佛出世の本懐、衆生成佛の直路、是の故に諸經の中に最も第一た
り。五時を以て之れを配すれば、則ち日午に三更を打す、② 五味を以て之れを分てば、則ち酥酪醍醐と變
す。妙の一字、三世の佛も説き盡さず、歴代の祖も提不起、展ぶるときは則ち天を拄へ地を拄ふ。收む
るときは則ち毫を絶し釐を絶す。妙の妙、玄の玄、不可説不可説、不思議不思議。蓮の華たる、内虚
にして外直なり、五濁の水を出でて心華開發す。之れを清せども濁らず、之れを澄せども清まず。其
の色や也た黄絹幼婦、其の香や也た八百の鼻功德、當體の蓮、譬喩の蓮、色即空、空即色。然らば則ち
妙を離れて蓮無く、蓮を離れて妙無し。開權顯實の花、本迹二門一時に豁開す。伏して冀はくは、心
安淨源居士、這の 經王讀誦の功に憑つて、③ 羊鹿牛に駕せず、頓に火宅を出でて象兔馬を叱起して、

究竟の法理法門と喩ふ。
① 經王。法華經をいふ。
② 羊鹿牛。法華經譬喩品に出
づ、大要に曰く、某長者邸宅
に火災ありしが、小兒等は遊
戯に興して出でざる故、長者
はために門外に羊鹿牛の三車
ありて、汝等な待てりとすか
し、以て小兒等を火宅より救

ひたりといふ、羊車はこれを
譬喩に、鹿車は之れを緣覺に、
牛車はこれを菩薩乘に喩ふ。
③ 華封の三祝。莊子に「華の封
人、堯を祝して曰く、願はく
は男子多かれ、壽多かれ、富
多かれ」と。
④ 石火光中は瞬間をいふ。

直に三乗を超えん。加之、華封を三祝に致し、藤氏を萬世に盛にし、梵釋龍天之れが爲に證明し、
鬼主鬼官之れが爲に合掌せん。然も是の如くなりと雖も、山僧別に七軸を撥轉する底の活手段あり。
居士高く看經の眼を著けよ。八邪の轍を翻轉して、一乗の大車と作す、眞の寶處に到らんと欲せば、
風流當家に屬す。

石塔を建つる語

元來無縫鐵崑崙、塔様分明なり誰れか敢て論せん、① 石火光中高く眼を著けよ、風荷葉を翻して
露團々。

拈香

鼻祖忌

禪と説き道と説く是れ争の端、^①肉を分ち皮を分つて猶ほ未だ寒からず、
梁魏の山河野狐の窟、人をして多少疑團を著けしむ。
廓然の一箇已に絃を離る、面壁弓を挂く八九年、天下今落鵬の手無し、
等間に飛び過ぐ竺乾の西。
野狐跳つて太平州に入り、六宗を破卻し俗流を誑かす、^②熊耳峰高し一
痕の月、空しく隻履を埋めて愁を埋めず。
梁魏の小山河を眇観して、風浪花を捲いて、^③蘆葉過ぐ、大藏五千餘卷の
外、片岡別に一篇の歌有り。
梁魏の山河亂れて麻の若し、果然として賊は貧家を打せず、何の面目有
つてか西に歸り去る、冷笑す江湖の鷗一沙。
神光三拜相當らず、五逆の兒孫錯つて擧揚す、若し西來意旨無しと道は

①拈香。香か拈じて爐に焚くこと。
②鼻祖忌は達磨忌をいふ。
③肉を別つ云々。道副、摠持、道育、慧可は達磨門下の四神足なり、道副、皮を得、摠持、肉を得、道育、骨を得、慧可、髓を得と、便ち道の深淺によりしをいふのみ。
④熊耳峰。祖庭事苑第三に曰く、熊耳嶺は即ち達磨の塔所なり、塔の記に曰く、大師化緣已に擧る、傳法人を得、乃ち錫居して逝く、大同二年十二月五日なり、熊耳山に葬り、塔を起つ」と、後魏の宋雲、

ば、直に須らく東海變じて桑と成るべし。

隻履は西に歸り隻履は東し、九年面壁楚人の弓、今朝拾ひ得て香片と爲す、落葉吹き残す昨夜の風。

這の野狐精丘に首してより、叢林千古宗猷を失す、自家頻に單傳の葉を掃つて、梁王臺上の秋を管すること莫れ。

石上の油麻惡芽を生ず、西來萬里袈裟に裏む、^①真丹闔しと雖も餘地無し、移して扶桑に入つて毒花を開く。

達磨大師千年忌

千年の滯貨祖師の禪、賣弄何ぞ曾て半錢に直らん、^②衲僧辛辣の手に觸著すれば、野狐涎も亦龍涎と作る。

妙心開山忌拈香

香を擧して云く、開山の梅は臘天に向つて開く、雪に和して一枝拈出し來る、只だ兒孫五逆を消するが爲に、臥龍奮迅して雲雷を起す。大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺、大永元年臘月十二日、山門伏して開山師祖關山大和尚、^③瘞履の辰に値ふ。鐘を鳴し衆を率ひて、微笑塔下に就い

使を來じて葱嶺に於て師の手に隻履を携へて往くに遇ふと、依つて塚を發いて見れば、柳中只だ隻履の存するのみと。
①蘆葉過ぐ。達磨初めて梁の武帝に相見して、問答應對するに機宜投合せず、依つて遂に江を渡りて、北の方魏の國に向つて去れり。傳燈錄に其の渡江を記して、葦一葉を折りて揚子江を渡り、梁を去ると。
②野狐の精魅なり、化けものなり、他を抑下して評する語、また意に托上して用ふること少からず。
③真丹。雲丹、又は霞且と書す、支那をいふ。
④瘞履。瘞はうづむこと、履を埋むにて屍を収むることをいふ。

て、殿に香華燈燭非薄の禮奠を備へ、同音に大佛頂萬行首楞嚴神咒を諷演する次で、住持比丘宗休、這の崑崙耳を割いて、聊か小香材と作し、慈蔭に上奉し、以て涓埃に充つ。餘薫必ず三際に亘り、九垓に遍からん。共しく惟れば、大和尚活機電轉じ、微笑春回る、正法眼藏を凌滅し、本分の鉗鎚を賣弄す。國師に嗣いで兩朝の帝王に謁す、捲輪冠無憂履、風顛を愛して四海の英精を罵る。單傳の器、直指の才、御爐の煙、袈裟角に裏み、方丈の雨、錦繡堆に酒ぐ。全く他力に依る。聖胎を長養す、異代名を同じうして、百千の林際を七歩に屈す。透關眼を具して、大小の雲門を半杯に空す、坐來星彩收り、月華散す。喝下地軸折け、天柱摧く。信州の海棠花遅し、故園憶ふこと有り、吳宮の野草、綠老いたり。徑路無媒、郊麟逃れ藪鳳竄る、夜鶴怨み曉猿哀む。再來何の時ぞ、且く祖塔の紅瑪瑙と變するを待つ。示寂斯の日未だ吾が山の碧崔嵬を露すを見ず。蓋し左に相ぐ者は、呂の爲にす、風に趨る底は、隗よりす。讎に酬ゆるときは、則ち頭綱八餅、恩に報するときは、則ち熱鐵數枚、恩に報するが是か饑に酬ゆるが是か。更に道へ、更に道へ、快哉快哉。香を以て爐に挿んで云く、「猶は霜に傲る一莖の菜有り、牀脚下に向つて手づから栽培す。因。」

鄧林和尚入牌祖堂

大永二年十一月二十五日

牌を拈じて云く、「列聖叢に賈本の碑無し、諸方莫教あれ海蝶兒、鼈山一夜同參の話、雪梅花に在り誰にか説向せん。共しく惟れば前任當山第十七世鄧林法兄大禪師、通方の作者、見處師に過ぎたり。蚤く京兆の幕府を辭し、晩に百丈の叢規を董す。鹿塵刹刹、熾然說法、巍巍堂堂、肅如たる威儀、祖月禪風、遠磨氏の倭歌の體を學ぶに效ふ。怪巖奇石、寒山子の梵語の詩を題するに擬す。毎に百則の公案を評して、痛く八教の關梨を罵る。鸞鳳を雲間に望む、泰華峯仰げば彌々高し、龍蛇を格外に辨す、溜瀼の水嘗めて之を知る。上根中松下根の群裕を接し、正法像法末法の住持と稱す、賓主互換、棒喝交馳す。御園春回る、艸色染め成して藍樣翠かなり。先廬秋晩れ、盧橘花開いて楓葉衰ふ。瞎拄杖正に好し、力を著くるに、爛枯柴檢束して知に酬ゆ。若し驢胎馬腹の内に入らずんば、何ぞ其れ鵲噪鴉鳴の時を了せん。錯錯。且く道へ、世尊金襴を傳ふる外、別に甚を將つてか大龜に付す。願視して云く、「侍者、平胃散一盞を點じ來れ。」

興宗和尚入牌祖堂

天文四年乙未五月二十一日

這の瞎驢堆瞎漢を容る、百千の臨濟一叢林、後人の標榜山門の境、即ち

① 涓埃に充つ。恩顧の萬分の一を報するの意。
 ② 呂は漢の呂後の族をいふ。
 ③ 郭隗先生をいふ、燕の昭王に事へ、昭王賢者を招くに當り、曰く、王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ、隗すら使へらるなり、以て隗より賢なるものをやと。

④ 鼈山。雪峰義存禪師、師兄岩頭全齋禪師と同行にて紫山に到り、一夜岩頭の提撕により大悟成道せし故事をいふ。
 ⑤ 泰華は泰山及び華山をいふ。
 ⑥ 溜瀼の水。列子に溜瀼の水は味を異にす、されど既に合すれば、其の味を辨知し難し、唯能く味を知る所の鳥牙のみは嘗めて之れを辨知したりと。以て聰明なるもの善く微妙の義理を辨知するに喩ふ。
 ⑦ 興宗和尚。諱は宗松、華嚴瑞龍寺の悟溪頓に參じて、遂に悟溪の印記を受けて、後妙心寺、龍安寺に住す、聲價播越す、豐後の刺史齊藤氏、大寶寺を創め師を請じて開山始祖となす、文龜四年勅命により大德寺に陞る、後、尾張の瑞泉寺に移る、大永三年六月二十一日寂す、勅して大猷臨濟禪師と諡す。

是れ我が家の大寶の箴。共しく惟れば前住當山第二十三世興宗松公大禪師、之れを仰げば佛日彼の傳霖に逢ふ、辛苦十年、汗馬を心地に收む。震驚百里、瑞龍を蹄潑に起す。吾が宗大いに興るの日に際して、由來積徳の陰を感す。上に蘇有り下に蒼有り、諸子密付の志を抱く。梅に始つて棟に終ふ。此の翁已墜の風を回す時、鳥鉢を現す。地、黄金と變ず、眞淨の宗教大珠に類す。横説堅説、虛堂の兒孫東海に在り。以心傳心、明月夜光、多くは劍を按ずるに逢ふ。高山、流水、只だ知音を貴ぶ。者裏還つて祖師有りや麼や、井底に林檎を栽うと道はず。 嘆。

花園法皇二百年忌の香語

曇華再び現す百花園、稽首す。法皇無上尊、是れ恩に報する耶、是れ徳に酬ゆるか、龍涎吐き出す鐵崑崙。

龍泉景川和尚七年忌

扶桑國裏一禪翁、舌龍泉を振つて氣虹を吐く、滿肚の無明七年の雨、三千條の罪落花の風。

特芳和尚十七年忌

恩を知つて今日恩を報することは易く、毒に中つて當時毒を用ふことは難し、將に謂へり先師肉猶ほ暖かなりと、疎籬の殘菊霜を帯びて寒し。

特芳和尚三十三回忌の香語

吾が正法を滅す瞎瞶の漢、項上の鐵枷三百斤、一炷の爐香阿鼻の種、業風吹いて北山の雲と作る。

賢甫宗苗首座七周忌の拈香

「昔時何事ぞ 冤家を結ぶ、蕞地に掀翻す奈落迦、我れに本來の香一瓣有り、風に和して吹き送る七梅花。今茲永正第九仲春二十日、伏して賢甫宗苗首座七周忌の辰に値ふ。厥の徒外記憶乎、山僧に告げて曰く、「洛の北柱蔭の舊廬に就いて、某兄某弟、春色分に随つて、或は花を拈じて佛に供じ、或は柳を折つて僧に齎す。嗚呼、何を以てか涓埃の報と爲さん乎。願はくは師の一偈を請ふ、往いて以て例に隨はん。」也た山野咄して曰く、「一棒一喝、是れ外記の報にあらずや、無言無説、是れ山野が偈にあらずや。無

蹄潑。馬蹄などの跡に水の溜りたるもの。

蘇。れなしがづら、苔は藥草の名。

棟。あふち、高さ丈餘、葉は槐の如く尖り、三四月頃花を開く。

嘆。い、又いい、大呼なり、又笑ふ貌、師家が學人を接待する場合に、法語の結末、意盡き語窮つて發する語、宗門多くは香語、或は引導法語の中間に唱ふ。

景川。諱は宗隆、姓は平氏、伊勢の人なり、幼にして本州の圓明寺に投じて剃具し、初め尾張の瑞泉寺の雲谷禪に參じ、又愚溪寺に義天詔に謁し、尋いで讀鼓慈明庵の桃隱朔に參じ、後、龍安寺に雪江琛に依る、一日入室、問を發せんとして師の一折に逢ひ、豁然として大悟す、大和興雲寺、

伊勢の瑞應寺、京師大心院は、皆師の開山始祖たり、京の妙心、龍安、尾張の瑞泉、丹波の龍興寺、伊勢の大樹寺等に歴住す、文明六年詔を受けて大徳寺に親筆す、明應九年三月朔寂す、本如實性禪師と諡す。

三千云々、師末期の偈に云く、「元本の無明、七十六歳、末後の牢關、三千條の罪」と。

特芳。諱は禪傑、尾張熱田の人、業を妙喜院の瑞石岩に受く、後雪江琛に參じて契悟す、出でて尾張の瑞泉、丹波の龍興寺、攝津の海清寺、京の妙心寺等に遷る、又丹波の龍潭寺を瓶じ、後大徳に隨る、又細川政元聘して龍安寺を董さしむ、永正三年九月十日寂す、大寂常照禪師と諡す。

殘菊。忌日は九月十日、故に景情を叙舒して併せて其の徳

垢稱の曰く、汝に施す者を福田と名けず、汝を供養する者は三惡道に墮す。外記外記、恩に報するや、隣に報するや、以て加ふること蔑し焉。然りと雖も、乞うて報めず、遂に香語を唱へて請に酬ゆる者なり。夫れ惟れば某名、古道の顔色、宗門の爪牙、洋嶼の黃楊の禪に參するときは、則ち二十年辛苦を喫す。松源の黑豆の法を用ひるときは、則ち三千里誦誦を見る。志鴻鶴を凌ぎ、眼龍蛇を定む。蓋し首座說法如何。晝は閑淨、夜は兜率、而して先師の公案未了なり。水は黃河、山は太華、餘波左右に及ぶと雖も、殘夢袈裟に裹み難し。春風樓下生前の酒を愛し、水晶簾中睡後の茶を煎す。加之、七歩の臨濟を罵倒し、一宿の永嘉を驚起す。歸去來歸去來、天は白雲と共に曉け、沒交涉沒交涉。泉は石徑を衝いて斜なり。此れは是れ賢甫首座の無盡藏陀羅尼三昧なり。別に後昆を覆蔭する底の句を要す、諸人試みに檟桂新芽を長するを看よ。香を以て眞を指して云く、「幸字脚し過沙、石上に油麻を種う。唧唧。」江南釋宗休和南。

前住普門月心照公座元二十三年忌の香語
 「雜華を按ずるに人間に香有り、名けて象藏と曰ふ。龍の鬪に因つて生

に比するなり。
 ① 梁風。衆の力に煽られて、惡處に苦を感ずるを狂風に譬へていへるなり。大乘義章には、「樂力風の如く、諸の衆生を吹いて惡處に苦を受けしむ」とあり。
 ② 冤家。仇敵といふが如し、心に忘れられざるの意に用ふ。
 ③ 永嘉。永嘉玄覺禪師、曹溪に參じ、一宿して大悟徹底す、時に學者輻輳し、眞覺大師と號す、先天二年十月寂す、無相大師と號す、證道歌一篇、永嘉集十篇あり。
 ④ 鶴嶺。眞嶺、渾淪などに同じ、崑崙山の略、又は崑崙國、又物の渾然として未だ分割せざるをいふ、又人の頭をいふ場合にあり、又混沌未分時の意に用ふ。
 ⑤ 曼陀羅華をいふ。
 ⑥ 三摩地。梵音サマドヒ、等

す、若し一丸を焼けば、即ち大香雲を起して、王都に彌覆す。七日の中に於て、細香雨を雨ふらす。香を擧して、山僧亦那一香有り、生鐵鑄成す底の鶴嶺、之れを未兆の先に得たり、即今鈍碎し將ち來つて兜羅綿よりも軟かなり。大慈雲を白花巖に起すときは、則ち猗蘭四十里の臭氣を退く。小曼陀を金粟室に澗ぐときは、則ち蟾桂五百丈の芳鮮を奪ふ。上碧落を穿ち下黃泉に徹す。鶴嶺即ち象藏、象藏即ち鶴嶺。一回這の香氣に觸る者は、三摩地より普門に入得す、諸人還つて入得すや麼や。別々。綠楊畫暗し鷓鴣の烟。大日本國攝州路慈雲山普門禪寺守塔比丘聖安、維時享祿三年龍庚寅に集る。孟陬二十七日、山門茲に前住當山月心照公座元禪師三十三白遠忌の辰を迎ふ。庚に先つこ

持と譯す、又正心行處ともいふ、實を修すれば、心一境に住して動かざる故に名づく。
 ② 普門。法華經二十八品中の第二十五品に見はれたる觀世音菩薩普門品の所説の抽象的約語なり、この品の中には兩番の問答あり、前者は觀世音を論じ、後者は普門の法を論ず、實相の法は、圓法なるが故に一切に周遍す、故に普といふ、又實相の法は、非空、非假の中道なるが故に、能く空假の二諦を雙照し、致て塞がることなし、故に門と名づく、依つて普門の意を知るべし。
 ③ 孟陬。陰曆正月をいふ。
 ④ 函丈。方丈ともいふ、禪室のこと。
 ⑤ 如干。若干に同じ。
 ⑥ 水月懺悔。懺悔のこと、懺悔に二種あり、理の懺悔、事の懺悔、水月は理事をいふなり。

⑦ 水陸會。悲濟會ともいふ、施食會、施餼鬼會の別稱、普通水陸會を以て施餼鬼會の別稱とすれども、本來は水陸會と施餼鬼會とは其の所由を異にせり、委しくは釋門正統、釋氏資鑑等に見ゆ。
 ⑧ 觀。梵語達觀の略、具には達觀擊といひ、或は駄毘尼と書く、譯して財施、又は檀施といふ、布施物のことなり、觀を撰、又は觀に作る。
 ⑨ 白傘蓋無上神呪。楞嚴呪を異稱して云ふ、即ち八句の陀羅尼なり。首楞嚴經に云く、我佛頂光明摩訶薩怛多般怛無上神呪を誦せよ」と、溫陵會解に曰く、「摩訶薩怛多般怛羅、此に大白傘蓋といふ、即ち藏心なり」と。
 ⑩ 六道能化。六道の迷界に沈淪する衆生を化度する菩薩のこと、六觀音、六地藏の如きは

と七日、^①函丈に就いて諸般の善利を修し、當忌の佛の尊像を彫刻するも一軀、經王妙典を讀書するもの。如干部、^②水月懺摩を修禮する者一場、水陸淨供を施設する者一會。今散筵に當つて、香花燈燭茶果珍饈の儀を營辨し、佛に供じ僧に^③賑す。仍つて現前の苾芻衆を集めて、異口同音に白傘蓋無上神咒を誦演するの次で、手を洛下退藏の野浴宗体に借つて、^④這の一擲を焚いて本師釋迦牟尼善逝、濡首・徧吉の二菩薩、今日の教主香集世界の菊光佛、現座道場の正法明如來、^⑤六道能化の舅々和尚、三世十方の諸佛薩埵乃祖大覺禪師、三國傳燈列祖師、天主・地神・水族・山靈・一切の含識等に供養し奉る。伏して冀はくは、覺靈、這の薰染に沐して、^⑥黨も無く偏も無く、冤親平等證行同圓ならんことを。夫れ惟れば、月心座元禪師、蚤に講肆に遊び、晩に歸田を賦す。知識は優曇華の如し、本朝始めて大覺の徽號を賜ふ。首座は僧中の月たり、季運幸に無明の正傳を得たり。其の出興也、世尊滅後、其の行道也、^⑦威音已前、闍市、喧を厭ふ、黃塵・烏帽・伽黎・勃窣・間房に老を投ず。青山素髮孤榻蕭然、毎日に經を課して坐し、長夜夜、佛を抱いて眠る。秀鐵面を圓通に仰ぐ、戒乘俱に急なり。照

れなり、能化は所化の對語にして化主の意とす。
^①亡者の靈をいふ。
^②天地未生前に於て已に世のうるさいことを厭ふてなり。
^③廣大無邊の義。洞山大師支中銘に「觸目荒林年を論する放曠」と、蓋し放曠は方廣に同じ。
^④老樸は芒鞋に同じ。
^⑤馬鳴は如來傳第十二祖、馬鳴尊者なり、梵音「アシュヴァグホーサ」、阿濕縛羅沙、阿那菩提は其の轉訛なり、大乘起信論は實に尊者の造出なりと傳ふ、周の顯王四十二年寂す。龍樹尊者は傳燈第十四祖、梵名那伽闍利樹那、龍猛又は龍勝と譯す、宗門傳燈の祖たるのみならず、八宗の祖師と崇めらる、大智度論百卷、十住毗婆沙論十七卷、中論四卷、十二門論一卷等の著あり。

白眉を^⑧方廣に推す、名實兼ね全し。或時は短袈衣を著て、早梅を前村の雪裏に探り、或時は生苾芻を拈じて落葉を夕陽溪邊に掃ふ。南方の佛法如何、桃紅李白薔薇紫、西來の祖意會すや麼や。^⑨芒屨・竹杖・布行纏・分身・散影・塵塵爾、刹利爾。放光動地、煒煒焉たり、煌々焉たり、休休休。^⑩馬鳴龍樹千論未だ盡さず、錯錯錯。鹿野鶴林一字宣せず、初發心に正覺を成す、真如の性、變遷を絶す、蚯蚓東海を抹過し、螻蛄坤乾を吞卻す。然も潛變なりと雖も、^⑪向上の牙爪を見んと要せば、祇夜一篇を聴取せよ。山中無角の老 烏髯、高臥安眠三十年、忽ち金毛の活獅子と化す、一聲吼裂す率陀天。^⑫喝一喝す。

大藏開基華屋宗榮尼首座三十三年忌の香語

「這の老婆我れに於て太だ賒なり、多年香燭裂竅に裏む。香を擧して、^⑬如かず寶爐に挿向し去つて、芙蓉八月の花に供養せんには。大日本國河州路茨田郡多福山大藏禪寺住持苾芻尼宗玖、維時享祿二載八月十冀、伏して當寺中興華屋宗榮尼首座三十三白の遠諱の辰に値ふ。適ち函丈に就いて梵筵を修飾し、菊光佛、彫刻する者一軀、僧叡筆授の^⑭經王、印書する者若干、西湖の遊式、製する所の^⑮圓通妙懺、修する者一座、^⑯三摩耶形、造立する者一基、作善の件々の品目、

⑧ 烏髯は去勢されたる黒牛、月心禪師に比するか。
 ⑨ 芙蓉は宗榮尼に比するなり。
 ⑩ 法華經を經王といふ、一に純圓獨妙王經ともいふ。
 ⑪ 圓通妙懺は觀音懺法をいふ。
 ⑫ 諸佛菩薩の本誓を現したる形をいふ、五股杵、蓮華刀、三股杖等なり、不動明王は劍、寶生如來は寶珠、藥師如來の藥壺の如きは是れなり。諸佛菩薩の出生を觀する時は、種子より三摩耶形を出生し、三摩耶形より尊形を顯現すとすを以て、同一尊にても四種法によりて同じからず。

維那寫して之れを讀む、重ねて擧するに勞せず。香華燈燭茶果珍饈の化儀を度備し、供佛僧の大會を設く。仍つて現前の清淨衆清淨尼を拜屈して、^①大佛頂光聚悉怛多般怛羅無上神咒を誦演するの次で、手を花園の体上座に借つて、^②兜樓一瓣、寶爐に燕向して、本師釋迦牟尼善逝、濡首徧吉の左輔右弼、當來補處の慈氏尊、西方無量壽佛、世音勢至二脇士、^③六道能化の願王佛、當忌の至尊香集世界の能滿、^④虛空藏菩薩、三世歴代の乃佛乃祖、或は天或は鬼、一切の含識等に供養し奉る。郁郁乎として黄泉に徹するときは、則ち沈水よりも清し、靄靄然として碧落を穿つときは、則ち紅霞よりも濃なり。伏して願はくは覺靈斯の薰力に憑つて、五百由旬の險道を歷すして、一乘の寶所に至り、頓に四倒八苦の火宅を出でて、^⑤三種の寶車に駕せんことを。娑婆即ち是れ華藏寂光、豈に伽耶を離れんや、則ち箇。夫れ惟れば華屋宗榮尼首座、榮、閭里に輝き、富、屋家を潤す。逆行順行、鉞鋒世界に入つて、足を翹て佛境魔境、蒲團庵内に坐して結跏す。其の徳也、燕金の價あり、其の名也、趙璧瑕無し。雲は北嶺、梅は南枝、再び曹溪の宗を興して、八十生の大鑑祖を曠す。朝に西天、暮に東土、重ねて兜率の夢を續いで、第二位の小釋迦と稱す。脚下の紅線を截斷し、項上の鐵枷を脱卻す。清風起つて、忽

① 首楞嚴神呪の異名。

② 兜樓は細香と譯す、香を云ふなり。

③ 彌藏菩薩をいふ、地藏を供養するものは一切の願を成就すと。故に地藏願王菩薩といふ。

④ 虛空藏菩薩、梵には阿迦捨揭婆耶といひ、虛空藏と譯す。一切の香集世界にあり、實相の智慧虛空の如く、虛空法界に於て、事として悟り得ずといふことなしと。

⑤ 牛羊鹿の三車をいふ、前に見ゆ。

然忽然。^①韓に投じ葉を送る、殘暑去つて、端的端的。宿を捲いて茶を煎す、萬機休罷、生涯を喪盡す。三十年前、凡を轉じて聖と成し、聖を轉じて凡と成す。涅槃を雙樹に證して、五蘊の漏質を示す。三十年後、教を離れて禪無く、禪を離れて教無し。大藏を少林に開いて、^②四卷の楞伽を傳ふ。解脱の毒海を踏翻し、無明の塵沙を淘汰す。時節因緣廣寒の桂、半輪は圓に、半輪は缺く。當陽直指多福の竹、一莖は曲り一莖は斜なり、黒漫漫地強ひて些些を納る。香を以て指して云く、「老牯牛汝來也、甚麼としてか巴鼻沒き、他の苗稼を犯さず、他の木叉を受けず、左旋右轉、犁を牽き把を拽く。叱。」^③今日臺山の大齋會、香嚴童子無遮と叫ぶ。

大藏住持明室宗玖尼首座三十三忌 預修供養の語

「刹那三十有三霜、不動尊に始つて菊光に終ふ。老婆心切の處を識らんと欲せば、炎天の梅葉一爐の香。薩訶世界南瞻部洲、大日本國河州路茨田郡大藏禪寺住持明室宗玖尼首座、預め三十三回忌の冥福を修す。仍つて當忌の尊虛空藏菩薩の像を彫刻するもの一軀、圓通妙懺を修禮すること一座、供佛齋僧、善を盡せり矣。天文五年丙申六月初吉、宗休小比丘に命じて、

① 單のたれめの、單張をいふ。

② 正宗記によれば、二祖慧可、得法の後、達磨は楞伽經を彼に付囑したとある、其の文にいふ、「復た慧可に謂ふて曰く、此に楞伽經四卷なるものあり、蓋し如來極めて法要を談す、亦以て世の與に開示悟了せしむべし、今竝に汝に付す」と、達磨禪なるものは全く此の經から來たものと言はれて居る程、達磨と密接の關係を有するものである。

③ 月宮殿の桂の木を云ふ、傳説によるなり。

④ 鴻山下の老尼、劉鐵磨を云ふ、即ち宗榮に比するなり。

⑤ 鐵磨孛牛の公案に、「鐵磨、鴻山に至る、山曰く、老牯牛汝